伯太町埋蔵文化財調査報告書 第３集

伯太町安田地内試掘調査報告書

カウカツ遺跡・高広遺跡・高広谷遺跡
小赤はだ遺跡・鉢伏城遺跡・丹部遺跡

平成４年９月

島根県能義郡伯太町教育委員会

序

私達が日々の生活を営むなかで、ふと未来の事を想うと同時に、遠い先祖がいつ頃からこの地方に定着したのか、或いは、どの様な住居で暮らし、また、何を生産していたのかなど、想いは弥生や縄文、或いは、それ以前の先土器時代に遡ることができます。

平成４年１月に開始した安田地内ゴルフ場建設予定地の埋蔵文化財試掘調査は、伯太町で初めて出土した弥生時代の土器や墓をはじめ、古代の住居跡まで数々の貴重な遺跡や遺物が発見されました。

これらを記録し、まとめたものが本報告書であります。

皆さんが、この報告書により少しでも埋蔵文化財を含め、先人の残した文化財に関心を寄せて戴くことが出来れば幸です。

最後になりましたが、この試掘調査に計画から調査、そして、執筆まで携わり御協力頂きました関係各位に対し厚くお礼申し上げ序文といたします。

平成４年７月

伯太町教育委員会

教育長　**野々村衍泉**

例　　言

1．本書は、伯太町安田地区内に計画されたゴルフ場予定地に伴う試掘調査報告書である。

2．本書に収載した遺跡名は、字名をとって命名したものである。

3．分布調査体制は以下の通りである。

調査指導　丹羽野　裕（島根県教育庁文化課）
　　内田　律雄（島根県教育庁文化課）
調査担当　東森　市良（日本考古学協会会員）
　　江川　幸子（文化財調査員）
調査協力　花田　明巳（伯太町教育委員会社会教育係長）
　　井上　博（伯太町総務課主任技師）・若田　勝美
　　渡　貞夫（伯太町総務課主任）・渡部　美鈴

4．調査体制は以下の通りである。

調査指導　川原　和人（島根県教育庁文化課主幹）
　　丹羽野　裕（島根県教育庁文化課主事）
　　角田　徳幸（島根県教育庁文化課主事）
調査主体　伯太町教育委員会
調査主任　東森　市良（日本考古学協会会員）
調査員　松本　哲（伯太町教育委員会嘱託）
調査員　妹尾　秀樹（伯太町教育委員会主任）
事務担当　花田　明巳（伯太町教育委員会社会教育係長）
調査参加者　大西　清達・宇名手盛男・小松原倭志・岡本　和子・長谷川　良
　　平山　忠義・山本　輝子・山本　誠・松井　勝枝・黒田　清子
　　稲田　貞男・長瀬　富夫・小山　和樹・黒田　節雄・細田　泰徳
　　門脇　威・松岡　幸広・田淵　恭子・寺田　範江・山田　村子
　　稲田　房子・浜崎喜美子・妹尾　豊寿・山本　薫・赤井　秋子
　　遠藤　清・高木　正之・松本　光・松本　良子・船越　典子
整理参加者　福田　寛子・遠藤　洋子・川本美佐子・松本美恵子

5．現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導・助言をいただいた。

山本　清（島根県文化財審議委員）・渡部　貞幸（島根大学法文学部教授）
松本　岩雄（島根県古代文化センター所長）・宇垣　匡雅（岡山県教育庁文化課）
寺井　毅（中世城郭研究会会員）・内田　雅己（広瀬町教育委員会）
中原　斉（鳥取県埋蔵文化財センター）・井上　貴央（鳥取大学医学部教授）

6．本書の執筆・編集は東森・松本・妹尾が行った。
　なお、浄書については福田・遠藤・川本が行い、松本が補足した。
7．出土遺物は伯太町教育委員会が保管している。

本　文　目　次

序

例　言

目　次

第１章　調査の経緯 …… 1

第２章　位置と環境 …… 1

第３章　分布調査の結果 …… 7

第４章　調査の概要 …… 10

第５章　調査の結果 …… 11
　第１節　カウカツ遺跡 …… 11
　第２節　高広遺跡 …… 27
　第３節　高広谷遺跡 …… 29
　第４節　小赤はだ古墳群 …… 49
　第５節　鉢伏城遺跡 …… 53
　第６節　丹部遺跡 …… 67

第６章　小　　括 …… 72

挿　図　目　次

挿図１　伯太町遺跡分布図 …… 3
挿図２　伯太町安田地区調査区域並びに日本直角座標値位置図 …… 5～6
挿図３　カウカツ遺跡トレンチ位置図 …… 14
挿図４　カウカツＥ－１の１号墓地形測量図並びにトレンチ配置図 …… 15
挿図５　カウカツ遺跡第１・２・３・４・５トレンチ遺構図 …… 17～18

挿図６　カウカツ遺跡第３・６トレンチ
（カウカツＥ－１の１号墓）西側貼石検出状況 …… 16
挿図７　カウカツ遺跡Ｅ－１の１号墓墳丘盛土上土器出土状況図 …… 19～20
挿図８　カウカツ遺跡第１・２・３・４トレンチ
（カウカツＥ－１の１号墓）出土遺物実測図 …… 21～22
挿図９　カウカツ遺跡第10（左）・第12（右）トレンチ遺構図 …… 23
挿図10　カウカツ遺跡第13（上）・第14（中）・第15（下）トレンチ遺構図 …… 23
挿図11　高広・高広谷遺跡トレンチ配置図 …… 30
挿図12　高広遺跡第１・２・８・９トレンチ遺構図 …… 28
挿図13　高広谷遺跡Ｏ区第６トレンチ遺構図 …… 31
挿図14　高広谷遺跡Ｏ区第７トレンチ出土遺物実測図 …… 31
挿図15　高広谷遺跡Ｏ区第９トレンチ遺構図 …… 31
挿図16　高広谷遺跡Ｏ区第10トレンチ遺構図・遺物実測図 …… 32
挿図17　高広谷遺跡Ｅ区第１・２・３・４トレンチ遺構図 …… 34
挿図18　高広谷遺跡Ｅ区第１・２・３・４トレンチ出土遺物実測図 …… 35
挿図19　高広谷遺跡Ｅ区第５トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 36
挿図20　高広谷遺跡Ｅ区第６トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 37
挿図21　高広谷遺跡Ｅ区第７トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 38
挿図22　高広谷遺跡Ｅ区第９トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 39
挿図23　高広谷遺跡Ｅ区第10トレンチ遺構図・出土遺物実測図① …… 40
挿図24　高広谷遺跡Ｅ区第10トレンチ出土遺物実測図② …… 41
挿図25　高広谷遺跡Ｅ区第11トレンチ遺構図 …… 41
挿図26　高広谷遺跡Ｅ区第11トレンチ遺物出土状況図・遺物実測図 …… 43～44
挿図27　高広谷遺跡Ｅ区第11トレンチ出土遺物実測図 …… 42
挿図28　小赤はだ古墳群トレンチ配置図 …… 50
挿図29　小赤はだ古墳群第２トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 51
挿図30　小赤はだ古墳群第３トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 51
挿図31　鉢伏城遺跡トレンチ配置図 …… 52
挿図32　鉢伏城跡郭配置図 …… 54
挿図33　鉢伏城遺跡地形測量図並びにトレンチ配置図 …… 55～56
挿図34　鉢伏城遺跡第１・２トレンチ遺構図 …… 58
挿図35　鉢伏城遺跡第２トレンチ北西側遺構図・出土遺物実測図 …… 59
挿図36　鉢伏城遺跡第３・４トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 60
挿図37　鉢伏城遺跡第６トレンチ（左）
第７トレンチ（右）遺構図・出土遺物実測図 …… 61～62

挿図38　鉢伏城遺跡第９•10トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 61～62
挿図39　鉢伏城遺跡第11トレンチ遺構図 …… 63～64
挿図40　鉢伏城遺跡第12トレンチ遺構図 …… 63～64
挿図41　鉢伏城遺跡第17トレンチ遺構図 …… 63～64
挿図42　鉢伏城遺跡第18・19トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 63～64
挿図43　鉢伏城遺跡第20・21トレンチ遺構図 …… 63～64
挿図44　丹部遺跡トレンチ配置図 …… 66
挿図45　丹部遺跡第６トレンチ遺構図 …… 68
挿図46　丹部遺跡第８トレンチ出土遺物実測図 …… 68
挿図47　丹部遺跡第10トレンチ（左）・第11トレンチ（右）遺構図 …… 69
挿図48　丹部遺跡第11トレンチ出土遺物実測図 …… 69
挿図49　丹部遺跡第２トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 70
挿図50　丹部遺跡第13トレンチ遺構図・出土遺物実測図 …… 70
挿図51　丹部遺跡第14トレンチ遺構図 …… 70

挿　表　目　次

挿表１　伯太町遺跡一覧表 …… 3
挿表２　調査区周辺第Ⅲ系日本平面直角座標値一覧表 …… 3
挿表３　分布調査結果一覧表① …… 8
挿表４　分布調査結果一覧表② …… 9
挿表５　カウカツ遺跡出土遺物観察表① …… 24
挿表６　カウカツ遺跡出土遺物観察表② …… 25
挿表７　カウカツ遺跡トレンチ一覧表 …… 26
挿表８　高広遺跡トレンチ一覧表 …… 27
挿表９　高広谷遺跡Ｅ区出土遺物観察表① …… 45
挿表10　高広谷遺跡Ｅ区出土遺物観察表② …… 46
挿表11　高広谷遺跡Ｅ区・Ｏ区出土遺物観察表③ …… 47
挿表12　高広谷遺跡Ｏ区・Ｅ区トレンチ一覧表 …… 48
挿表13　小赤はだ古墳群出土遺物観察表 …… 65
挿表14　小赤はだ古墳群トレンチ一覧表 …… 49
挿表15　鉢伏城遺跡出土遺物観察表 …… 60
挿表16　鉢伏城遺跡・鉢伏城南区トレンチ一覧表 …… 65

挿表17　丹部遺跡出土遺物観察表 …… 71
挿表18　丹部遺跡トレンチ一覧表 …… 69

図　版　目　次

図版１　カウカツ遺跡Ｅ－１の１号墓(1)
図版２　カウカツ遺跡Ｅ－１の１号墓(2)
図版３　カウカツ遺跡２－Ｔ・15－Ｔ
図版４　高広谷遺跡Ｏ区１～４Ｔ・６・８・９－Ｔ
図版５　高広谷遺跡Ｅ区６－Ｔ・10－Ｔ
図版６　高広谷遺跡Ｅ区11－Ｔ（上）・小赤はだ古墳群１－Ｔ（下）
図版７　鉢伏城遺跡Ａ区１・２・３・４－Ｔ
図版８　鉢伏城遺跡Ａ区２・11・14・16－Ｔ
図版９　鉢伏城遺跡Ａ区７・９－Ｔ・Ｂ区18・19－Ｔ
図版10　丹部遺跡６－Ｔ・８－Ｔ
図版11　カウカツ遺跡出土遺物
図版12　高広谷遺跡Ｏ区・Ｅ区出土遺物
図版13　高広谷遺跡・小赤はだ古墳群・鉢伏城遺跡出土遺物
図版14　丹部遺跡出土遺物

第1章　調　査　の　経　緯

伯太町大字安田から大字未明に跨る138haの丘陵地に、ゴルフ場建設が計画された。これにより、その予定地域、並びに周辺の遺跡について調査する必要性が生じた。伯太町教育委員会は、とりあえず県教育庁文化課に予備の分布調査を依頼し、平成２年９月28日に踏査が行われた。その結果、丘陵尾根上に古墳状の高まりが多数認められるとの回答があり、再度、計画的な分布調査が行われた。平成３年１月16日から１月23日の間である。この２回の分布調査により、尾根上で53基に及ぶ古墳や砦跡、数箇所の山裾部で遺物が採集された。これをうけて伯太町教育委員会は、県教育庁文化課と協議し、遺構の分布範囲・性格を確認することを目的に試掘調査（第１次試掘調査）を行った。

現地調査は、平成４年１月６日から４月６日の間である。

試掘調査は、明らかに古墳と認められる所を除いた尾根上の平坦面や古墳の疑いがある高まり、あるいは山裾部の平坦面を中心にトレンチによる試掘方法をとった。また、砦跡の調査については、現況でも連郭式の形態をとることが認められたが、その性格を追及する為に行った。その結果、墳丘墓・古墳・集落跡・砦跡等多数の遺構が確認された。

第２次試掘調査は、第１次試掘調査でなし得なかった丘陵奥部の尾根上平坦面や山裾部平坦面で行い、山裾部で集落を確認した。平成４年５月29日から６月29日の間である。

なお、今回の試掘調査は伯太町では初めての大規模なものであり、その成果も多大なものと言える。

（妹尾秀樹）

第2章　位　置　と　環　境

伯太町は北は安来市、東は鳥取県西伯町、南は鳥取県日南町、西は広瀬町及安来市、と接する。その中心を伯太川及びその支流がながれ、それをはさむようにして成立した沖積地が居住区をなしており、遺跡も主としてこの低地及び河岸段丘上に立地する。その中にあって特色のある地形は井尻地区の比婆山と赤屋地区の上の台で、比婆山はかつてのイザナミノミコトの神陵伝説地であり、上の台は標高330ｍの高地であるが多数の後期古墳が群集する所として知られている。

遺跡は弥生時代以降、特に古墳時代において多数分布するが、伯太町を形成する安田、母里、井尻、赤屋の四地区をみると前二者と後者でいささか異なり、古墳時代後期において横穴式石室を有する古墳から点在するのは井尻地区より奥で、安田、母里地区では横穴式石室は余りみられず、箱式石棺、横穴が主体をなしている。また前方後円墳についてみると、いずれも安田、

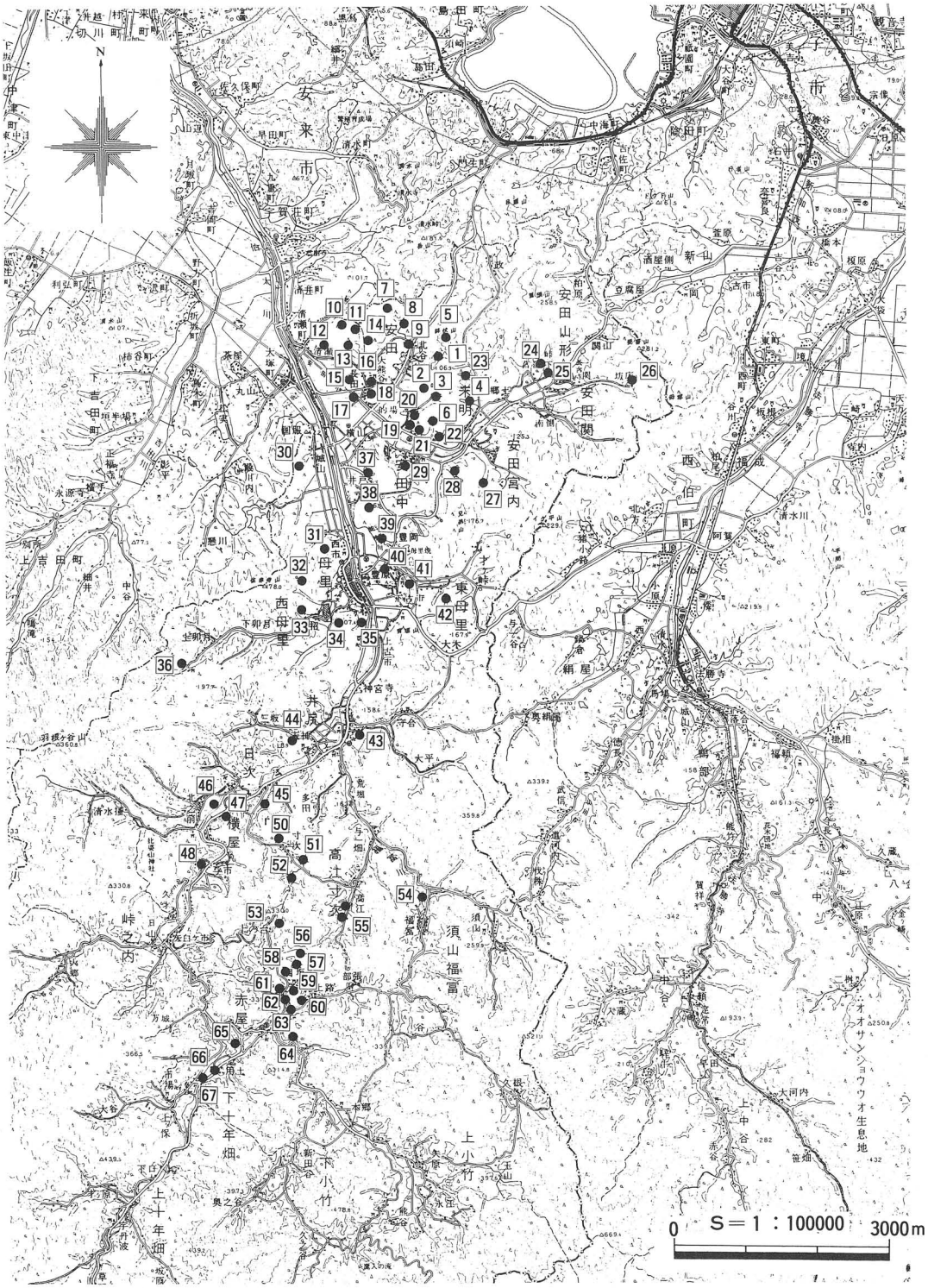
母里地区に所在し、安田地区に４基、母里地区に14基を数える。規模は全長で38ｍから11ｍと小さいが地域の首長墓として考えるべきであろう。

ところで、ここで安田地区をみると周知の遺跡では田面崎遺跡の弥生時代中期にはじまり、中山横穴等の古墳時代後期に終る。特に中山横穴からは圭頭大刀が出土しており、実用の馬具残欠もあって注目される所である。そして安田中の長尾古墳から出土した須恵器器台は古式に属し、すでに川原和人氏によって報告されているが、朝鮮半島との関係が深いものとして注目される。

今回調査の対象になったゴルフ場予定地には分布調査の結果、中世以降の鉢伏城跡、カウカツ古墳群、高広古墳群等が所在することが明らかとなった。中でもカウカツＥ－１の１号墓は弥生時代後期の方形の四隅突出型墳丘墓で、墳頂部に吉備の立坂型特殊土器をともなっている。また、高広谷遺跡は階段状に斜面を加工し集落を形成していて注目される。古墳時代初頭から８世紀に及ぶ。

今回はいずれもトレンチ調査であり、しかも古墳と明らかにわかるものは除いているが以上のごとく、これまで明らかとなった当地の古代を知る遺跡が周知のもの以外に明らかとなったことは大きな意義がある。

（東森市良）



挿図１　伯太町遺跡分布図

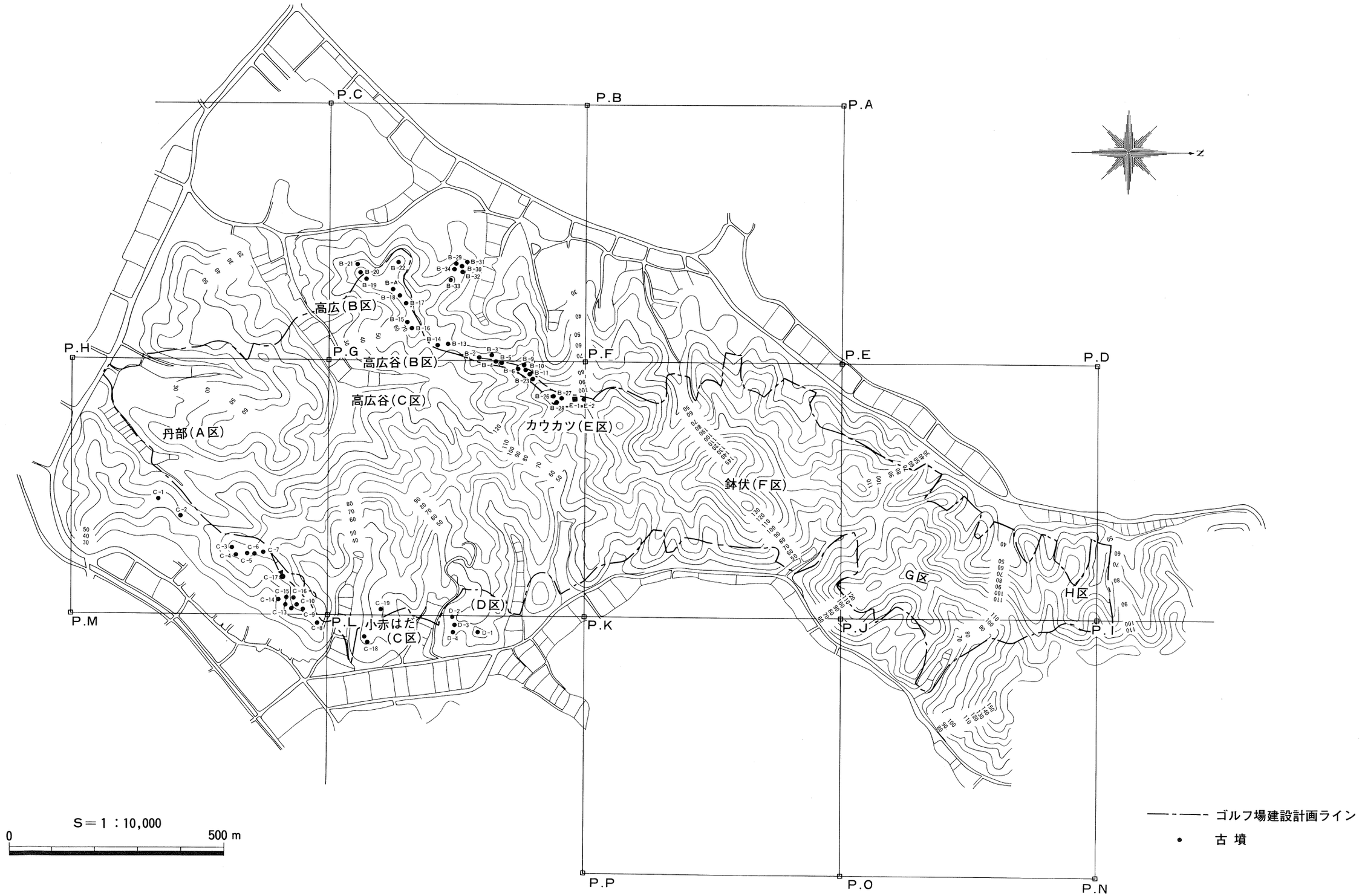
挿表1　伯太町遺跡一覧表

1	カウカツ遺跡	24	御戸古墳群	47	上稲田古墳
2	高広遺跡	25	丸山古墳	48	横屋丸山古墳
3	高広谷遺跡	26	坊床横穴群	49	矢原古墳
4	小赤はだ古墳群	27	宮内古墳群	50	唐樋宅裏古墳群
5	鉢伏城遺跡	28	長尾古墳群	51	上塚田古墳
6	丹部遺跡	29	大森神社遺跡	52	垣の内遺跡
7	真の谷古墳	30	城山古墳群	53	上の台遺跡
8	穴ケ峠古墳	31	極楽寺山古墳群	54	塚田古墳
9	長田八幡宮横穴	32	御殿山古墳	55	岩屋谷古墳群
10	金掘古墳群	33	招古墳群	56	日向尾根古墳
11	髭濡古墳群	34	御笠古墳群	57	日向峰古墳群
12	虫尾遺跡	35	釜谷古墳群	58	森木峰古墳群
13	文珠山古墳群	36	佐古横穴群	59	小松伏古墳群
14	御崎山古墳	37	井戸古墳群	60	天神堀古墳群
15	長田古墳	38	五反田古墳群	61	穴畑峰古墳群
16	中山横穴	39	中山古墳群	62	小丸子山古墳群
17	田面崎遺跡	40	亀遊山古墳群	63	のろ山古墳
18	横手古墳	41	神宮寺古墳群	64	比田啓三郎氏裏横穴
19	石堂古墳群	42	守納古墳群	65	赤屋城山古墳群
20	替地遺跡	43	正平塚古墳	66	中ぞね古墳
21	石堂横穴群	44	さこ谷古墳	67	下十年畑遺跡
22	東塚古墳	45	座王古墳群		
23	赤はだ古墳群	46	岩屋が平古墳		

挿表2　調査区周辺第Ⅲ系日本平面直角座標値一覧表

P.A	−69700.000	+101400.000
P.B	−68500.000	+101400.000
P.C	−69100.000	+101400.000
P.D	−67300.000	+102000.000
P.E	−67900.000	+102000.000
P.F	−68500.000	+102000.000
P.G	−69100.000	+102000.000
P.H	−69700.000	+102000.000
P.I	−67300.000	+102600.000

P.J	−67900.000	+102600.000
P.K	−68500.000	+102600.000
P.L	−69100.000	+102600.000
P.M	−69700.000	+102600.000
P.N	−67300.000	+103200.000
P.O	−67900.000	+103200.000
P.P	−68500.000	+103200.000
P.Q	−69100.000	+103000.000



挿図2　伯太町安田地区調査区域並びに日本平面直角座標値位置図

第3章　分布調査の結果

1．調査の目的　伯太町大字安田から未明にかけてゴルフ場の建設が計画されたので、その区域内の遺跡の調査に必要が生じた。

2．調査の区域　造成予定地約138ヘクタールの区域内の丘陵尾根を主として一部斜面に及ぶ踏査を行った。

3．調査の期間　平成３年１月11日～２月18日

4．調査の結果判明した留意点

地形や道筋から全体をＡＢＣＤＥＦＧＨの８ブロックに分け、留意点を記する。

(1)　Ａ区は、かなりの部分が造成され現地形が変わっているが、尾根部分は造成に当たって、未調査部分があるのでトレンチを入れるか、表土を削って遺構の有無を確認する必要がある。

(2)　Ｂ区は、古墳が尾根上に並ぶ地域で、Ｃ区西側と並んで注意を要する区域である。

古墳の時期は、中期（５世紀）以降のものと考えられ、径約10ｍ、高さ１～1.5ｍの小規模のものが中心であるが、現在確認できる33基以外の墳墓の存在が考えられるので、調査に当たっては十分注意されたい。また、草木が茂っていて確認できない尾根もあるのでこれについての注意も必要である。

(3)　Ｃ区は、丘陵の西側部分が未明集落に接する所で、この部分にＢ区尾根筋と同様の古墳密集状況が見られる。そしてこの部分の古墳群は、長さ20ｍの今回確認し得た当地域唯一の前方後円墳を含む規模の大きな古墳群である。

できれば、工事区域ライン上にあるので、尾根を外して支障のない程度に内側に施行ラインを持っていくことが望ましい。また、北側の未確認尾根についてもＢ区と同様の配慮が必要である。

なお、遺物採取地(イ)については、集落の可能性もあり注意を要する。

(4)　Ｄ区は、草木が茂って確認されていた部分は西端部のみであるが、微妙に工事区域からはずれている。しかし、Ｄ－１があることからすると造成区域を含めた尾根については下草を刈り払い雑木の伐採の後再度注意して確認する必要がある。

(5)　Ｅ区は、Ｂ区より連なる古墳群と、Ｆ区の中心をなす標高146ｍの鉢伏城の関連遺構のみられる所から注意を要する区域である。

(6)　Ｆ区は、鉢伏城の本体とその関連遺構を中心とし、標高110ｍ～150ｍを測る。

この遺構は、連郭式山城で中世のものと考えられるが、この部分の調査は、測量及び発掘についてはかなり広範囲に及ぶものと思われる。

なお、この種の山城の調査は稀有であるので、いずれにしても注意を要する。

(7) G区、H区については遺構が確認されていないが、尾根筋や旧道を中心とした調査を欠いてはならない。

9．結　　び

今回の部分調査は、雑木、草木が茂っている状態で行っているので、自然と道のある所や尾根筋に限られ、斜面や山裾の調査については十分といえない。遺跡、遺構のあるなしにかかわらず、造成及び侵入路等の対象となる区域については、下草を刈り払った段階で再度の踏査を

挿表3　分布調査結果一覧表①

番号	種　　別	備　　考	番号	種　　別	備　　考
A		該当なし	B－18	古　墳　？	墳径6m・墳高1m弱
B－1	近世墓石		B－19	古　　墳	墳径9m・墳高1m弱
B－2	古　　墳	墳径12m・墳高1m弱	B－20	古　　墳	墳径10m・墳高1m
B－3	古　　墳	墳径11m・墳高約1.5m	B－21	古　　墳	墳径6.5m・墳高1m弱
B－4	古　　墳	墳径12m・墳高約1.5m	B－22	古　　墳	墳径9m・墳高1m
B－5	古　墳　？	墳径12m・墳高約2m	B－23	古　墳　？	墳径6m・墳高1m弱
B－6	古　　墳	墳径9m	B－24	古　　墳	墳径5m・墳高1m弱
B－7	古　　墳	墳径6m・墳高約1m	B－26	古　　墳	墳径7m・墳高約1m
B－8	古　墳　？	墳径6m・墳高1m弱	B－27	古　　墳	墳径7m・墳高1m
B－9	古　墳　？	墳径7m・墳高1m	B－28	古　墳　？	墳径6m・墳高1m弱
B－10	古　　墳	墳径5m・墳高1m	B－29	古　　墳	墳径7m・墳高1.5m
B－11	古　　墳	墳径11m・墳高1m	B－30	古　　墳	墳径7m・墳高1m強
B－12	古　　墳	墳径6m・墳高1m	B－31	古　　墳	墳径6m・墳高1m強
B－13	古　　墳	墳径13m・墳高2m弱	B－32	古　　墳	墳径11m・墳高1.5m
B－14	古　　墳	墳径11m・墳高1m	B－33	古　墳　？	墳径11m・墳高1m弱
B－15	古　　墳	墳径10m・墳高1m	B－34	古　墳　？	墳径7m・墳高1m
B－16	古　　墳	墳径9m・墳高1m	B－35	遺物散布地	住居跡の可能性大
B－17	古　　墳	墳径11m・墳高1m			

必要とする。例えば、B区の南、A区と接する谷あいの暖斜面等は、集落立地としては格好のものであり、遺物採取地(ハ)や（B－35）は要注意である。

また、横穴や無墳丘の土壌墓の存在についても注意すべきであろう。

以上、現段階での分布調査について報告し、埋蔵文化財について細心の注意を持って今後事業が推進されるよう希望するものである。

（東森市良、江川幸子）

挿表4　分布調査結果一覧表②

番号	種　別	備　考	番号	種　別	備　考
C－1	古　墳	墳径12m・墳高2m弱	D－1	古　墳	墳径9m・墳高1.5m
C－2	古　墳	墳径10m・墳高1m弱	D－2	古　墳	墳径11m・墳高2m
C－3	古　墳	墳径7m・墳高1m	D－3	古　墳	墳径6m・墳高1m強
C－4	古　墳	墳径9m・墳高1～2m	D－4	古　墳	墳径9m・墳高1m強
C－5	古　墳	墳径7.5m・墳高1m弱	E－1	堀切？	
C－6	古　墳	墳径8m・墳高1m弱	E－2	古　墳	墳径8m・墳高1.5m
C－7	古　墳	墳径7m・墳高1m弱	E－3	陸　橋	長さ約5m
C－8	古　墳	墳径11m・墳高2m	E－4	丘頂平坦面	加工段有り
C－9	古　墳	墳径12m・墳高2m	E－5	丘頂平坦面・堀道	
C－10	古　墳	墳径11m・墳高1m弱	F－1	鉢伏城	中世山城
C－11			F－2	鉢伏城	中世山城
C－12	古　墳	墳径6m・墳高2m	G－1	土　塁	幅2m・高さ2m・全長約20m
C－13	古　墳	墳径8m・墳高2m	H	該当なし	
C－14					
C－15	古　墳	墳径5m・墳高1m			
C－16	古　墳	墳径8m・墳高1m	イ	遺物散布地	土師質土器小片1片
C－17	古　墳	前方後円墳・全長20m	ハ	遺物散布地	弥生土器片2片
			ニ	遺物散布地	土師質土器小片1片
			ホ	五倫塔	崩　壊

第4章　調　査　の　概　要

安田地区試掘調査は、ゴルフ場建設の計画に先立ち、遺構の分布範囲の確認を目的に、平成4年1月上旬から4月上旬まで第1次調査を、平成4年5月下旬から6月下旬まで第2次調査を行った。調査状況は、第1次がトレンチ総数86本（挿表5・6・10・12・14トレンチ一覧表）で延べ平面積約650㎡。第2次がトレンチ総数20本（挿表16トレンチ一覧表）で延べ平面積約200㎡の試掘調査である。

第1次試掘調査

①　カウカツ遺跡では、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓や古墳時代終末期の古墳、掘立柱建物跡、中世の堀切等を確認し、丘陵尾根上に展開する古墳群や小規模な集落等が所在する事が窺えた。なお、今回の試掘調査では、弥生時代後期の墳丘墓は1基のみの確認に留まっている。遺物は弥生土器・須恵器が出土している。

②　高広遺跡は、丘陵尾根上に展開する古墳群であるが、現況では古墳として捉えることができない低い凸地も古墳の可能性がある事が推定された。遺物は弥生土器・須恵器の細片が数個出土している。

③　高広谷遺跡は、谷奥の丘陵腹部から裾部にかけて立地するが、O区・E区で弥生時代終末期の竪穴住居跡や掘立建物跡、古墳時代後期の土壙墓等を確認し、特に集落の規模は平坦面が及ぶ所は大半がその範ちゅうに含まれるものと推定された。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・鉄器が出土している。

④　小赤はだ古墳群は、丘陵尾根上に点在するが、古墳の他に古墳時代以降の集落が所在する可能性が窺えた。遺物は須恵器・陶器が出土している。

⑤　鉢伏城遺跡では、大小合せて18の郭や古墳時代中期の土壙墓、さらに、それ以前と思われる土坑（貯蔵穴）を確認し、急峻な山上に中世砦城跡や、古墳時代中期の墓地、それ以前の小規模な生活の場が所在する事が窺えた。遺物は土師器・須恵器・鉄器等が少量出土している。

第2次試掘調査

第2次試掘調査では、第1次調査でなし得なかった丘陵頂部平坦面（5箇所）と、丘陵枝尾根上で遺構の分布範囲の確認に努めた。その結果、丘陵頂部平坦面では遺構、遺物は確認できなかったが、丘陵枝尾根上（**丹部遺跡**）では、中腹部で弥生時代後期の竪穴住居跡や古墳時代前期の土壙等を確認し、小規模な集落が所在する事が窺えた。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土している。なお、今回の試掘調査では、斜面部の調査は現況では困難であり、横穴墓等の確認はできなかったが、高広谷遺跡・小赤はだ古墳群・円部遺跡にはその可能性はあるものと思われた。

（松本　哲）

第5章　調　査　の　結　果

第1節　カウカツ遺跡

カウカツ遺跡は標高106mを最頂部とし、主軸を南北にもつ丘陵尾根上に立地する。丘陵頂部は平坦で、東西に最大で20m程の尾根幅をもつが、幅狭な所では10m前後である。この丘陵は侵食作用を受けた様相を呈し、西側斜面は急峻である。

なお、水田との比高差は85～82mで、西側の眺望は良好である。本遺跡の地質を概観すると、基盤岩は凝灰岩で風化か著しく、軟岩Ⅱ類以下の角礫化ないし粘質化が進んでいる。また、基盤岩の直上には赤褐色ロームが堆積している所もある。検出した遺構は、四隅突出型墳丘墓1基、古墳4基、掘立柱建物1棟、堀切1条等である。遺物は弥生土器・須恵器が出土している。なお、本丘陵の南西側に降る枝尾根上には数基の古墳状の高まりが認められる。以下は遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

第1・2・3・4・5・6トレンチ（挿図4～8）

標高102mを測る丘陵頂部の小さな高まりに設定した。尾根幅は10m程の所である。その結果、1～6Tで、四隅突出型墳丘墓1基、これを切り込んだ掘立柱建物跡1棟、堀切1条等を検出した。遺物は弥生土器・須恵器が出土している。

第10・12トレンチ（挿図9）

第1～6－Tで弥生墳丘墓を確認した為、周辺の古墳状の高まりも、その可能性が推定され、10・12－Tは丘陵主軸線に直行する形で東西に設定した。その結果、墳丘墓は確認できなかったが、古墳時代後期と推定される径10m未満の古墳1基と埋土中に炭化物を多量に含む土坑1基を検出した。遺物は古墳盛土直上で須恵器細片を検出したが、図化できなかった為、時期は明確ではない。

第13・14・15トレンチ（挿図10）

丘陵最高所に位置し、丘陵主軸線に平行する不整長方形状の平坦面がみられる。現況でも数基の古墳状の高まりが認められるが、1－Tで検出した堀切の関連施設を想定し、また、14、15－Tは弥生墳丘墓の所在する可能性を求め、周溝部に設定した。その結果、13－Tでは、法面と思われる遺構が、14、15－Tで墳丘墓は確認できなかったが、古墳時代と推定される径10m前後の古墳3基を検出した。なお遺物は全く出土していない。

（松本　哲）

まとめ

カウカツ遺跡では、丘陵尾根上で、弥生墳丘墓や数基の古墳・掘立柱建物跡・堀切等を検出したが、カウカツE－1の1号墓を中心にまとめとする。

カウカツＥ－１の１号墓

１．立　　地

標高102.710ｍの丘陵頂部に立地し、水田との比高差は82ｍある。本墳丘の南側には中世の堀切と思われる法面と７世紀後半と考えられる溝とピットが掘り込まれた平坦面が接している。また、北側にも８世紀初頭の遺構が切り込まれている。

墳丘墓は丘陵の最高部（標高106.880ｍ）から北側にゆるやかに傾斜する中尾根幅一杯を利用して構築されている（挿図４）。

２．墳　　丘

残存部で南北は突出部を含めて推定6.5ｍ、東西は推定11.4ｍある。墳頂部の高さは盛土で約70cmある。地山の上は一層で表土下10cm内外で遺物（土器）が検出された。また、西側法面では凝灰岩の石列が確認された。他の部分は確認されていない。ただ南東部突出部では地山の削り出しがみられ、これを突出部と考えることができる。東側、西側はともに平坦面や石列をみない。これよりすると南側の二隅が突出し、北側については後世の遺構によって削平されたと考えられ、四隅突出型墳丘墓であることは明らかである。

３．遺　　物

出土した遺物は墳丘中央部の表土上や表土下の盛土から弥生土器が検出されている。その検出範囲は２×２ｍで、なお残存している可能性が十分ある。少なくとも３分の１に当たるであろう。

また、これらの土器と共に確認された長方形の板石（安山岩で27×20cm）は地山に接しており、土器にともなったものと思われる。棒状のすり石を墓壙上面にすえる類例は安来、意宇平野、簸川平野にもある。

土器はいずれも土圧で壊れており（挿図７）、かなりのものが周辺に散らばっている状況である。今後残る約３分の１の範囲の土器片をとりあげることによって考慮したい。　土器は、復元できるものについてみると、吉備の立坂型の特殊壷と特殊（小型）器台、山陰の的場式器台であるが、吉備の土器は、口縁部は沈線と三角形の鋸歯文でかざり、胴部に２～３条の突帯（たが）をめぐらしている。壷は３個体、器台は８個体が復元できるが、他はいずれも細片（特に胴部）で復元不可能である。地元の土器は的場式鼓型器台１個体で、あとは甕、小形器台、壷等があるが、赤褐色の胎土からして当地方の土器とはいいがたく、やはり吉備を考えるべきであろう。吉備の土器の所見については宇垣氏の見解があるのでそれにゆずり、各土器の詳細は観察表にゆずることとする（挿図８・挿表５・６）。これらの土器以外の遺物は今の所検出されていない。

4．ま と め

以上のように不十分な調査ながら、吉備の特殊壷と器台を墓壙上面に副葬する例が四隅突出型墳丘墓でふえたことと、立坂型＝的場式という組合せは、すでに西谷３号墓で確認されており、それが当地でみられることは注目されてよい。しかも在地の土器を吉備の土器が量的に上回る点は能義、意宇平野では例をみない。これまで能義平野で出土するものをみると、多くの在地の土器の中に吉備の土器が点在するのみであった（長曽、鍵尾土壙墓群）。ところがそれは完全な祭祀用土器とはいいがたかったのであるが、本墳丘墓にみられる状況は、規模こそ異なっているものの西谷３号墓と同時期に、この安田の地でも首長が吉備との交流をはじめていることが明らかとなった。西谷墳墓群は斐伊川水系を考えねばなるまいが、本墳丘墓の場合は明らかに日野川水系をたどるということで考えねばなるまい。いずれにせよ本墳丘墓の提示している問題は多いといえよう。なお、時期であるが、弥生時代後期後葉とみて良い。

（東森市良）

5．カウカツＥ－１の１号墓出土特殊土器類観察所見

１．出土の土器片は、茶褐色を呈し、また、胎土中に多量に角閃石粒を含んでおり、吉備の特殊器台の胎土と全く同一である。

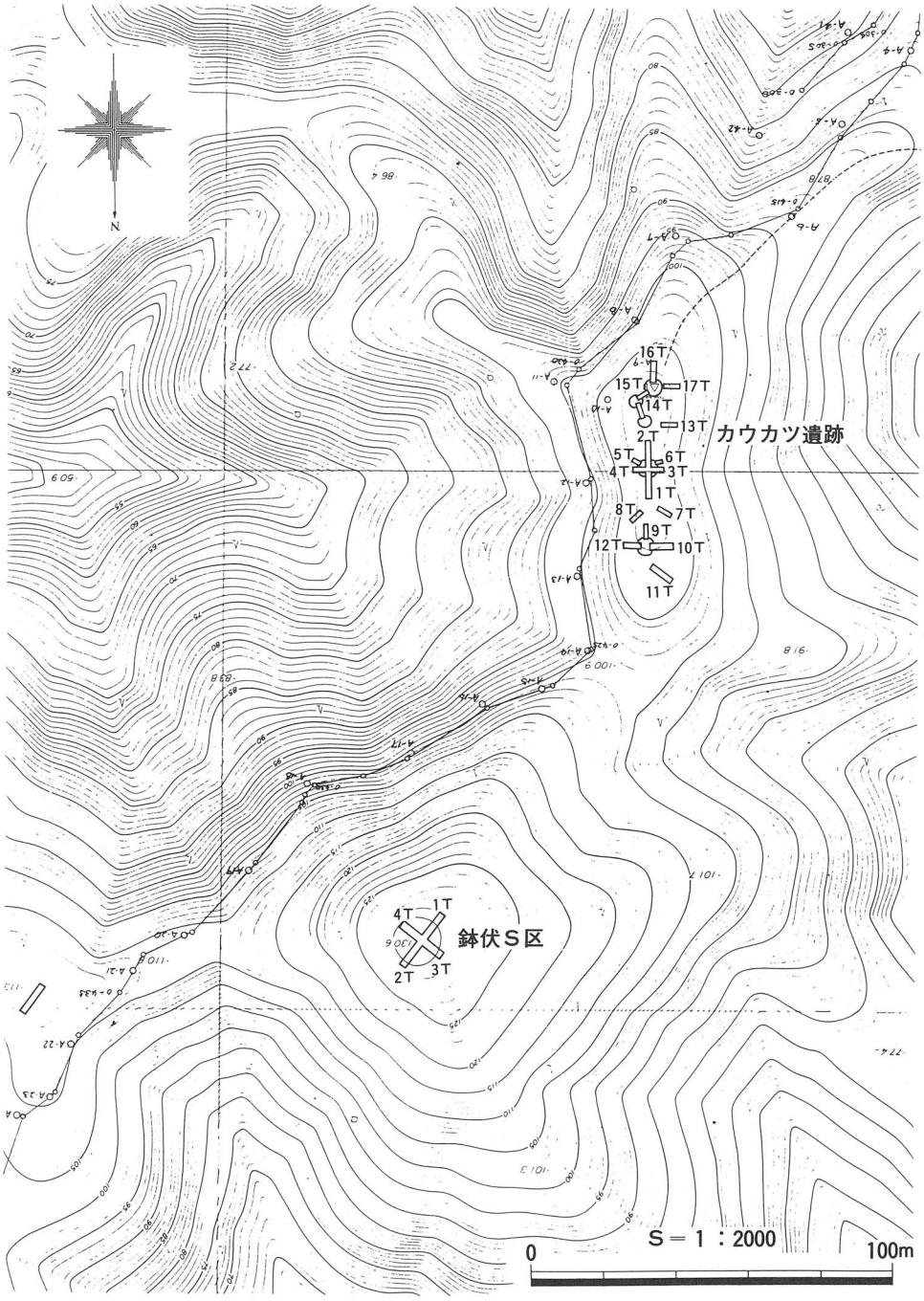
２．文様、器形の諸特徴、製作手法等も吉備の資料と全く一致している。

こうした点からみて、これらの土器は、吉備産の特殊土器であることが確実である。1)製品が搬入された、2)工人が吉備から粘土をたずさえて出雲に来て製作した、そのいずれかと思われるが、これについては今後の検討課題である。

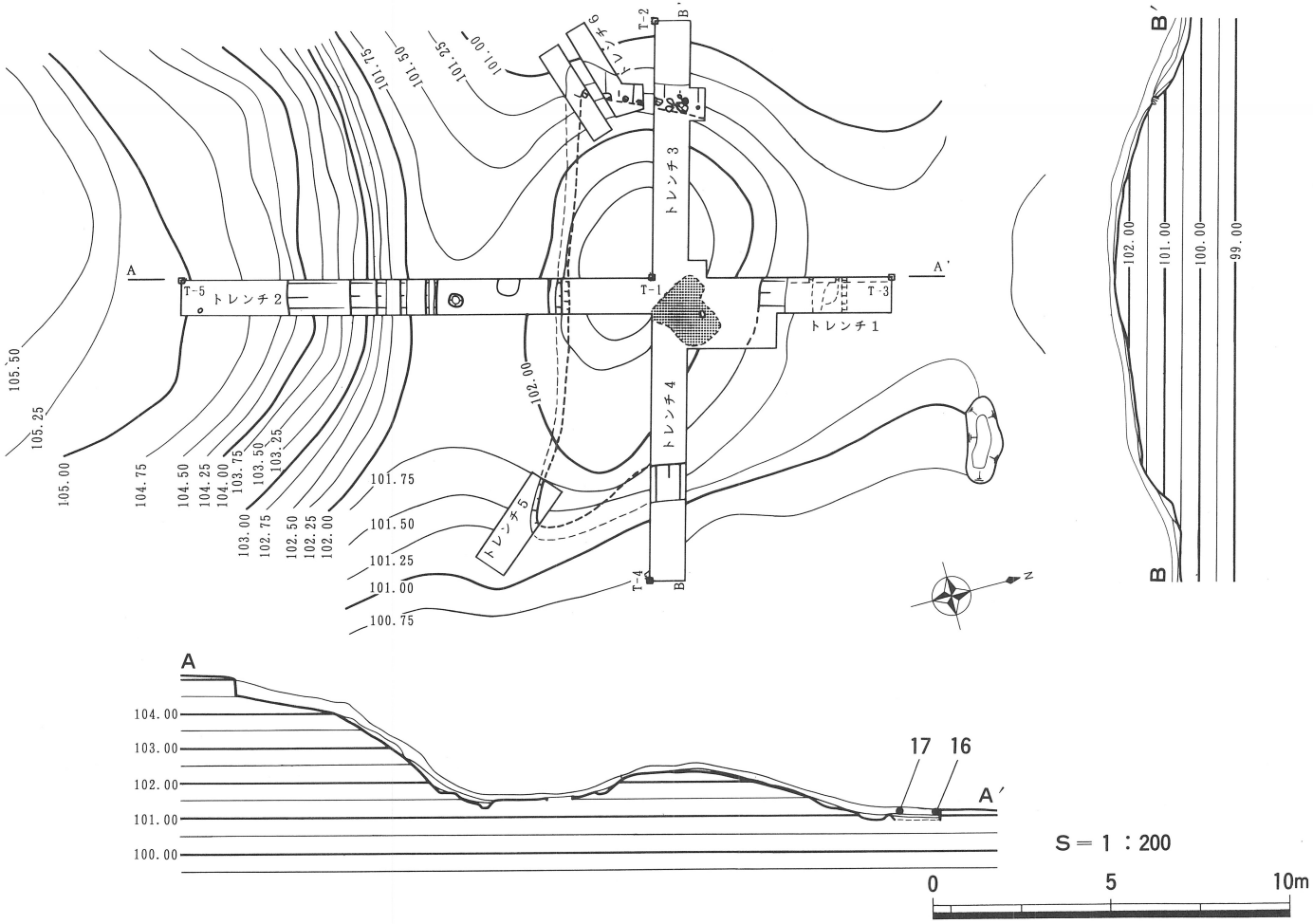
当該資料は小形特殊器台と特殊壷であり、大形の特殊器台は含んでいない。また、資料の12は小形の器台、15は甕で、これらも吉備産と判断できる。これらの土器は第１型式・立坂型の新段階に位置づけられ、現在発掘調査継続中の西谷３号墓の特殊器台と同時期とみられる。

特殊器台・特殊壷の出土遺跡はこれまでに74遺跡（本例を除く）が知られているが、そのうちの66遺跡は吉備（岡山県・広島県東部）に所在している。出雲においては出雲市西谷墳丘墓群（２号・３号・４号）、同矢野遺跡、安来市臼コクリ遺跡につづき４例目の出土であるが、臼コクリ遺跡では破片１片のみであり、出雲東部においてはじめてのまとまった資料といえる。弥生時代後期後半における出雲と吉備の政治的関係を考えるうえできわめて重要な資料である。

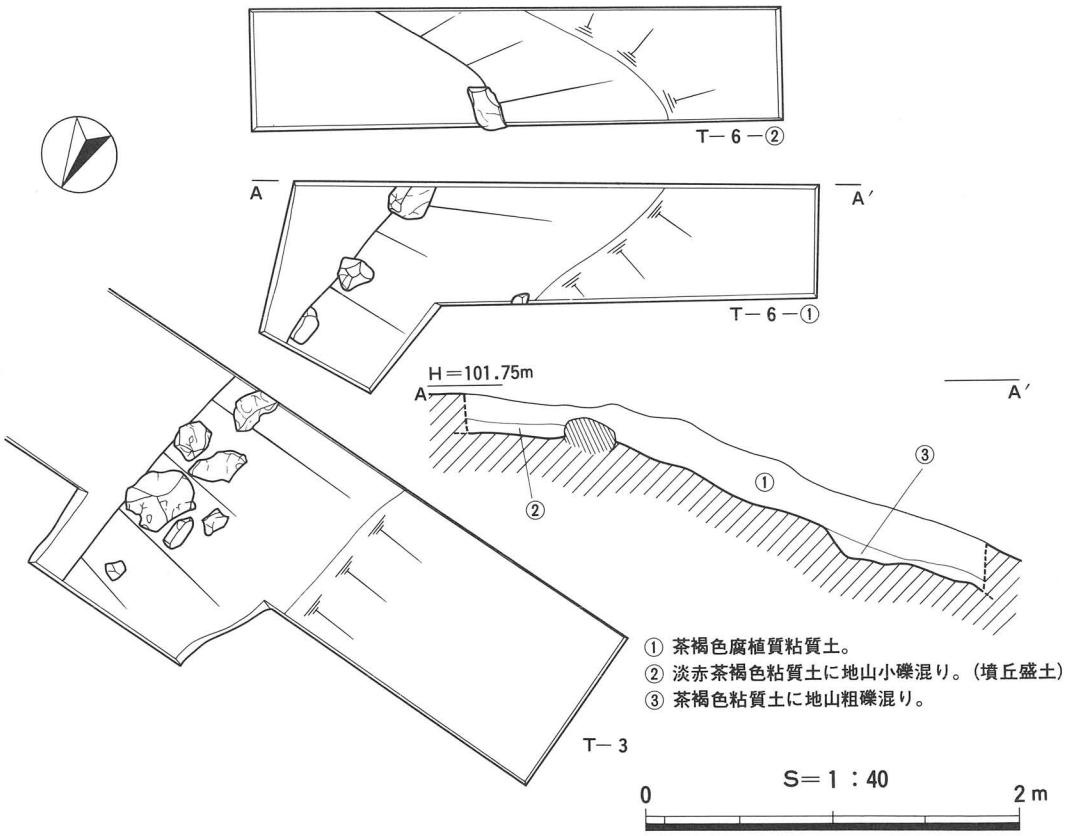
（宇垣匡雅）



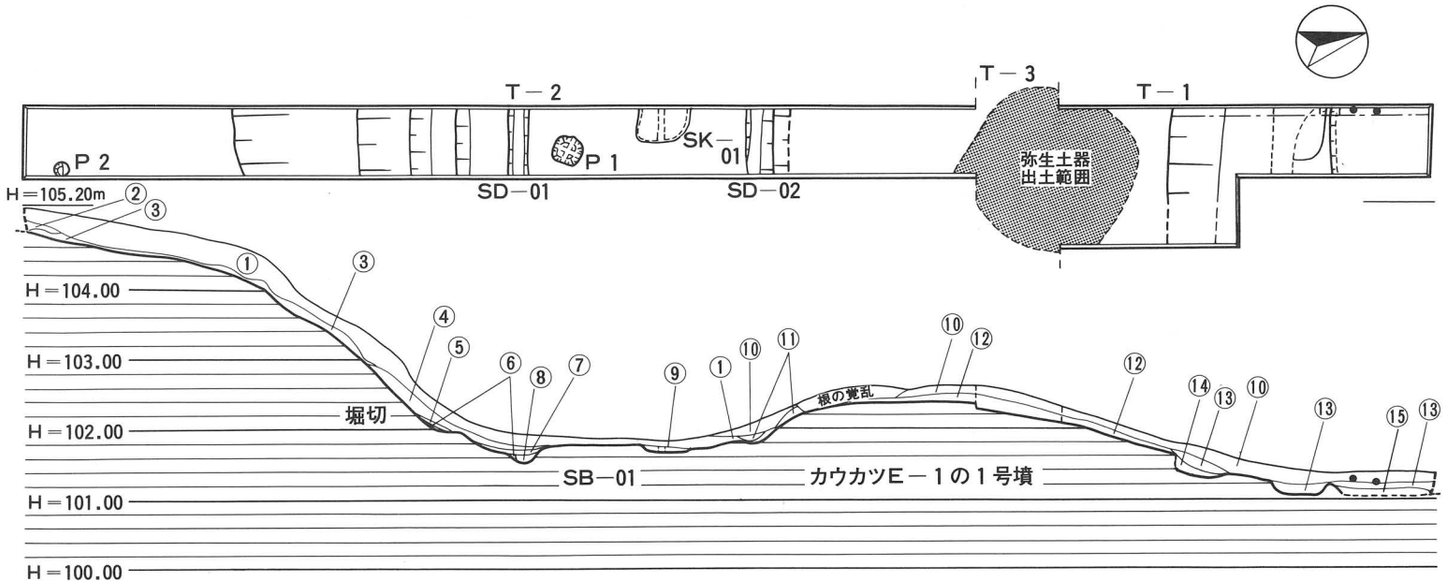
挿図3　カウカツ遺跡トレンチ配置図



挿図４　カウカツＥ－１の１号墓地形測量図並びにトレンチ位置図

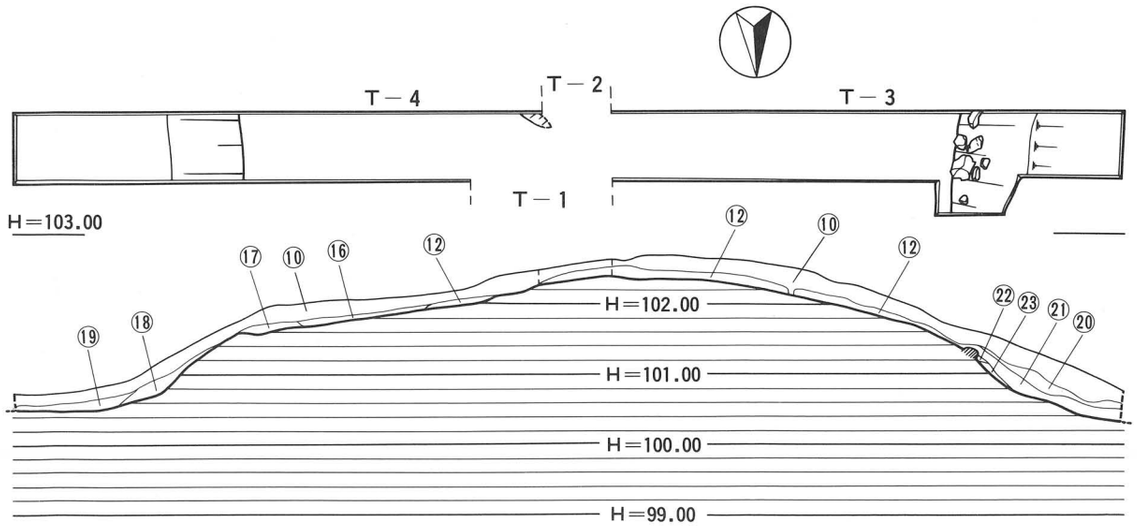


挿図6　第3·6 トレンチ（カウカツE－1の1号墓）西側貼石検出状況

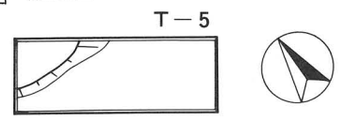


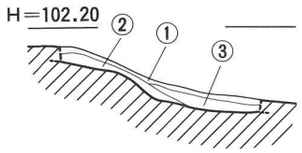
① 黄茶褐色～茶褐色腐色質土。(表土)
② 黄茶褐色粘質土。
③ 茶褐色粘質土。
④ 茶褐色粘質土に地山小礫点在し、ややしまる。
⑤ 黄茶褐色粘質土に地山小礫混り。
⑥ 地山礫質土。(流土)
⑦ ⑤とほぼ同じ。
⑧ 赤茶褐色粘質土でしまる。—SD－01埋土
⑨ 茶褐色腐植質土に地山小礫混り。—SK－01埋土
⑩ 赤褐色～茶褐色腐植質粘質土。(表土)
⑪ 赤茶色粘質土に地山小礫点在。
⑫ 赤茶褐色粘質土に地山小礫混り。
—墳丘盛土
⑬ 赤茶褐色粘質土。
⑭ 明赤茶色粘質土に地山小礫混り。—墳丘盛土
⑮ 暗赤茶褐色土に地山小礫混り。

S＝1：100
0　5m



⑯ 茶褐色粘質土(やわらかい)
⑰ 明黄茶色粘質土に地山小礫混り。
—墳丘盛土
⑱ 黄茶褐色粘質土に地山小礫点在。
⑲ 赤茶褐色粘質土。(堆積土)
⑳ 黄茶褐色腐植質粘質土。
㉑ 赤茶褐色粘質土に地山礫点在。
㉒ 赤褐色土に地山礫点在。
㉓ 赤褐色粘質土。

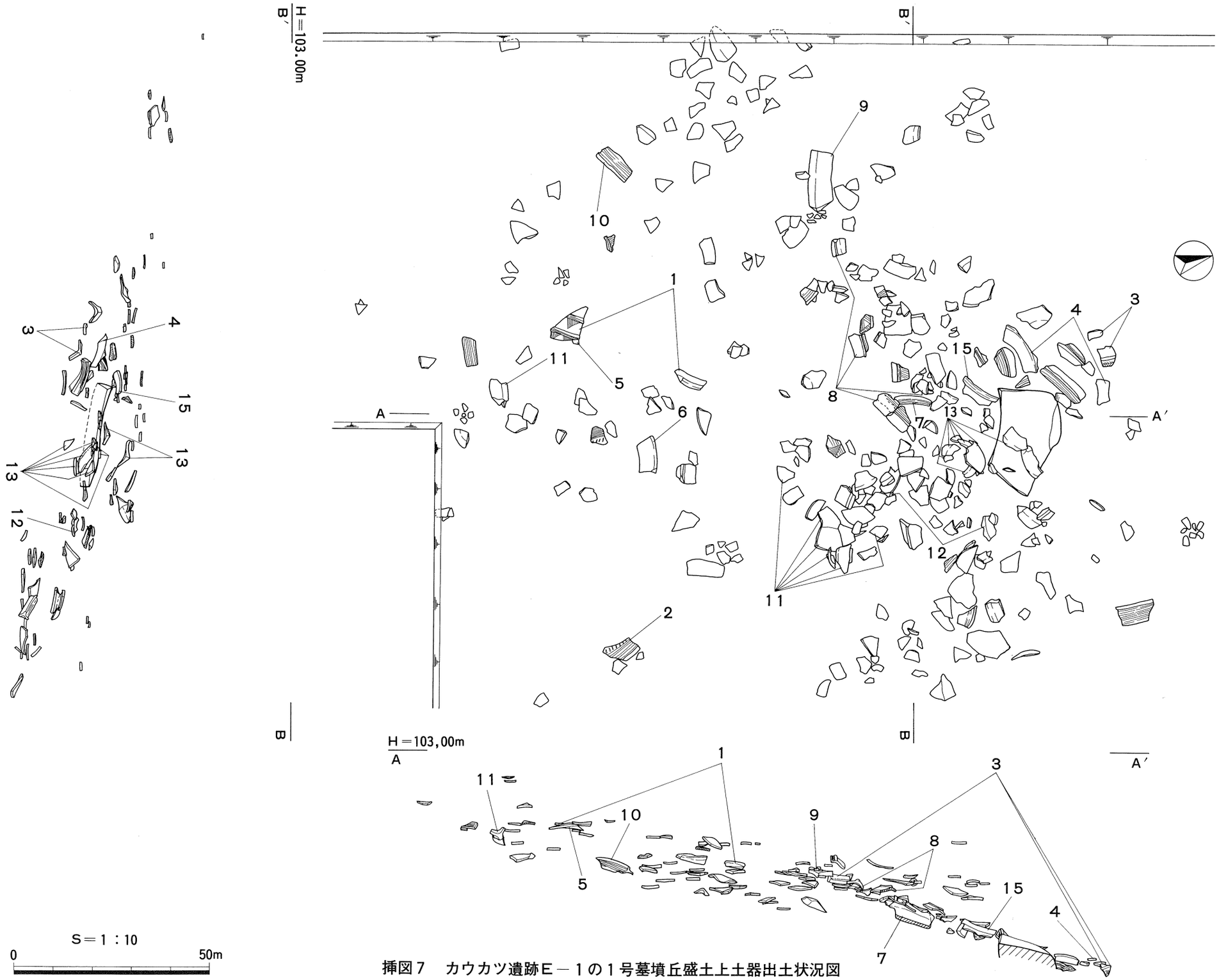




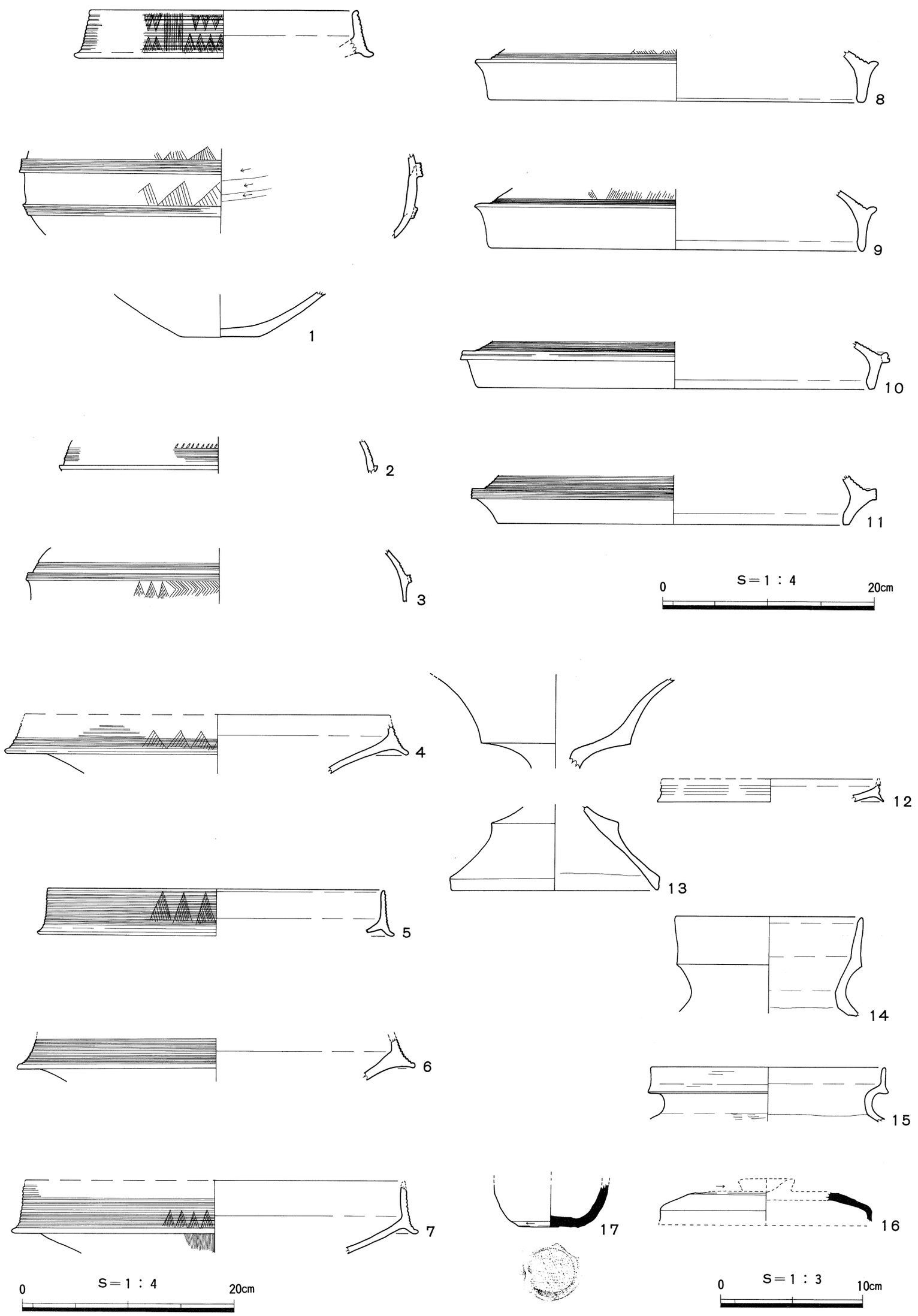
①茶褐色腐植質土。(表土)
②赤茶褐色粘質土に地山小礫混り。(墳丘盛土流土)
③茶褐色粘質土

S＝1：100
0　5m

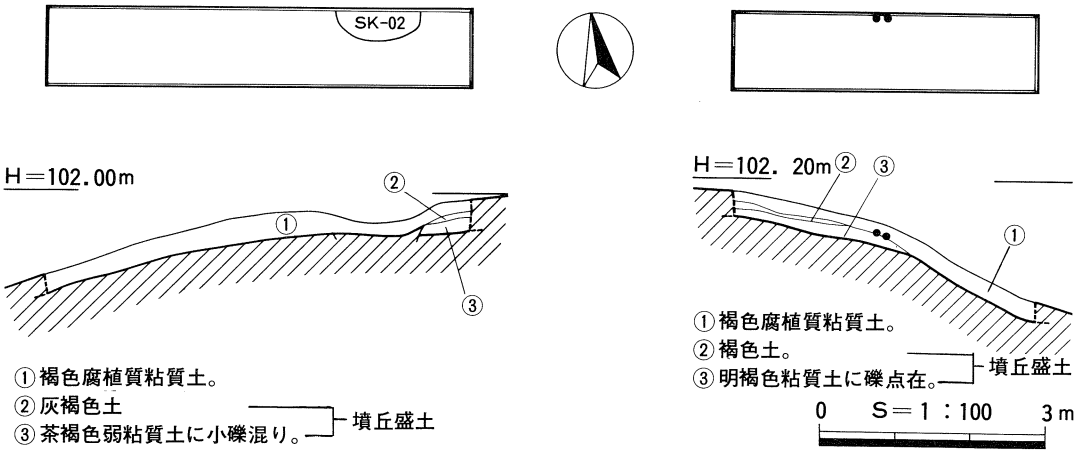
挿図5　第1·2·3·4·5トレンチ遺構図



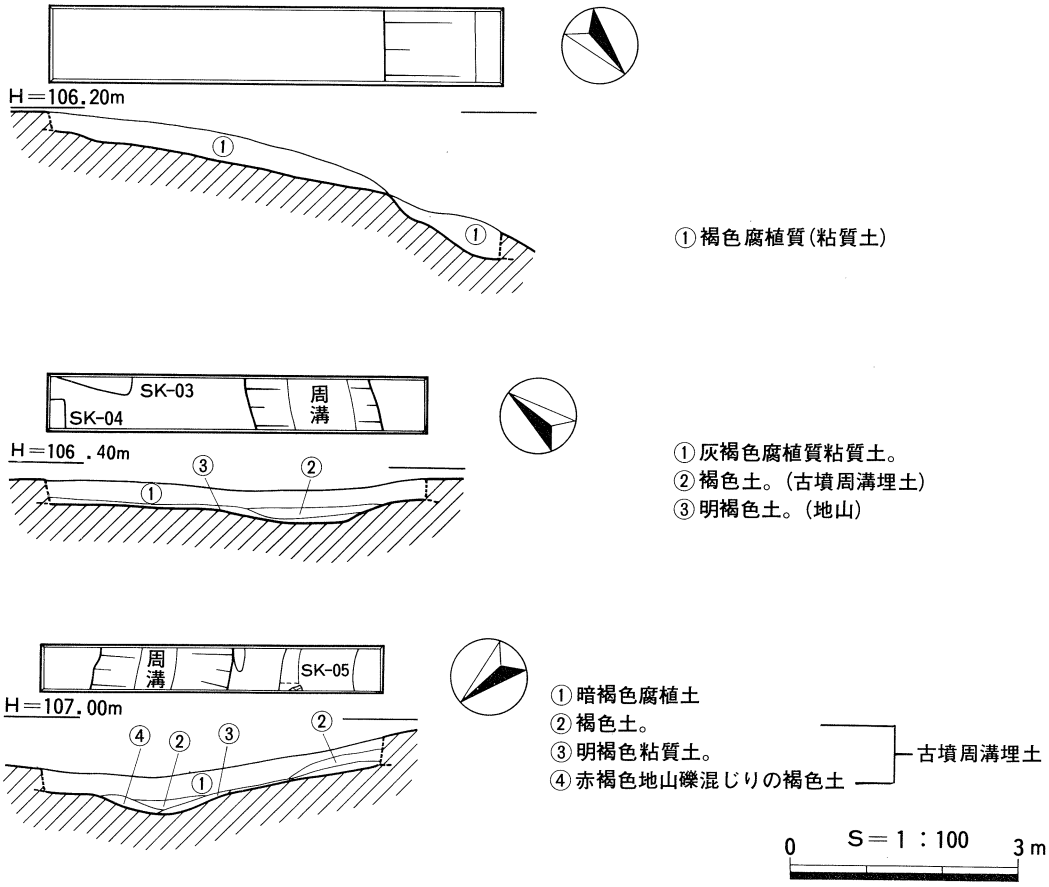
挿図７　カウカツ遺跡Ｅ－１の１号墓墳丘盛土上土器出土状況図



挿図８　第1･2･3･4トレンチ（カウカツＥ－１の１号墓）出土遺物実測図



挿図9　第10トレンチ(左)・第12トレンチ(右)遺構図



挿図10　第13(上)・第14(中)・第15(下)トレンチ遺構図

挿表５　カウカツ遺跡出土遺物観察表 ①（カウカツＥ－１の１号墓出土弥生土器）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
弥生土器特殊壺	1	7 8	11	76・6	復口径 25.0cm 復胴径 （最大） 38.0cm	口縁部。胴部。底部。口縁部は複合口縁で，内傾して立ち上がり，上端部は角張る。下端部は水平方向に突出する明瞭な稜をもつ。外面にクシ描平行沈線を施した後，金属工具による小型の複合鋸歯状の施文を上下２列に配し，この施文の横位置に同じく金属工具による下垂する沈線を施す。これらの施文を口縁帯に交互に巡らすものと思われる。胴部には２条の断面「コの字」状の突帯を貼り付ける。上位の突帯には４条の平行沈線，下位のものには３条の平行沈線を施し，それぞれの突帯の上方には金属工具による鋸歯状の施文を巡らす。底部は平底。内外面に丹塗り。	外面　ヨコナデ。 内面　口縁部ヨコナデ，胴部削り。 他は風化の為調整不明。	１㎜径の角閃石多量に含み密。	良　好	赤褐色～赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊壺	2	7 8		20		胴部。烈点文，クシ描平行沈線を巡らす。下方には，断面三角形状の突帯を貼り付ける。	内面　風化の為調整不明。	１㎜径の角閃石多量に含み密。	良　好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊壺	3	7 8	11	83・51	復胴径 （最大） 36.4cm	胴部。端面に３条のクシ描平行沈線を施した，断面「コの字」状の突帯を貼り付ける。突帯の上方に平行沈線，突帯の下方に接して羽状の施文，鋸歯状の施文をもつ。	外面　ヨコナデ。 内面　風化の為調整不明。	１㎜径の角閃石含み密。	良　好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	4	7 8		49・52	復口径 （推定） 34.5cm	受部。複合状口縁帯は内傾して立ち上がる。上端部は欠損。下端部は斜下方に鋭く突出する稜をもつ。外面にクシ描平行沈線を施した後，金属工具による鋸歯状の施文。内面の段は明瞭。	口縁部内外面　ヨコナデ。 その他は風化の為調整不明。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	5	7 8	11	6	復口径 （推定） 31.6cm	受部。複合状口縁帯は，直立気味に立ち上がり，上端部は丸味をもつ。下端部は斜下方に突出する明瞭な稜をもつ。外面に12条のクシ描平行沈線を施した後，金属工具による鋸歯状の施文。内面に段をもつ。	内外面　ヨコナデ。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	赤褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	6	7 8		15	復口径 （推定） 33.2cm	受部。口縁上端部欠損。複合状口縁の下端部はやや斜下方に突出する稜をもち，端部は丸くおさめる。外面にクシ描平行沈線を施した後，鋸歯状の施文。内面に明瞭な段をもつ。	口縁部　ヨコナデ。 その他は風化の為調整不明。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	赤褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	7	7 8		85	復口径 35.6cm	受部。複合状口縁帯は，やや内傾して立ち上がる。上端部は欠損。下端部は斜下方から水平方向へ突出する明瞭な稜をもつ。外面にクシ描平行沈線を施した後，金属工具による小型の鋸歯状の施文。内面に明瞭な段をもつ。	口縁部内外面　ヨコナデ。 接合部外面　タテハケメ。	１㎜径の角閃石多量に含み密。	良　好	赤褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	8	7 8		26・31	復底径 35.5cm	脚台部。複合状底縁帯をもつ脚台部は「逆くの字」状に緩く屈曲し，直立気味に下り，端部は丸くおさめる。上端部には斜上方に尖がり気味に延びる稜をもつ。外面にクシ描平行沈線を巡らした後，金属工具による鋸歯状の文様を施す。	内外面　ヨコナデ。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	9	7 8	11	102	復底径 35.6cm	脚台部。複合状底縁帯をもつ脚台部は「逆くの字」状に緩く屈曲し，直立して下り，端部は丸味をもつ。上端部には斜上方に尖がる稜。外面にクシ描平行沈線。鋸歯状の施文をもつ。	内外面　ヨコナデ。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器特殊器台	10	7 8	11	113	復底径 37.0cm	脚台部。複合状底縁帯をもつ脚台部は「逆くの字」状に屈曲し，外傾して下り，端部内面に強いヨコナデによる段をもつ。上端部のやや斜上方に突出する稜は角張り，端面に１条の沈線を巡らす。外面にクシ描平行沈線。	内外面　ヨコナデ。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良　好	茶褐色	１－Ｔ

挿表６　カウカツ遺跡出土遺物観察表 ②（カウカツＥ－１の１号墓出土弥生土器）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
弥生土器 特殊器台	11	7 8	11	72	復底径 33.0cm	脚台部。複合状底縁帯をもつ脚台部は「逆くの字」状に屈曲し，外傾して下り，端部で短く直立気味となり，端面は平坦。上端部の水平方向に突出する稜は角張り，端面に３条のクシ描平行沈線を巡らす。外面にクシ描平行沈線。	内外面 ヨコナデ。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良好	赤茶褐色	１－Ｔ
弥生土器 小形器台	12	7 8		106・108	復口径 （推定） 15.2cm	受部。上端が欠損する受部は，複合状口縁帯をもち，直立気味に短く立ち上がると思われる。下端は鋭く斜下方に突出する。外面に２条の凹線。（風化の為浅く不明瞭）	内外面 ナデ。	１㎜径の角閃石均質的に含み密。	良好	赤褐色	１－Ｔ
弥生土器 鼓形器台	13	7 8	11	42・88 109	底径 14.4cm	受部と脚台部。受部口縁部は欠損。受部は大きく外反しながら立ち上がり，口縁部に向けて器壁は薄くなる。接合部との境には明瞭な段をもつ。脚台部は，接合部との境に明瞭な段をもち，裾部に向けて「ハの字」状に下る。脚端部との境にも明瞭な段をもち，端部は直立し，先細りとなる。	受部，脚台部とも風化の為調整不明。	１～２㎜径の白色砂粒を含み，やや密。	良好	淡黄褐色	１－Ｔ
弥生土器 壺	14	8		1	復口径 13.0cm	口縁部～口頸部。口縁部は複合口縁でやや外傾して立ち上がり，端部は肉薄となり尖がり気味。下端部の稜は明瞭であるが内面の段はあまい。口頸部は緩やかに「くの字」状に下る。	口縁部～口頸部内外面ナデ。 肩部内面削り。	１㎜径の角閃石均質的に含み密。	良好	茶褐色	１－Ｔ
弥生土器 甕	15	7 8		44	復口径 16.6cm	口縁部～頸部。口縁部は複合口縁で，直立して立ち上がり，端部はやや丸味をもつ。下端にはやや斜下方に突出する断面三角形状の稜をもつ。外面に平行沈線が残存する。口縁部内面の段は明瞭。頸部は「Ｃの字」状に屈曲する。	口縁部～頸部内外面ヨコナデ。 肩部外面 ヨコハケ。 肩部内面 削り。 内外面に丹塗り。	１㎜径の角閃石多量。白色微細砂粒点在し密。	良好	赤褐色	１－Ｔ

カウカツ遺跡出土遺物観察表（その他の出土土器）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
須恵器 坏蓋	16	8	11	122	復口径 （推定） 15.0cm	口縁部～天井部の破片。口縁部は直立気味に下り，短め。天井部は平坦面をなし，中央に環状のつまみが付くと思われる。	天井部外面 ヘラ削り，以下口縁部まで回転ヨコナデ。 内面 回転ヨコナデ。	１㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	濃灰色	１－Ｔ
須恵器 小型甕	17	8	11	123	復底径 4.6cm	底部の破片。	外面 回転ヨコナデ，ヘラ削り，底部中央に板目痕とヘラ記号。 内面 回転ヨコナデ。	１㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	濃灰色	１－Ｔ

挿表7　カウカツ遺跡トレンチ一覧表

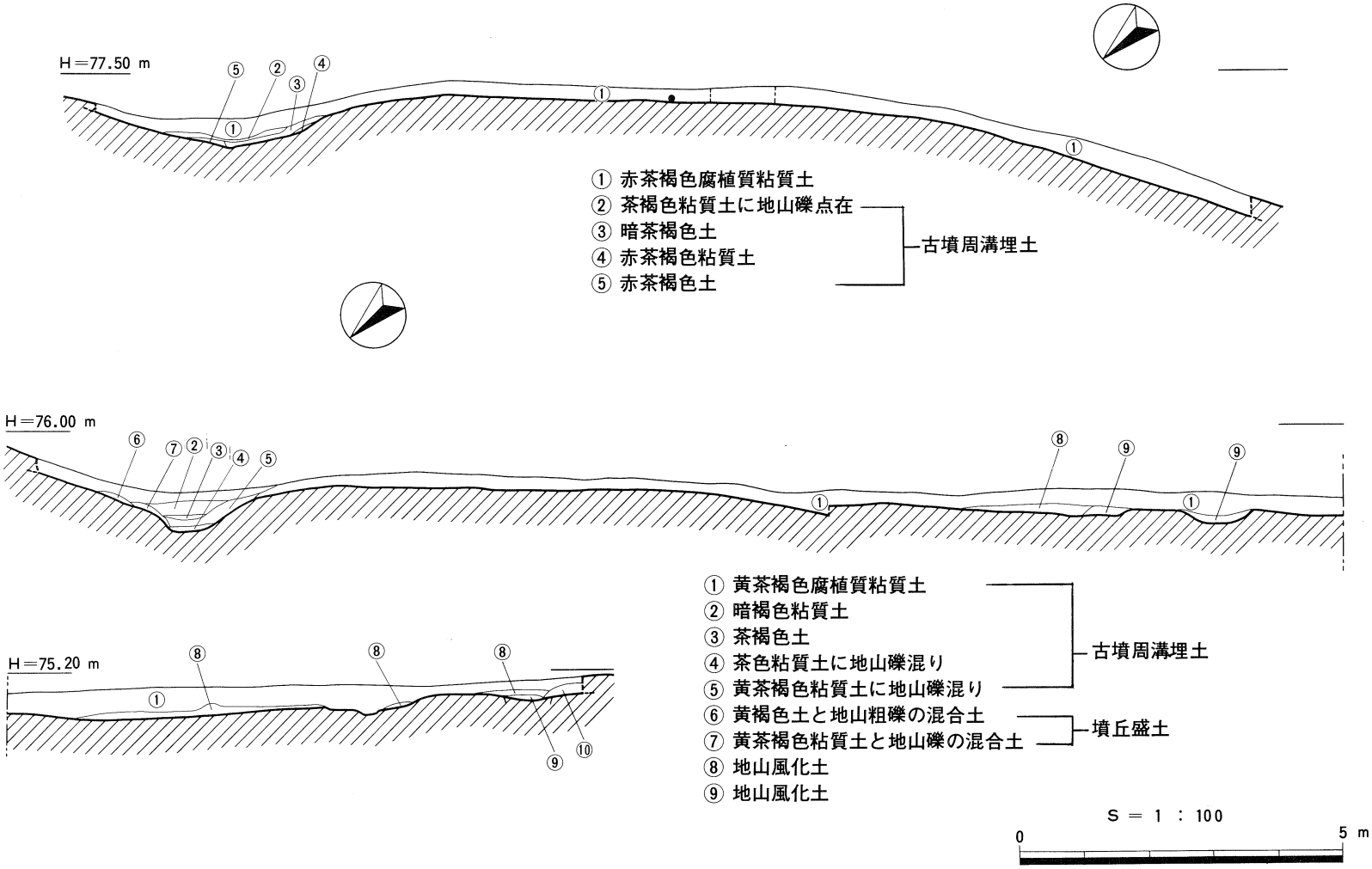
トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出 土 遺 構	出 土 遺 物
T－1	6.7 × 1.0 2.5 × 1.0	溝	弥生土器，須恵器
T－2	13.2 × 1.0	堀切，溝，ピット	弥生土器
T－3	7.2 × 1.0	墳丘墓，貼石	弥生土器
T－4	7.5 × 1.0		
T－5	2.9 × 1.0		
T－6	2.8 × 0.6 2.9 × 0.6	墳丘墓，貼石	
T－7	4.8 × 0.8		須恵器
T－8	4.6 × 0.7		
T－9	5.0 × 0.6	古墳盛土	
T－10	5.6 × 1.0	古墳，土壙	
T－11	6.0 × 1.0		
T－12	4.0 × 1.0	古墳盛土	須恵器
T－13	5.95× 1.0	犬走状遺構	
T－14	5.0 × 0.7	古墳周溝，土壙	
T－15	4.5 × 0.6	古墳周溝，溝状遺構	
T－16	7.0 × 0.7	古墳周溝	
T－17	3.5 × 1.0	犬走状遺構	

第2節　高　広　遺　跡

高広遺跡は、標高72～76を測る丘陵尾根上に展開する古墳群であり、現況で12基の古墳状の高まりを確認している。中には方墳と思われるものも３～４基みられる。水田との比高差は約50mで、北から南西にかけての眺望は良好である。本遺跡の地質を概観すると、基盤岩は凝灰岩で、所々赤色ロームが被覆している。試掘トレンチは、１～７－Ｔで弥生墳丘墓の所在する可能性を求め、現況方墳と思われる高まりに設定した。その結果、頂部が削平された方墳の可能性が推定されたが、やはりトレンチ範囲の制約の為、明確ではない。遺物は弥生土器細片２個と須恵器細片１個が出土しているが、図化できなかった。８～13－Ｔは幅７～８ｍのやせ尾

挿表８　高広遺跡トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出土遺構	出土遺物
Ｔ－１	8.3 × 1.0	古　墳	
Ｔ－２	9.4 × 1.0	〃	弥生土器，須恵器
Ｔ－３	7.0 × 1.0	古墳，ピット	
Ｔ－４	6.2 × 1.0	古　墳	弥生土器
Ｔ－５	6.0 × 0.8	〃	
Ｔ－６	6.0 × 0.8	〃	
Ｔ－７	3.0 × 1.5	〃	
Ｔ－８	11.3 × 1.0	古墳盛土，周溝	
Ｔ－９	8.8 × 1.0		
Ｔ－10	3.0 × 1.0	古墳盛土	
Ｔ－11	4.0 × 1.0	〃	
Ｔ－12	4.5 × 1.0	ピット	
Ｔ－13	5.3 × 1.0		



挿図12　高広遺跡第1·2·8·9トレンチ遺構図

根上平坦面に設定した。その結果、盛土を施した削平面を確認した。なお遺物は全く出土していない。

（妹尾秀樹）

第3節　高広谷遺跡

高広谷遺跡は調査区の関係からO区とE区、さらにS区に分割した。

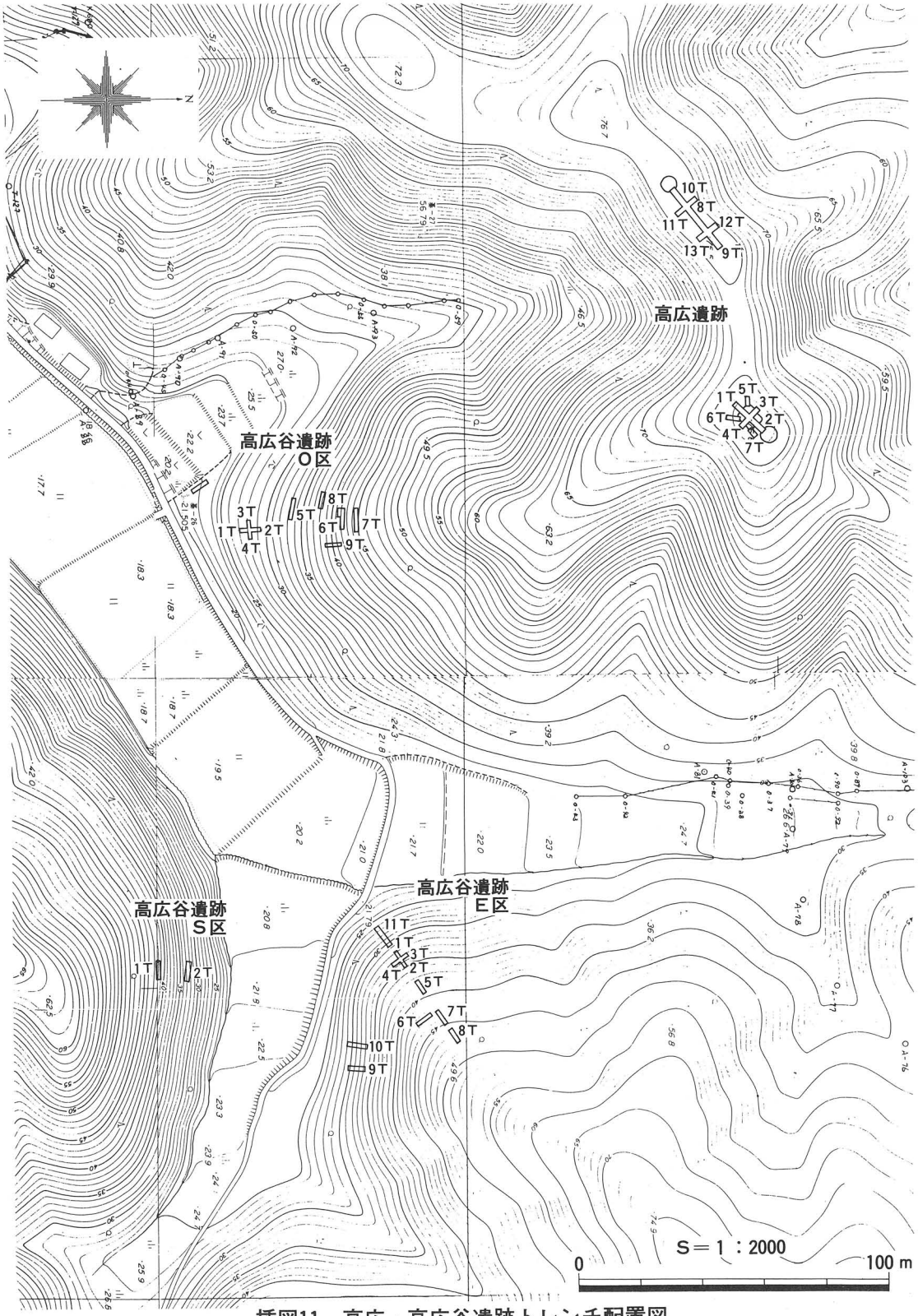
O区は谷奥の丘陵腹部から裾部に階段状に2段のテラス地形が連接する所に立地する。水田との比高差は15～10mを測る。本遺跡の地質を概観すると、基盤岩は細粒安山岩である。丘陵裾端部は、この安山岩質大礫から小礫が混在した赤褐色粘質土が堆積し、この土層面が地山を形成している。検出した遺構は竪穴住居跡1棟・掘立柱建物跡1棟・土壙1基等である。遺物は須恵器・鉄器等が出土している。なお、今回調査対象外となった本丘陵東側中腹部には、大規模な凹地がみられ、古墳時代後期の須恵器片が表採されている。この凹地の露出した土層断面には黄褐色の大山松江降下軽石層が厚く堆積しているのが観察できる。なお、3～8－Tは等高線に沿って、1～4－Tは十字型に設定した。最高所に設定した5－Tから最低所に設定した1－Tまでを水平距離でみると約25mを測る。以下は、遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

第1・2・3・4トレンチ　丘陵裾部の現況、竹林で削平地の様相を呈す所に十字型トレンチを設定した。遺構は雨落とし溝と思われるもの1本を検出したが、遺物は全く出土せず時期は不明である。

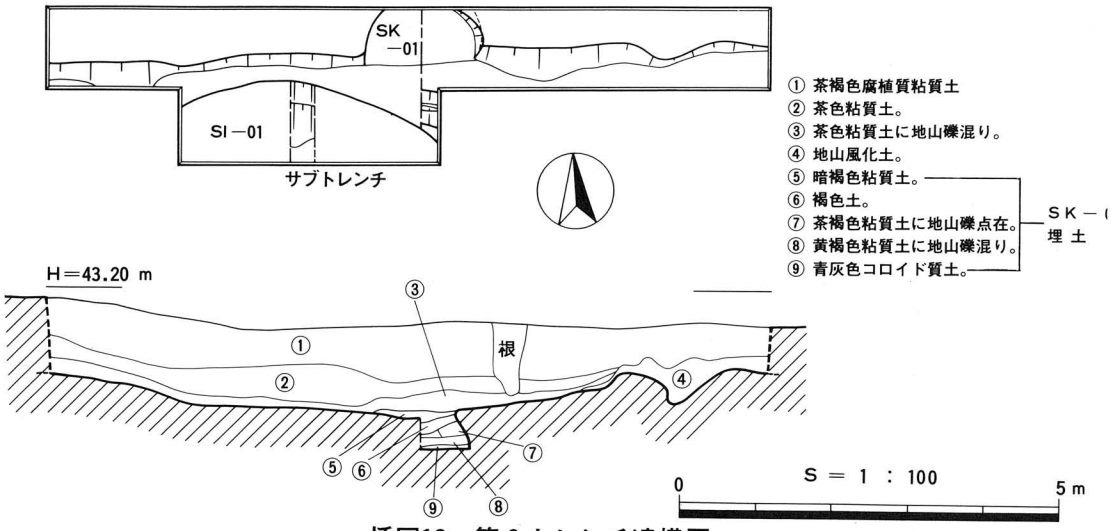
第6トレンチ（挿図13）　丘陵腹部で標高42.5m前後を測り、現況は2段の階段状の地貌を呈す上段のテラス部に平行して設定した。このテラス部は東西長約30m、南北長約4～7mの平面三日月状を呈す。遺構は山側に土壙1基（袋状貯蔵穴で上面が後世削り込まれている。）、その南側に近接して竪穴住居跡1棟（検出面では多角型プランと推定される。）を検出した。遺物は全く出土しなかった為、時期は明確にできないが、その形態から弥生時代終末期頃の竪穴住居跡と、これに関連した貯蔵施設と思われる。なお、下段のテラス部に設定した7－Tでは、遺構は確認できなかったが、7世紀中頃の須恵器坏身18が出土している。

第8トレンチ　7－Tの北側でやや凹地を呈す所に、等高線に沿って設定した。遺構は段状遺構1基と、この床面と埋土を掘り込んだ土壙墓1基（長辺22m、短辺0.9m、深さ0.25m）を確認した。遺物は段状遺構埋土中から7世紀中頃の須恵器坏身19が、土壙墓からは須恵器細片・鉄鏃が出土している。なお、これらの新旧関係は、土層観察から土壙墓が新しい。

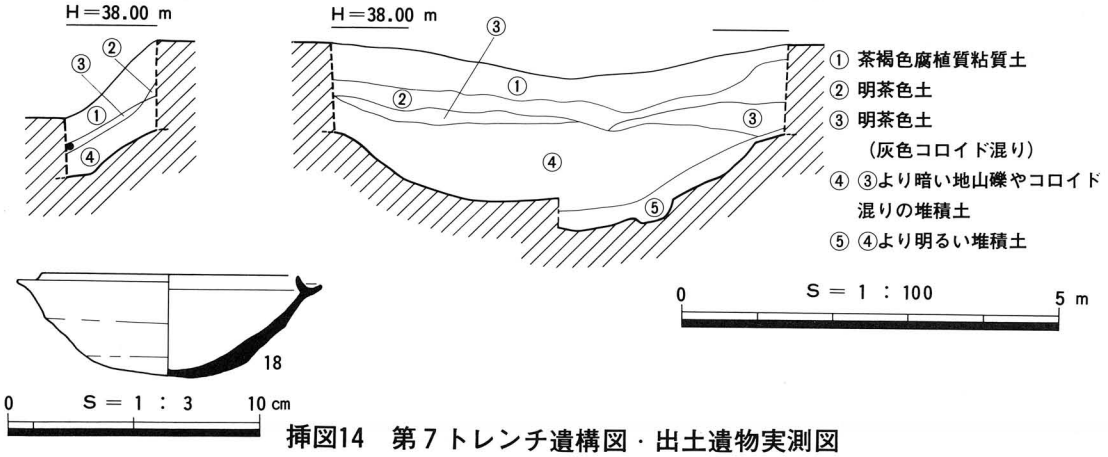
第9トレンチ（挿図15）　6－Tを設定した同じテラス部（6－Tの東側）に等高線に直交する形で設定した。遺構は山側と谷側に側溝を巡らすと推定される建物跡1棟を検出した。山側の側溝は壁際からわずかに離れて掘り込まれており、柱穴は最大規模のもので、径0.5m、深さ0.5mを測る。遺物は全く出土しなかった為、時期は不明である。また、トレンチ範囲の



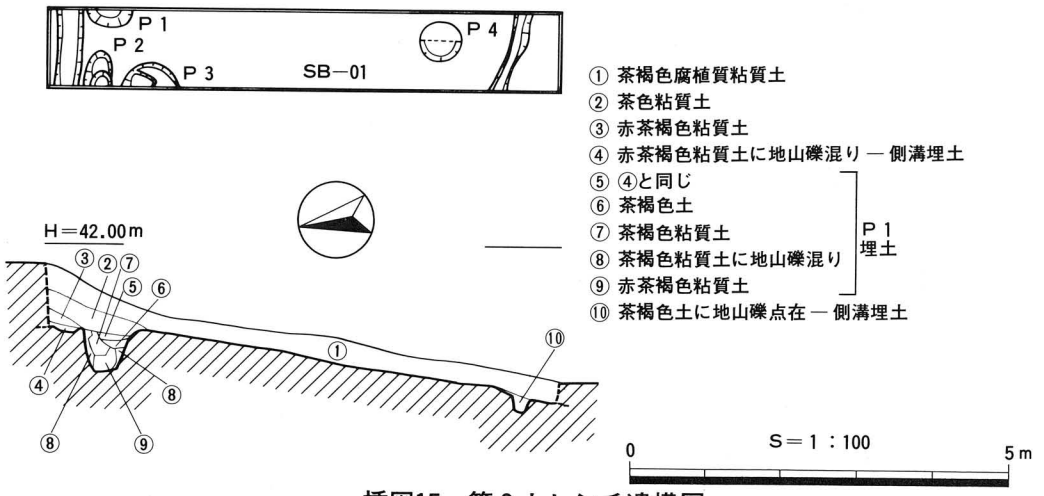
挿図11　高広・高広谷遺跡トレンチ配置図



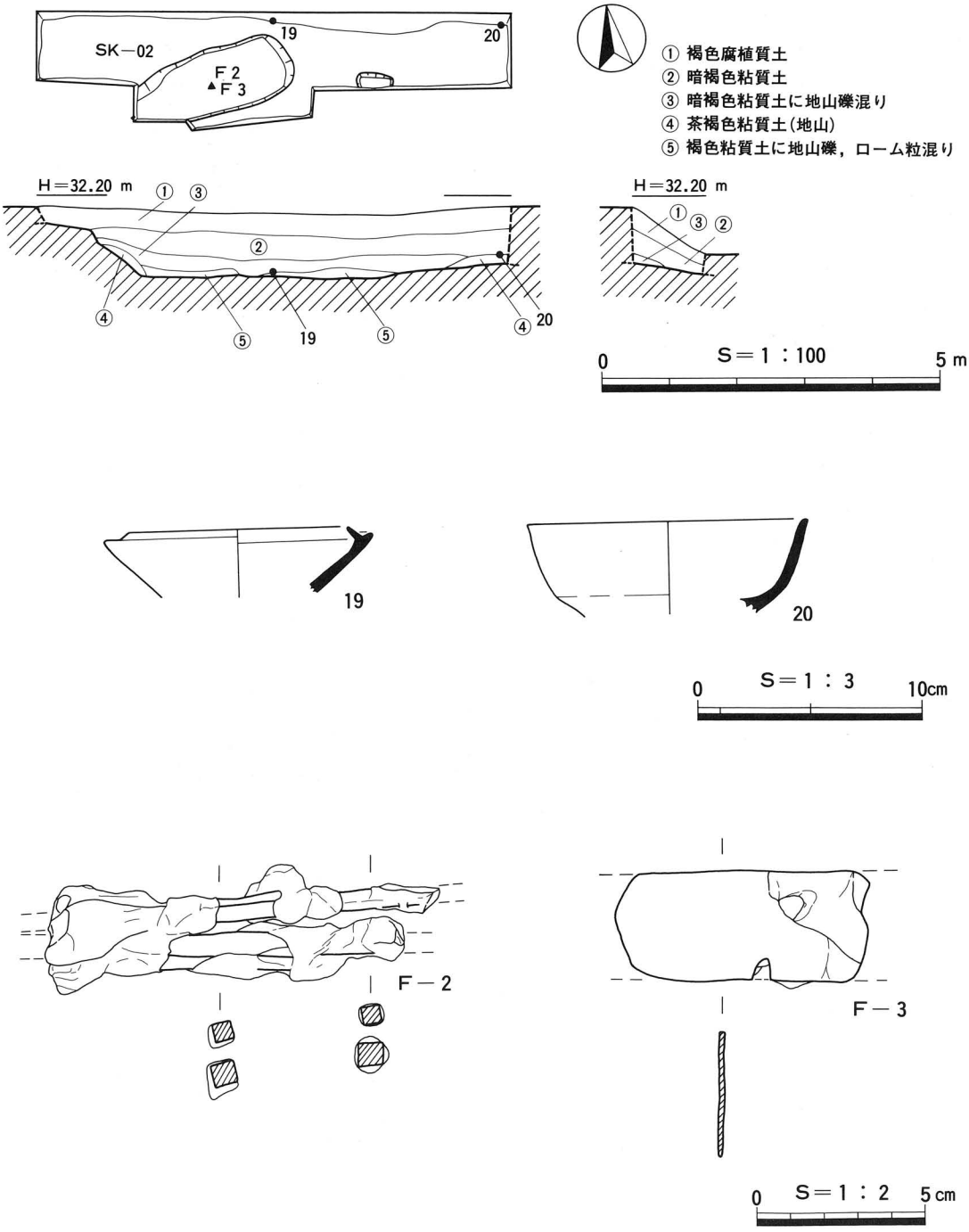
挿図13　第6トレンチ遺構図



挿図14　第7トレンチ遺構図・出土遺物実測図



挿図15　第9トレンチ遺構図



挿図16　第８トレンチ遺構図・出土遺物実測図

制約から遺構の規模も明確ではないが、少なくとも床面が南北長５ｍ以上のものと推定される。

高広谷遺跡Ｅ区

Ｅ区はＯ区の東側で、Ｏ区からさらに150ｍ程谷奥に入った別の丘陵腹部から裾部に位置し、緩傾斜地に、階段状に多い所で５段の平坦面が連接する比較的安定した地盤に立地する。水田との比高差は、18～７ｍを測る。地質をみると、Ｏ区に酷似している。検出した遺構は竪穴住居跡５棟・掘立柱建物跡２棟等である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が多数出土している。なお、１、２、５、７、８、11－Ｔは標高42～28ｍの階段状に５段の平坦面が連接する所に、ほぼ北東から南西にかけて斜面に沿う直線上に、３、４、６－Ｔは等高線に沿う形で設定した。ただし、１、２、３、４－Ｔは十字型である。最高所に設定した８－Ｔから最低所の11－Ｔまでを水平距離でみると約45ｍを測る。また、10－Ｔは11－Ｔの東側約39ｍに、９－Ｔは約55ｍに設定した。いずれも丘陵裾部で２～３段の階段状にテラス部が連接する最下段である。以下は、遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

第１・２・３・４トレンチ（挿図17・18）　山側に壁高0.5ｍ程の法面と平坦面（２～３°の傾斜がつく）をもつ段状遺構と、この段状遺構の谷側に接して造られた竪穴住居跡１棟を検出した。６ｍ未満の方形プランで、側溝は壁際を巡っている。柱穴と思われるピット１基を面検出できたが、トレンチ範囲の制約から、そのプランは復元できなかった。なお、前者の段状遺構は、壁際を側溝が巡らず、法面の傾斜も比較的緩く、平坦面に傾斜がつくことから、ここでは谷側に接する竪穴住居跡に関連する施設として捉える事にした。遺物は土師器・須恵器が出土している。出土遺物から竪穴住居跡の構築時期は、古墳時代中期後半のものと考えられる。

第５トレンチ（挿図19）　山側に壁高0.4ｍで傾斜のきつい壁面とピットを伴う床面を検出した。ただし、壁際を巡る側溝は確認できなかった。建物の復元はできなかったが、竪穴住居跡の可能性が推定される。遺物は土師器・須恵器が出土している。なお、床面直上で検出した須恵器有蓋高坏37は、山本編年Ⅰ期の特色を示す。

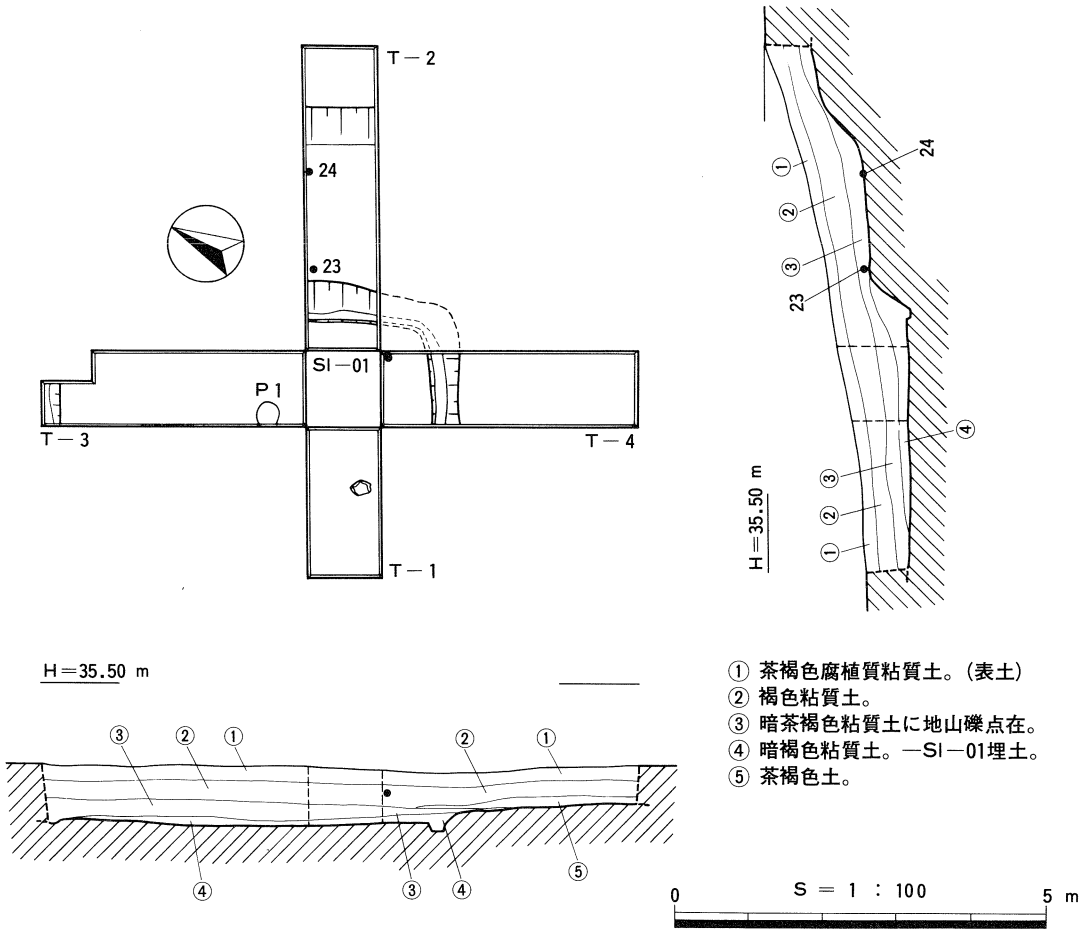
出土遺物から、古墳時代中期後半の構築と考えられる。

第６トレンチ（挿図20）　山側に平面コの字型を呈す法面と、この法面からわずかに離れて巡る側溝を検出した。方形プランを呈すが、山側の傾斜は急で、法面の傾斜も緩く、山側を削り込んで法面を造成し、側溝を巡らした掘立柱建物跡の可能性が推定される。遺物は土師器・須恵器が出土している。古墳時代中期末頃の構築と思われる。

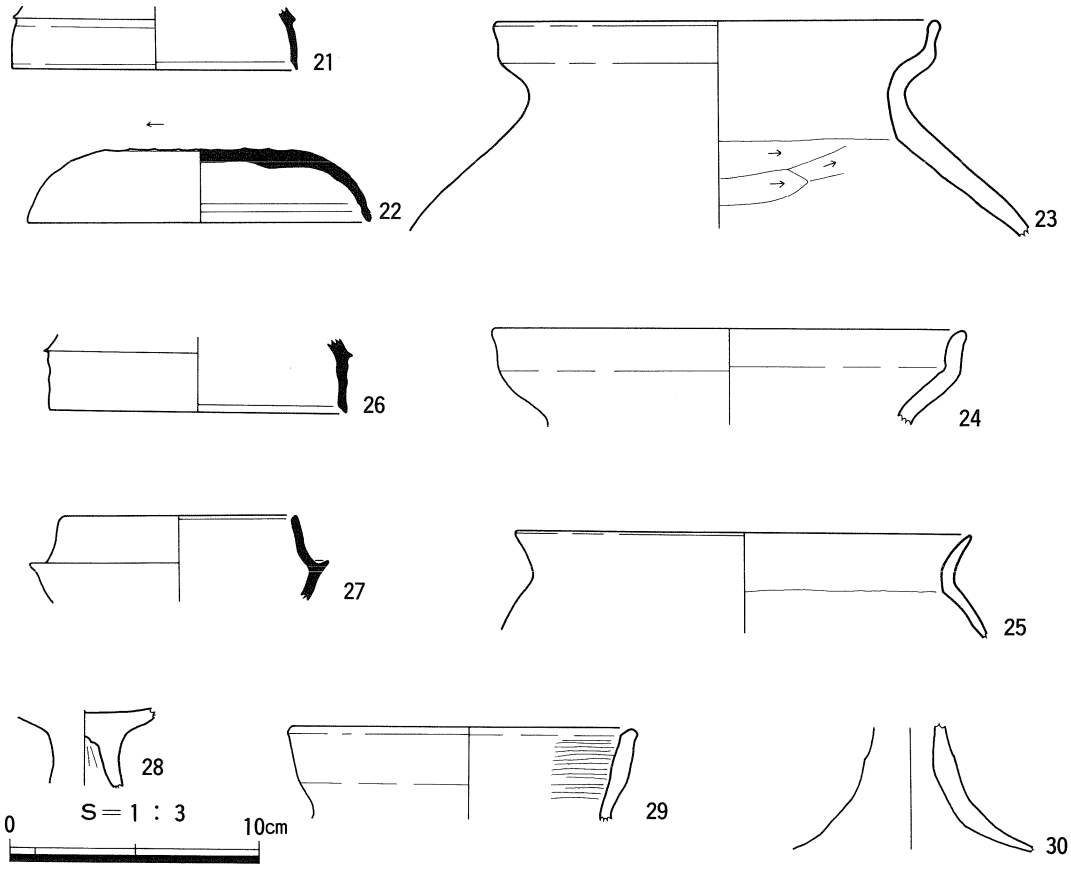
第７トレンチ（挿図21）　山側に壁高0.3ｍの法面と平坦面（壁が焼けて赤色化しているピット１基を伴う）を検出した。竪穴住居状の建物跡と思われる。ピット直上で土師器を検出したが、頸部から肩部にかけての破片で、時期は明確ではないが、周辺の状況からして古墳時代中期後半頃のものと推察される。

第９トレンチ（挿図22）　山側に法面と、その壁際を巡る側溝と平坦面（ピットを伴う）を検出した。山川側傾斜はきつく、掘立柱建物跡の可能性が考えられる。遺物は須恵器が出土している。７世紀中頃の構築と思われる。

第10トレンチ（挿図23・24）　山側を削り込んで法面を造成し、貼床を施し床面を平坦に整えた竪穴住居状の建物跡（SI－04）１棟を検出した。遺物は土師器・須恵器が出土しているが、須恵器坏蓋50、坏身５は床面直上遺物である。この須恵器は50を上に、51を下にセットをなし、あわさった状態で検出された。しかもこのセットの中には、松やに状の樹脂の塊がつまっていた。現在、その材質については鑑定依頼中である。出土遺物より７世紀後半の構築と考えられる。



挿図17　第1･2･3･4トレンチ遺構図



挿図18　第1·2·3·4トレンチ出土遺物実測図

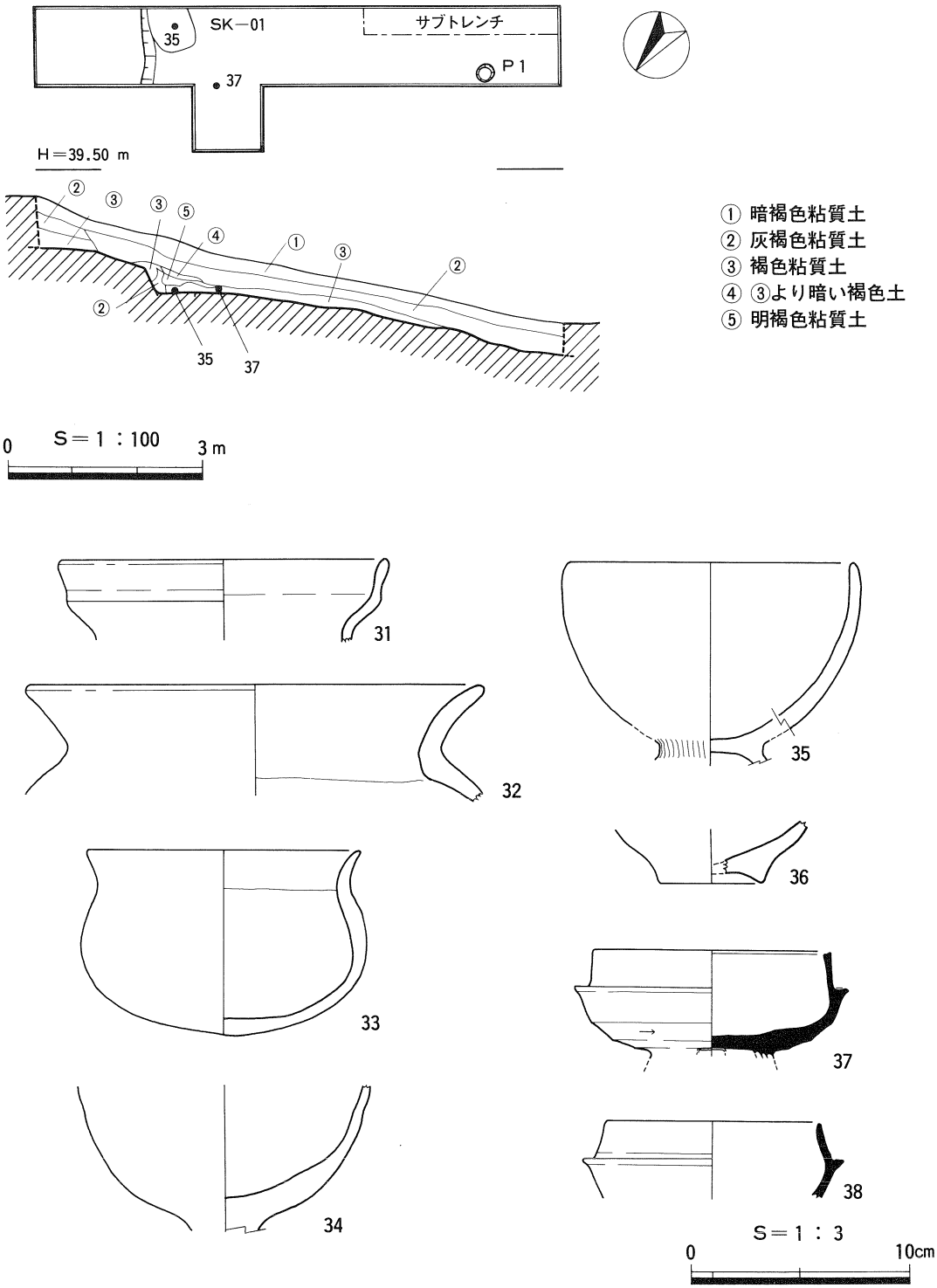
第11トレンチ（挿図25・26・27）　山側に壁高0.8mの法面と平坦面、これに接して谷側に竪穴住居跡１棟を検出した。

１～４－Ｔで検出したSI－01と同じタイプのものと思われる。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土している。なお、山側に削り込まれた法面や平坦面の上方から出土した土器の状態からは、本遺構が廃絶した後、余り時間を経ずにこれらが投棄されたと推察される。SI－05の構築時期は、床面直上遺物（サブトレンチ内）がみられなかった為、明確にし得ないが、周辺出土遺物から古墳時代中期頃と推定される。

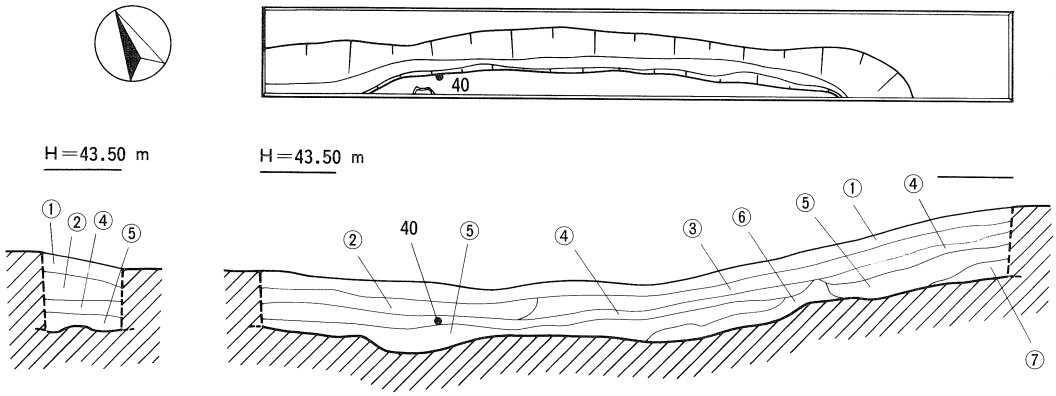
高広谷Ｓ区

高広谷遺跡Ｅ区の南側に所在する別の丘陵中腹部に試掘トレンチを２本設定したが、遺構、遺物は全く認められなかった。

（松本　哲）

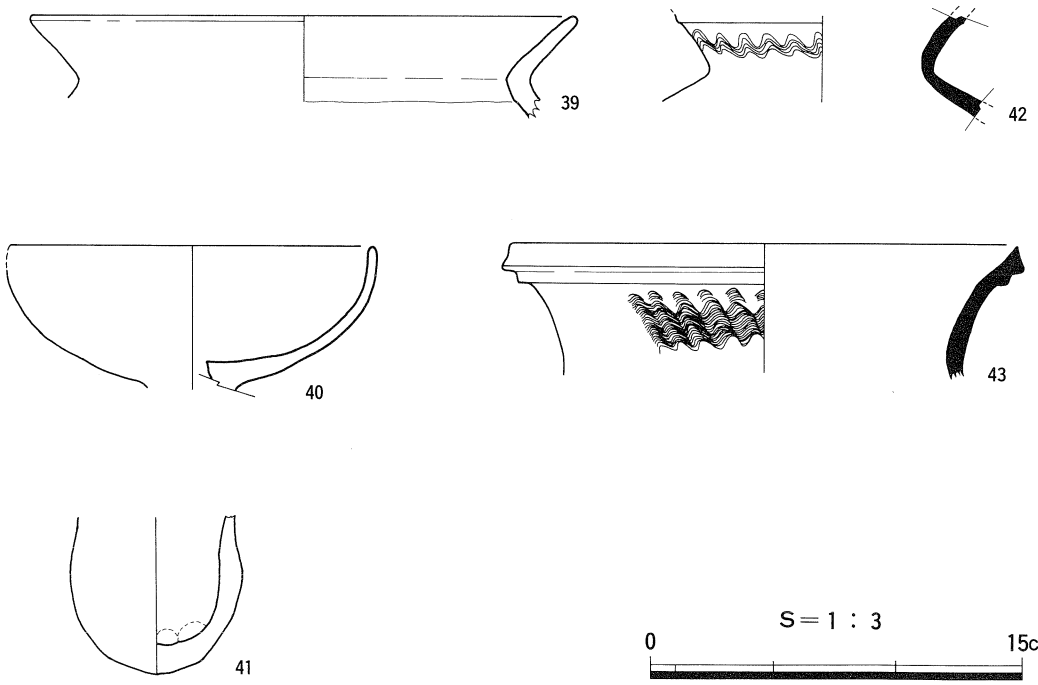


挿図19　第５トレンチ遺構図・出土遺物実測図



① 黒褐色腐植土
② 灰褐色腐植土
③ 褐色土に②混り
④ 粘質性褐色土に黒灰色土混り
⑤ 明褐色土に大礫混り
② 茶褐色粘質土
⑦ 灰褐色土に大礫混り

S＝1：100
0　5 m



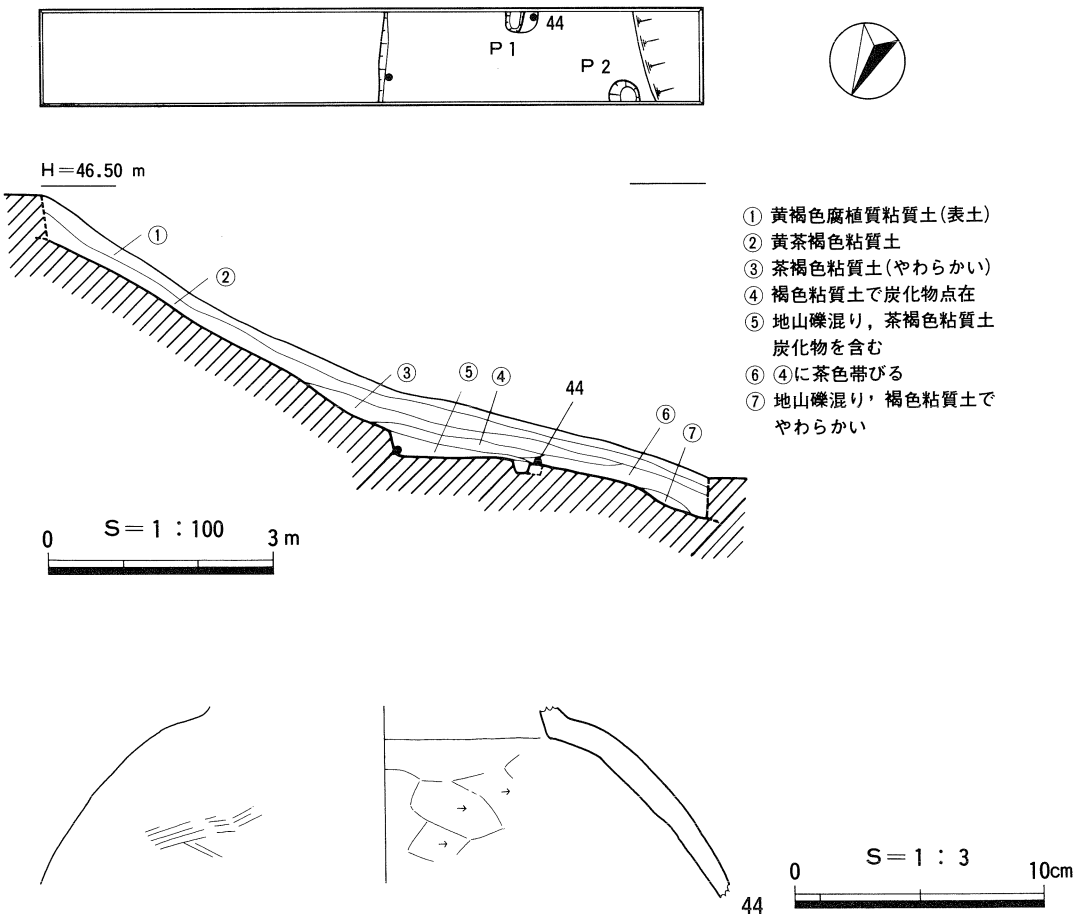
S＝1：3
0　15cm

挿図20　第6トレンチ遺構図出土遺物実測図

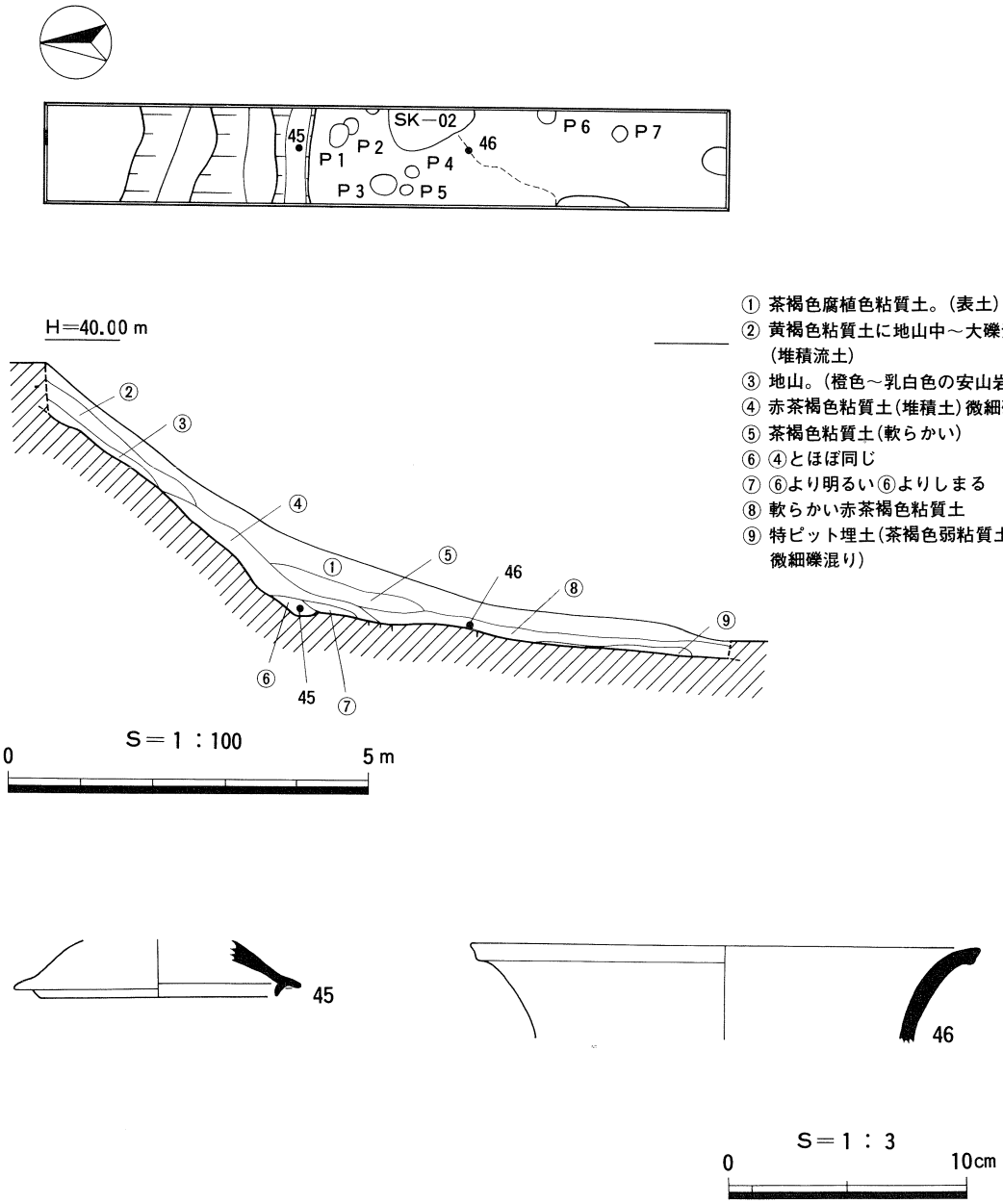
まとめ

高広谷遺跡O区では、数段の階段状テラス地形を利用して、弥生時代終末期や、古墳時代終末期～奈良期の集落跡が、E区では多い所で5段に及ぶ階段上テラス地形を利用して、古墳時代中期や終末期の集落がみられた。両区とも南西に細長く開けた谷間を臨む丘陵腹部から裾部の階段状テラス地形に立地している。時期的にみても、弥生時代終末期と古墳時代中期及びそれ以降に営まれた集落跡であり、周辺にも同じような地形を利用して小規模な集落が点在している様子が窺われる。なお、両区とも横穴墓の所在を想定して、斜面部にトレンチを設定した所もあるが、横穴墓は確認できなかった。これは、両遺跡を形成する岩質にも起因するものと思われる。

（松本　哲）

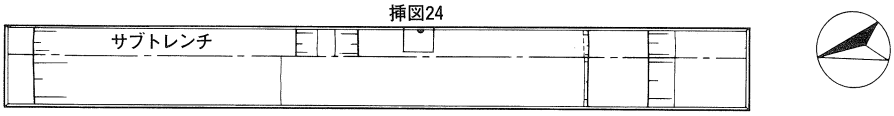


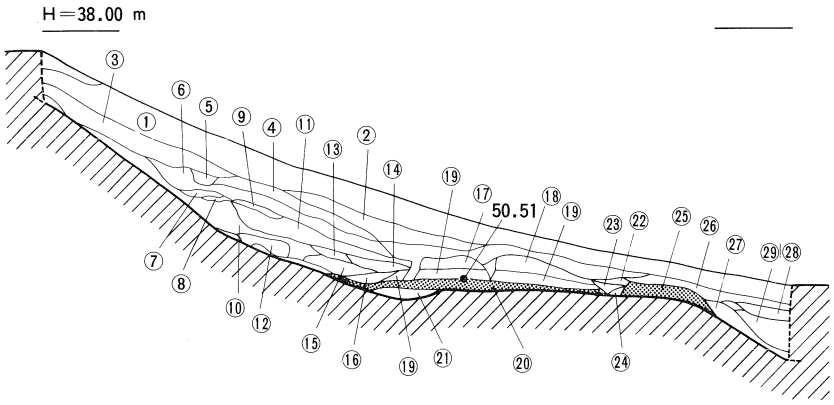
挿図21　第7トレンチ遺構図・出土遺物実測図



挿図22　第９トレンチ遺構図・出土遺物実測図

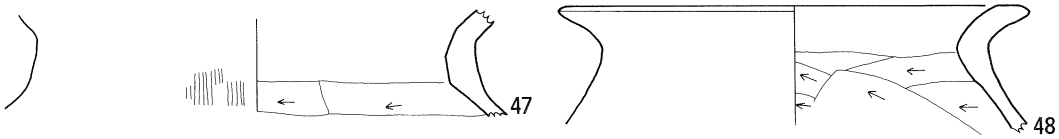
挿図24

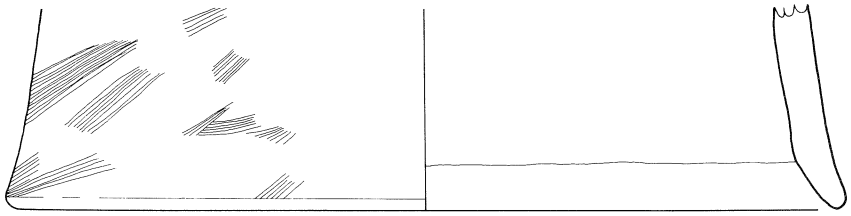




① 黄茶褐色腐植質粘質土に炭化物，焼土ブロックわずかに点在。（表土）
② 茶褐色粘質土に炭化物，焼土ブロック地山礫混り。
③ 褐色粘質土，微細炭化物，焼土ブロック点在でしまる。
④ 褐色粘質土で，全体に微細炭化物と焼土ブロック含む。
⑤ 地山紅色礫混り，茶褐色粘質土でしまる。
⑥ 茶褐色粘質土，③より多く炭化物含む。
⑦ 地山風化土混り，茶褐色粘質土でしまる。
⑧ 炭化物層。
⑨ ⑦と同じ。
⑩ 地山流土。
⑪ 黄褐色粘質土で地山細礫混じりでややしまる。
⑫ ⑩ と同じ。
⑬ 褐色粘質土に地山微細礫混り
⑭ 茶色粘質土に地山中～細礫混りかたい。
⑮ 暗褐色粘質土に地山中～細礫混りややしまる。
⑯ 茶色粘質土に地山礫混り。
⑰ 黄褐色粘質土に地山礫点在，ややしまる。
⑱ ⑰と同じ。
⑲ ⑯と同じだが地山の大～中礫が多い。
⑳ 地山礫多量に茶色粘質土少量の貼床。
㉑ 黒褐色腐植質森林火山灰土に地山礫混り。
㉒ 炭化物焼土。
㉓ 黄褐色粘質土に地山礫点在。
㉔ 炭化物，焼土。
㉕ 茶色粘質土（地山）
㉖ 褐色土に炭化物点在。
㉗ 茶褐色粘質土（漸移層）
㉘ 茶褐色粘質土に炭化物点在。
㉙ 茶褐色粘質土に地山微細礫混り。

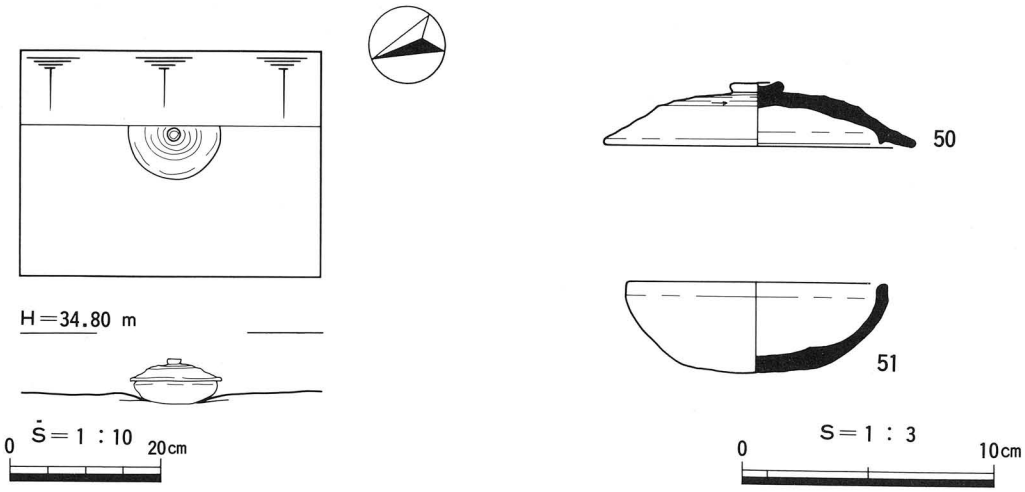
S＝1：100
0　5 m



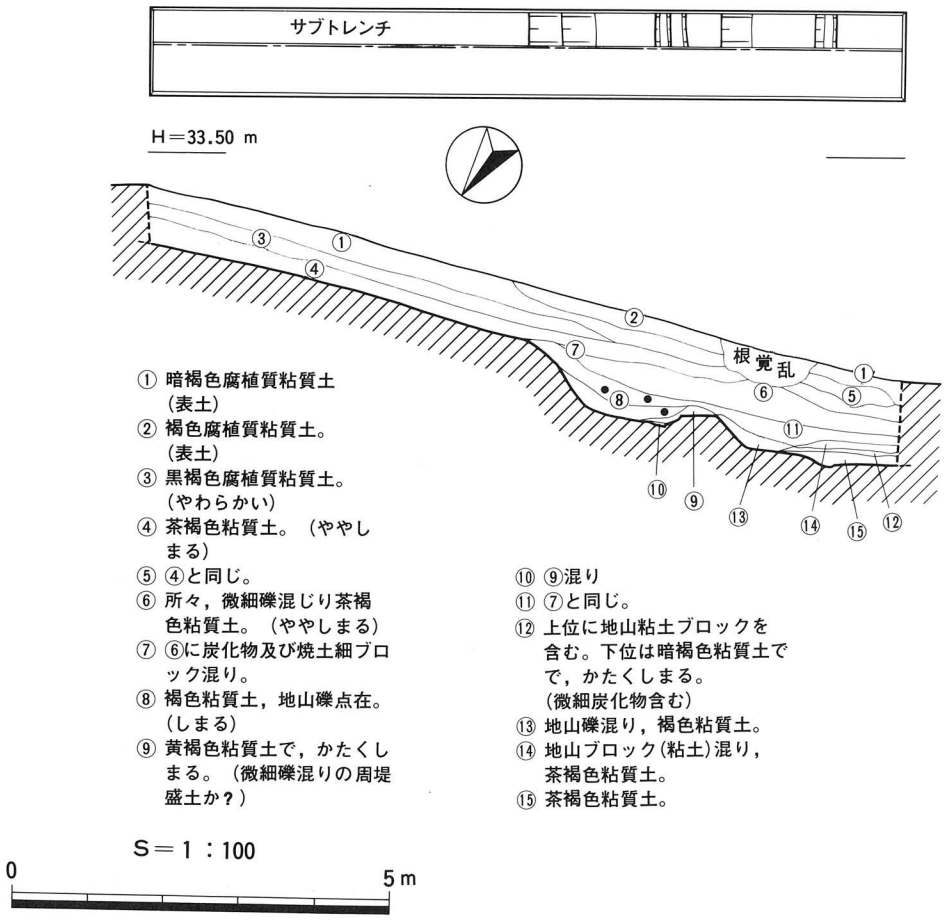


S＝1：3
0　10cm

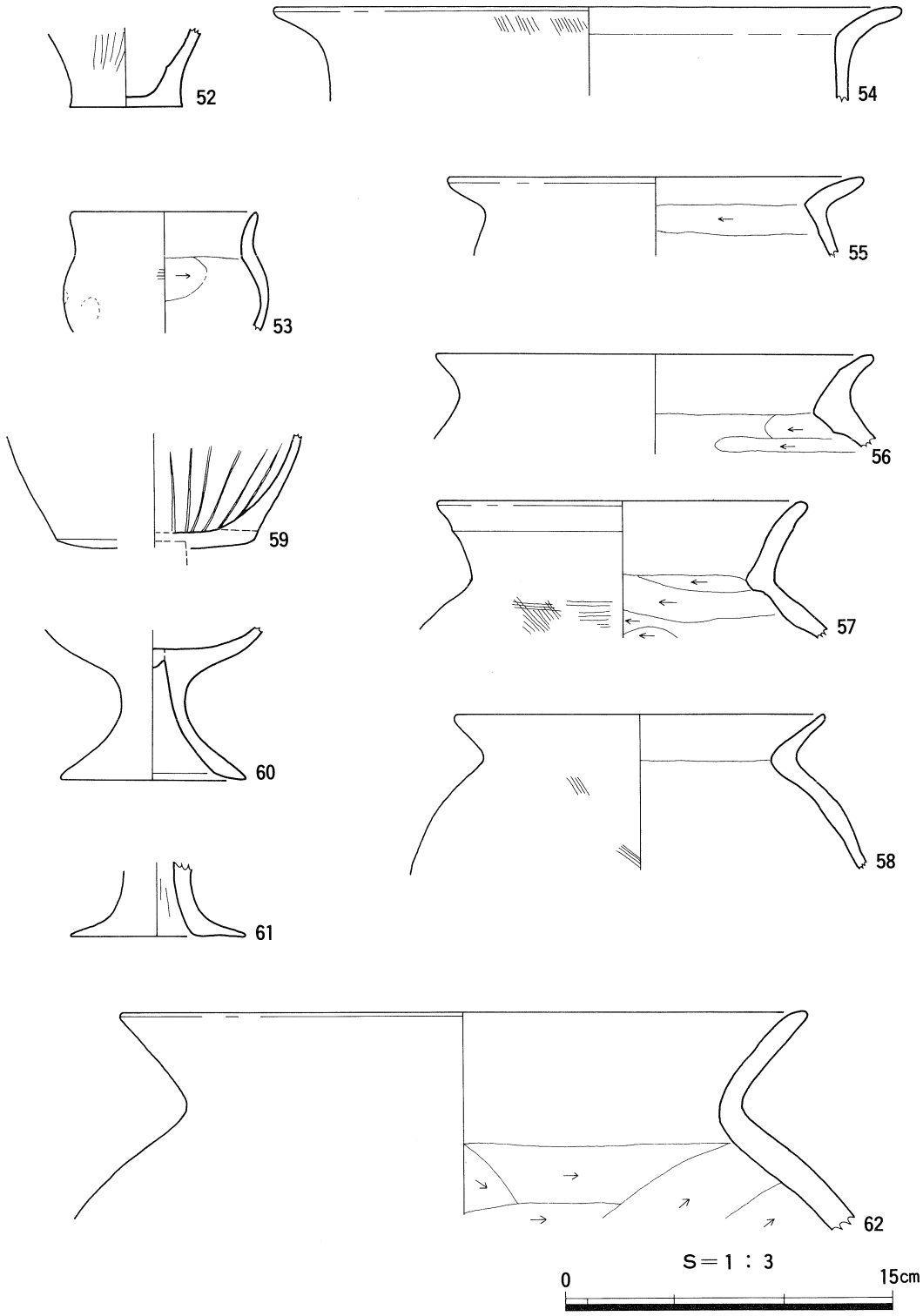
挿図23　第10トレンチ遺構図・出土遺物実測図



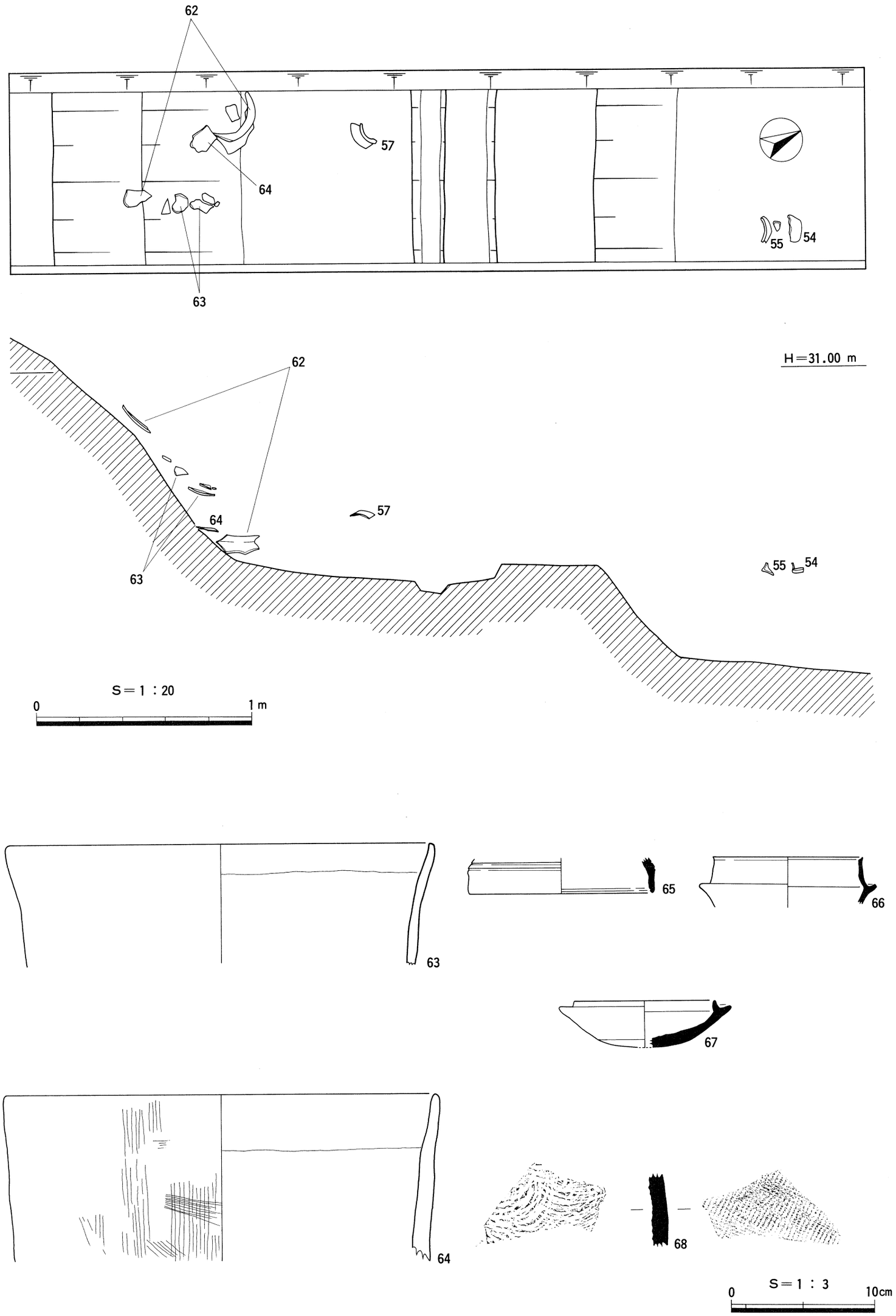
挿図24　第10トレンチ出土遺物実測図



挿図25　第11トレンチ遺構図



挿図27　第11トレンチ出土遺物実測図



挿図26　第11トレンチ遺物出土状況図・遺物実測図

挿表９　高広谷遺跡Ｅ区出土遺物観察表（１～11－Ｔ）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
須恵器 坏蓋	21	18	12	14	復口径 11.4cm	口縁部の破片。天井部との境に明瞭な稜をもつ。口縁端部外面は，やや外方に向けて尖がり，内面は明瞭な段をなす。	口縁部 内外面とも回転ヨコナデ。	１㎜径以下の白色砂粒を均質的に含み密。	良好	灰色	１－Ｔ
須恵器 坏蓋	22	18	12	39	復口径 13.5cm	天井部と口縁部の破片(完形品の約1/2残存)。口縁部はやや内湾気味で外方に開きながら下り，端部は丸くおさめる。端部内面には１条の浅い凹線を巡らす。天井部と口縁部の境は不明瞭。天井部は平坦。	口縁部内外面 回転ヨコナデ。 天井部外面 中心からのヘラ削り。内面 仕上ナデ。	１㎜径以下の白色砂粒を均質的に含み密。	良好	濃灰色	１－Ｔ
土師器 甕	23	18	12	88	復口径 18.0cm	口縁部～肩部の破片。口縁部は退化した複合口縁を呈し，短く，やや外傾気味に立ち上がり，端部は丸くおさめる。口縁部下端の稜は鈍い。口縁部内面の段は明瞭ではない。頸部は「くの字」状で，肩部はなで肩状に大きく張り出す。	口縁部，頸部 内外面ヨコナデ。 肩部外面 ヨコナデ。 肩部内面 ヘラ削り。	密。１～２㎜径の白色砂粒を粗雑に含む。	良好	淡黄茶色	２－Ｔ
土師器 甕	24	18	12	41	復口径 18.8cm	口縁部破片。口縁部は退化した複合口縁状を呈し，短く，やや直立気味に立ち上がり，端部で僅かに外反する。口唇端面は，丸くおさめる。口縁部内面の段は，強いヨコナデにより明瞭。	内外面ともヨコナデ。	１～２㎜径の白色砂粒を粗雑に含む。	良好	黄茶色	２－Ｔ
土師器 甕	25	18	12	50	復口径 18.4cm	口縁部破片。口縁部は「くの字」状に屈曲する単純口縁で，端部は先細りとなる。	口縁部内外面 ナデ。 頸部内面 ヘラ削り。	１㎜径以下の砂粒を含み密。	普通	内外面とも明赤茶色	２－１－Ｔ
須恵器 坏蓋	26	18		37	復口径 12.0cm	口縁部と天井部の破片。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもつ。口縁部は直立気味で下り，端部は尖がり気味で内面に段をなす。	口縁部内外面 回転ヨコナデ。	１㎜径以下の白色砂粒を含み密。	良好	灰色	２－Ｔ
須恵器 坏身	27	18	12	37	復口径 9.4cm	立ち上がりと受部の破片。立ち上がりは内傾し長く延び，端部内面には段をなす。受部は横上方に鋭く延びる。	風化の為内外面とも調整不明。	密。	普通	乳灰色	２－Ｔ
土師器 高坏	28	18		99		脚部の破片。	風化の為内外面とも調整不明。	１㎜径以下の白色砂粒を含み密。	良好	淡黄茶色	３－Ｔ
土師器 甕	29	18	12	15	復口径 13.8cm	口縁部の破片。口縁部は外傾しながら立ち上がる単純口縁で，上端部は押えた外傾する面をもつ。	口縁部外面 ヨコナデ。 口縁部内面 横刷毛目。	１㎜径以下の白色砂粒を含み密。	良好	淡黄色	４－Ｔ
土師器 高坏	30	18	12	90		脚部。脚部は「ハの字」状に大きく開く。	風化の為内外面とも調整不明。	１㎜径以下の白色砂粒を均質的に含み密。	良好	明橙黄色	４－Ｔ
土師器 甕	31	19	12	62	復口径 14.8cm	口縁部破片。口縁部は短く外傾する退化した複合口縁状を呈し，上端部は丸味を持つ。口縁部下端は強いヨコナデによる稜をつくる。内面の段は不明瞭。	外面 風化により調整不明。 内面 ヨコナデ。	粗。	普通	淡黄色	５－Ｔ
土師器 甕	32	19	12	17	復口径 21.0cm	口縁部。口縁部は「くの字」状に屈曲する単純口縁で外反しながら立ち上がり，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面 ヨコナデ。 頸部内面 削り。	密。１～２㎜径の砂粒を含む。	良好	淡黄茶色	５－Ｔ
土師器 小型丸底鉢	33	19	12	81	復口径 13.0cm	口縁部から体部(完形品約1/3残存)。口縁部は，外反し端部に向けて先細りとなる。頸部の括れは緩く偏球上の体部に続く。	外面 ナデ。 内面 頸部以下削り。	１～２㎜径の砂粒を含み密。	良好	明茶色	５－Ｔ
土師器 高坏	34	19		65・79	不明	椀状のやや深めの坏部。	外面 風化により調整不明。 内面 口縁部ナデ。	密。	良好	外面 淡橙茶白色 内面 淡橙白色	５－Ｔ
土師器 低脚坏	35	19	12	9	復口径 13.0cm	深い椀状の坏部。坏部内面に朱が残る。	外面 口縁部ヨコナデ。脚部タテハケメ。 内面 口縁部ヨコナデ。	微細砂粒を含み密。	良好	淡橙赤色	５－Ｔ
土師器 椀	36	19	12	58	復口径 4.6cm	椀底部～高台部。	風化の為内外面とも調整不明。	密。１～２㎜径の白色砂粒を含む。	良好	明黄茶色	５－Ｔ

挿表10　高広谷遺跡Ｅ区出土遺物観察表 ①（5～11－Ｔ）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
須恵器有蓋高坏坏部	37	19	12	27	復口径11.0cm	坏部(完形品の約1/2残存)と僅かに脚部が残る。立ち上がりは内傾し，長く延び端部内面に段を持つ。受部は水平方向に鋭く延びる。底部は平坦。脚部には透かし孔を三方に持つと思われるが透かし孔の形態は不明。	口縁部内外面 回転ヨコナデ。 底部外面 ヘラ削り。 内面底部不正方向仕上げナデ。	1㎜径以下の白色砂粒を均質的に含み密。	良 好	青灰色	5－T
須恵器坏身	38	19	12	9	復口径9.8cm	立ち上がりから受部，体部の破片。立ち上がりは内傾し長く延び，端部は先細りで丸味を持つ。立ち上がりと受部の間に浅い凹みを持ち，受部は水平方向に鋭く延びる。	回転ヨコナデ。	1㎜径以下の白色砂粒を均質的に含み密。	良 好	濃灰色	5－T
土師器甕	39	20	12	56	復口径22.0cm	口縁部の破片。口縁部は「くの字」状に屈曲する単純口縁で，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ともナデ。 頸部内面 削り。	1～2㎜径の長石石英を均質的に含み密。	良 好	茶褐色	6－T
土師器高坏	40	20	12	77	復口径14.4cm	椀状の坏部。内外面に所々朱が残る。	口縁部内外面ともヨコナデ。その他は風化の為調整不明。	緻 密。	良 好	淡明赤褐色	6－T
土師器手づくね土器	41	20	12	78		体部は球形。	外面は風化の為調整不明。 内面に指頭圧痕跡有り。	密。1～2㎜径の砂粒を含む。	良 好	淡灰茶色	6－T
須恵器甕	42	20	12	33・36		頸部のみ約1/2残存。頸部に細かいクシ描波状文を施す。	内外面ともヨコナデ。	1㎜径の白色砂粒を含み密。	良 好	濃灰色	6－T
須恵器甕	43	20	12	34	復口径20.3cm	口縁部破片。口縁部外面に2段の稜を持ち，その直下にクシ描波状文を施す。	内外面ともヨコナデ。	1㎜径の白色砂粒を含み密。	良 好	濃灰色	6－T
土師器	44	21		69	不 明	頸部～肩部。	頸部内外面ともヨコナデ。肩部以下ヨコハケメ，ナナメハケメ。肩部内面以下削り。	密。1～2㎜径の白色砂粒を粗雑に含む。	良 好	黄茶色 外面わずかにスス付着	7－T
須恵器坏蓋	45	22	12	10	復口径9.8cm	口縁部の破片。口縁部内面に返りを持つが，返りは口端部より下方に突出する。	内外面とも回転ヨコナデ。	微細砂粒を含み密。	良 好	外面 濃灰色 内面 濃赤灰褐色	9－T
須恵器甕	46	22	12	10・54	復口径21.2cm	口縁部破片。口縁部外面に段をなす。	内外面とも回転ヨコナデ。	緻 密。	良 好	淡灰白色	9－T
土師器壺	47	23	12	2		口縁部破片。	口頸部外面 ヨコナデ。肩部内面 タテハケメ。 口頸部内面 ヨコナデ。肩部内面 削り。	微細粒多量に含む。	良 好	明黄茶色	10－T
土師器甕	48	23	12	2	復口径19.0cm	口縁部～肩部の破片。口縁部は「くの字」状に屈曲する単純口縁で，上端部は強いヨコナデにより平坦面をつくる。肩部はゆるやかに張り出す。	口縁部内外面ヨコナデ。 肩部 ヨコナデ。 頸部内面以下 削り。	白色微細砂粒を含み密。	良 好	淡橙黄色	10－T
土師器かまど	49	23	12	54	復底径33.0cm	かまど底部破片。	外面 ヨコハケ。 内面 削り。 端部 ナデ。	微細粒多量に含む。	普 通	外面 黒灰色 内面 黄茶色	10－T
須恵器坏蓋	50	24	12	85	口 径12.4cm 器高2.55cm	天井部中央に径2.1cmを測る中央が凹んだ円形のつまみが付く。天井部は1段高くふくらむ。口縁端部は丸くおさめ，口縁部内面に返りを持つが，返りの先端は口縁部以下に突出しない。	天井部外面 ヘラ削り。 天井部内面中央 仕上げナデ。 口縁部内外面 回転ヨコナデ。	1㎜径の白色砂粒を均質的に含み密。	良 好	青灰色	10－T
須恵器坏身	51	24	12	86	口 径10.4cm	浅い椀状を呈す坏身で，口縁部は強いヨコナデにより短く直立し，端部は丸くおさめる。	外面 回転ヨコナデ。 底部外面中央はヘラ切り後未調整。 内面 回転ヨコナデ。 底部内面中央 仕上げナデ。	1㎜径の白色砂粒を均質的に含み密。	良 好	青灰色	10－T
弥生土器甕底部	52	27		97	復底径5.0cm	底部は平坦。	外面に削り。	密。微細砂粒を含む。	良 好	外面 灰褐色 内面 淡橙黄色	11－T
土師器小型丸底壺	53	27		60	復口径8.4cm	口縁部～体部。口縁部は外傾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。頸部の括れは緩やかで体部は球状。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面 ヨコハケ。指頭圧痕跡。 頸部内面以下削り。	1～3㎜径の長石石英が粗雑に含まれやや密。	良 好	茶褐色	11－T
土師器甕	54	26		96	復口径29.0cm	口縁部破片。口縁部は大きく外反し，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面風化が激しいが，外面には所々斜めハケメが見られる。	1～3㎜径の砂粒を粗雑に含みやや密。	不 良	淡黄色	11－T

挿表11　高広谷遺跡Ｅ区出土遺物観察表 ②（5～11－Ｔ）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
土師器甕	55	26		96	復口径19.0cm	口縁部～端部。口縁部は「くの字」状の単純口縁で，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部以下 風化の為調整不明。 頸部内面以下 削り。 口縁部内面に黒斑有り。	1～2㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	淡黄褐色	11－T
土師器甕	56			72	復口径20.0cm	口縁部～肩部。口縁部は「くの字」状口縁で外反しながら立ち上がり，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面 ナデ。 頸部内面以下 削り。	1～2㎜径の砂粒を含みやや密。	良好	外面 赤茶褐色 内面 明黄茶色	11－T
土師器甕	57	26		95	復口径17.0cm	口縁部～肩部。口縁部は「くの字」状口縁で外傾しながら立ち上がり，端部で強いヨコナデにより外反する。口端面は丸くおさめる。内面黒斑有り。外面スス付着。	口縁部内外面ヨコナデ。 肩部外面 ヨコハケメが見られる。 頸部以下 内面削り。	密。1～2㎜径の白色砂粒を含む。	普通	淡黄茶色	11－T
土師器甕	58	27		91	復口径16.9cm	口縁部から肩部破片。口縁部は「くの字」状口縁で端部に向かって先細りとなる。	口縁部内外面 ナデ。 肩部～胴部外面に所々斜めハケメが見られる。 頸部内外面以下削りが見られるが，風化の為削りの単位や方向は不明。	1～3㎜径の砂粒を含みやや密。	良好	淡黄茶色	11－T
土師器高坏	59	27		67	復底径9.0cm 他は不明	坏部(約1/4残存)。坏部内面は平坦。口縁部は，内湾気味に立ち上がる。坏部外面に稜を持つ。	外面 風化の為調整不明。 内面 放射状暗文を施す。	微細砂粒所々に含み緻密。	良好	橙黄色	11－T
土師器高坏	60	27		68	復脚底径8.6cm	坏底部～脚部。坏部は椀状を呈す。柱状部は短めで「ハの字」状に開く裾部に続く。	内外面ともナデ。 外面に所々朱が残る。	密。	良好	淡黄茶色	11－T
土師器高坏	61	27		60	脚底径8.0cm	脚部。柱状部は内傾気味に下り，裾部は「ハの字」状に大きく開く。裾部端面は平坦。	外面 ナデ。 柱状部内面に絞り目。	微細砂粒を含み密。	普通	淡橙黄色	11－T
土師器甕	62	26 27	13	93・91	復口径31.6cm	大型甕の口縁部～肩部。口縁部は「くの字」口縁で大きく外反して立ち上がり，端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 肩部外面以下は風化の為調整不明。 頸部内面以下 削り。	1～3㎜径の砂粒を粗雑に含みやや密。	良好	橙黄色	11－T
土師器甑型土器	63	26		60・67 68・92	復口径30.0cm	口縁部破片。口縁部は外傾気味に立ち上がり，端部で直立し，口端面はやや角張る。	口縁部内外面 ナデ。 胴部内面以下 削り。	密。1～2㎜径の白色砂粒を含む。	良好	内外面とも濃赤褐色	11－T
土師器甑型土器	64	26		93	復口径30.0cm 他は不明	口縁部～端部。口縁部は小さく波をうちながら直線的でやや外傾気味に立ち上がり，端部で器壁が薄くなり，端部は丸くおさめる。	口縁部～体部外面 タテハケメ，ナナメハケメ。 口縁部内面 ナデ。 体部内面以下 削り。	密。1～2㎜径の白色砂粒を粗雑に含む。	良好	淡橙黄色	11－T
須恵器坏蓋	65	26		51	復口径12.8cm	口縁部破片。天井部と口縁部の境は2条の凹線で区別される。内面端部にも1条の凹線が巡る。	口縁部内外面 回転ヨコナデ。	微細砂粒を含み密。	良好	外面 黒灰色 内面 灰色	11－T
須恵器坏身	66	26		B	復口径10.4cm	立ち上がりと受部の破片。立ち上がりは内傾し長く延び端部内面には，明瞭な段をなす。受部は横上方に延びる。	内外面とも回転ヨコナデ。	微細砂粒を含み緻密。	良好	灰色	11－T
須恵器坏身	67	26		52	復口径9.6cm	坏身破片(完形品の約1/2残存)。立ち上がりは短く内傾し，端部は丸くおさめる。受部は横上方に延び，端部は丸くおさめる。底部の器壁は厚め。	口縁部内外面とも回転ヨコナデ。 底部外面ヘラ切り後，粗いナデ調整，板目痕有り。 内面仕上げナデ。	微細砂粒を含み緻密。	良好	青灰色	11－T
須恵器	68	26		49	不明	不明。	外面 タテ方向の平行叩きの後，浅いカキメ。 内面 青海波文叩き。	微細砂粒を含み密。	良好	淡青灰色	11－T

高広谷遺跡Ｏ区出土遺物観察表

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
須恵器坏身	18	14	12	1	口径12.0cm 器高4.0cm	ほぼ完形品。立ち上がりは短く，内傾し器壁は肉薄。受部は横上方へ延びる。全体に器壁は薄い。	口縁部内外面 回転ヨコナデ。ナデ調整。 底部外面 ヘラ切り後ナデ調整。 底部内面 不正方向ナデ仕上げ。	1㎜径以下の白色砂粒を含み密。	良好	灰色	7－T
須恵器坏身	19	16		1	復口径9.8cm	坏身。口縁部破片。立ち上がりは短く内傾し，端部に向かって肉薄となる。受部は横上方に延び，端部は丸味を持つ。	内外面とも回転ヨコナデ。	微細砂粒を含み密。	良好	青灰色	8－T
須恵器無蓋高坏	20	16		9	復口径12.4cm	坏部破片。口縁部は，外傾して立ち上がり，端部は丸くおさめる。	内外面 回転ヨコナデ。	1㎜径以下の白色砂粒を含み密。	良好	淡黄灰色	8－T

挿表12　高広谷遺跡O区トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出土遺構	出土遺物
T－1	6.3 × 1.2		
T－2	2.5 × 1.2	雨落し溝	
T－3	4.2 × 1.2		
T－4	4.0 × 1.2	雨落し溝	
T－5	13.0 × 1.2		
T－6	9.5 × 1.0	竪穴住居跡，貯蔵穴	
T－7	6.0 × 1.2		須恵器
T－8	7.0 × 1.0	段状遺構，土壙墓	土師器，須恵器，鉄鏃
T－9	6.7 × 1.0	ピット，溝状遺構	
T－10	5.0 × 0.6		須恵器

高広谷遺跡E区トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出土遺構	出土遺物
T－1	2.0 × 1.0	竪穴住居跡	土師器，須恵器
T－2	4.0 × 1.0	竪穴住居跡，段状遺構	土師器，須恵器
T－3	3.0 × 1.0	竪穴住居跡	〃，〃
T－4	3.55× 1.0	〃	〃，〃
T－5	8.0 × 1.15	段状遺構，ピット	土師器，須恵器
T－6	10.0 × 1.0	〃，溝状遺構	〃，〃
T－7	8.8 × 1.2	〃，〃	〃，〃
T－8	6.5 × 1.2		
T－9	9.4 × 1.3	掘立柱建物跡	土師器，須恵器
T－10	10.0 × 1.1	竪穴住居跡（貼床）	〃，〃
T－11	10.0 × 1.2	〃	弥生土器，土師器，須恵器

高広谷遺跡S区トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出土遺構	出土遺物
T－1	5.0 × 1.0		
T－2	5.0 × 1.0		

第４節　小赤はだ古墳群

小赤はだ古墳群は標高50ｍ前後の丘陵枝尾根上に点在する古墳群であるが、今回の調査対象区からは除外される為、試掘トレンチは丘陵部の平坦面（１・２－Ｔ）、枝尾根舌状部平坦地（３－Ｔ）、尾根上平坦部と傾斜変換点からやや降った幅狭なテラス地形（４・５－Ｔ）に設定した。なお、６、７－Ｔは本遺跡の南西側130～150ｍに位置する別の丘陵中腹部の斜面やテラス地形を呈す所に設定した。以下は遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

第１トレンチ　山側で径0.4ｍのピット１基を検出した。地山面は谷に向かって緩やかに傾斜している。遺物は全く出土しなかった為、時期は不明である。

第２トレンチ（挿図29）　１－Ｔの西側７ｍで、１－Ｔにほぼ平行に設定した。なお、１、２－Ｔとも現況竹林である。遺構は浅い落ち込みを確認した。この遺構埋土中からは、近世の陶器が出土している。

第３トレンチ（挿図30）　平坦面で土壙２基（検出面方形プラン）とピット１基を確認した。遺物は須恵器が出土している。

第４トレンチ　検出面楕円形状の土壙１基を確認したが、遺物は全く出土しなかった為、時期、性格とも不明である。

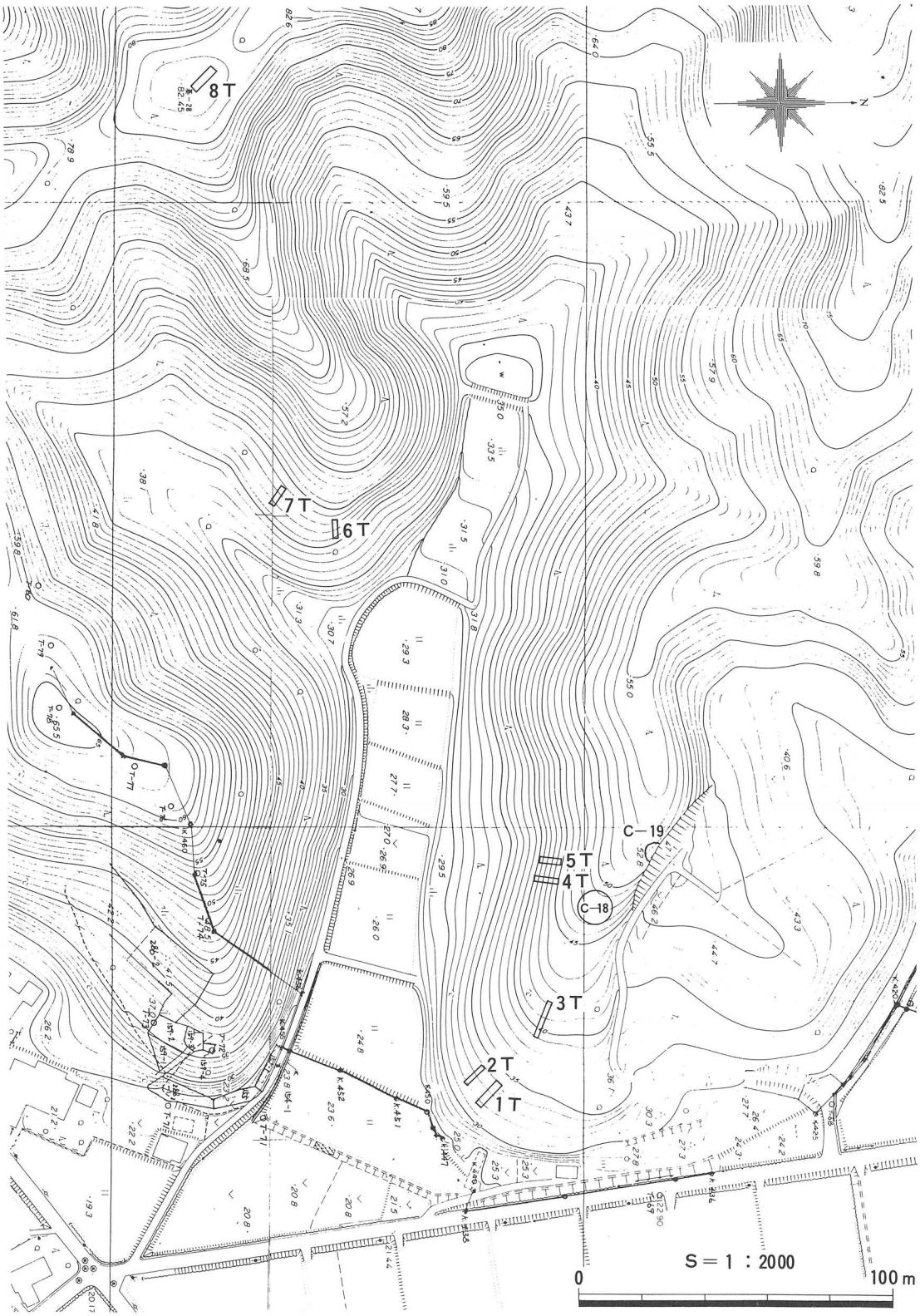
まとめ

小赤はだ古墳群では尾根上平坦部の他に、斜面部のテラス地形を呈する所で、近世の遺構（性格は不明）を検出したが、本遺跡の北側（調査区域外の耕作道）で竪穴住居跡と思われる浅い落ち込みが面で確認できた。埋土中に土師器・須恵器の細片を包含することから、古墳時代後期のものと思われる。もともとは、斜面部のテラス地形に立地していた様子が窺われる。これら周辺の状況から推察して調査区域内にも古墳時代の集落跡が所在する可能性はあるものと言える。

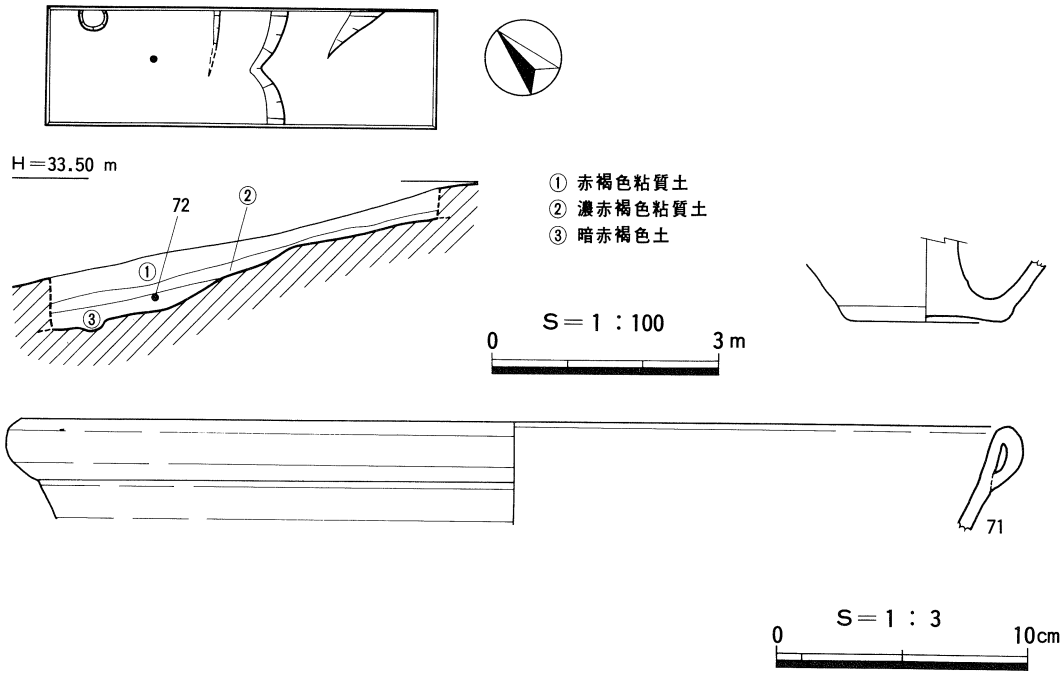
（妹尾秀樹）

挿表14　小赤はだ古墳群トレンチ一覧表

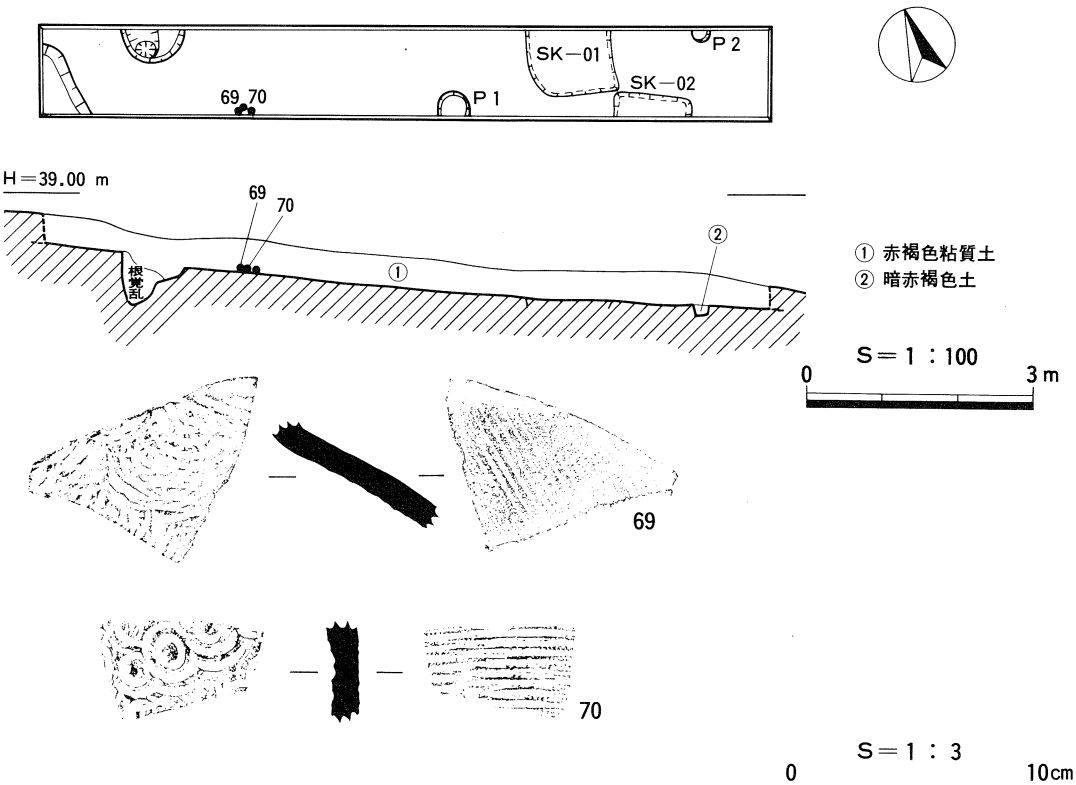
トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出　土　遺　構	出土遺物
Ｔ－１	11.2 × 1.5	ピット	
Ｔ－２	5.1 × 1.5	落込み	陶器
Ｔ－３	9.6 × 1.15	土壙，ピット	須恵器
Ｔ－４	7.0 × 1.0	土　壙	
Ｔ－５	5.5 × 1.0		
Ｔ－６	6.5 × 1.0		
Ｔ－７	6.0 × 1.5	ピット	



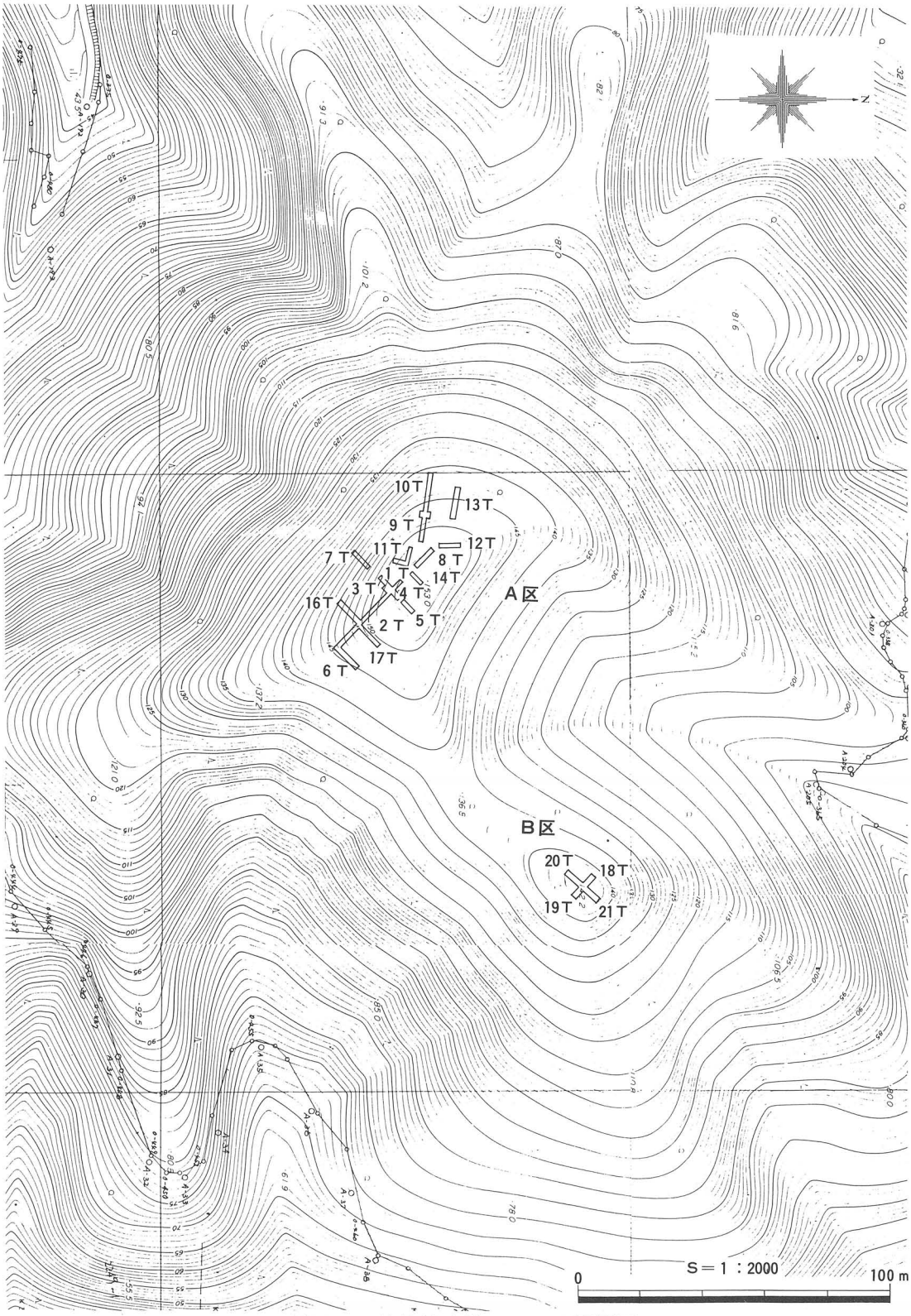
挿図28　小赤はだ古墳群トレンチ配置図



挿図29　第２トレンチ遺構図・出土土器実測図



挿図30　第３トレンチ遺構図・出土遺物実測図



挿図31　鉢伏城遺跡トレンチ配置図

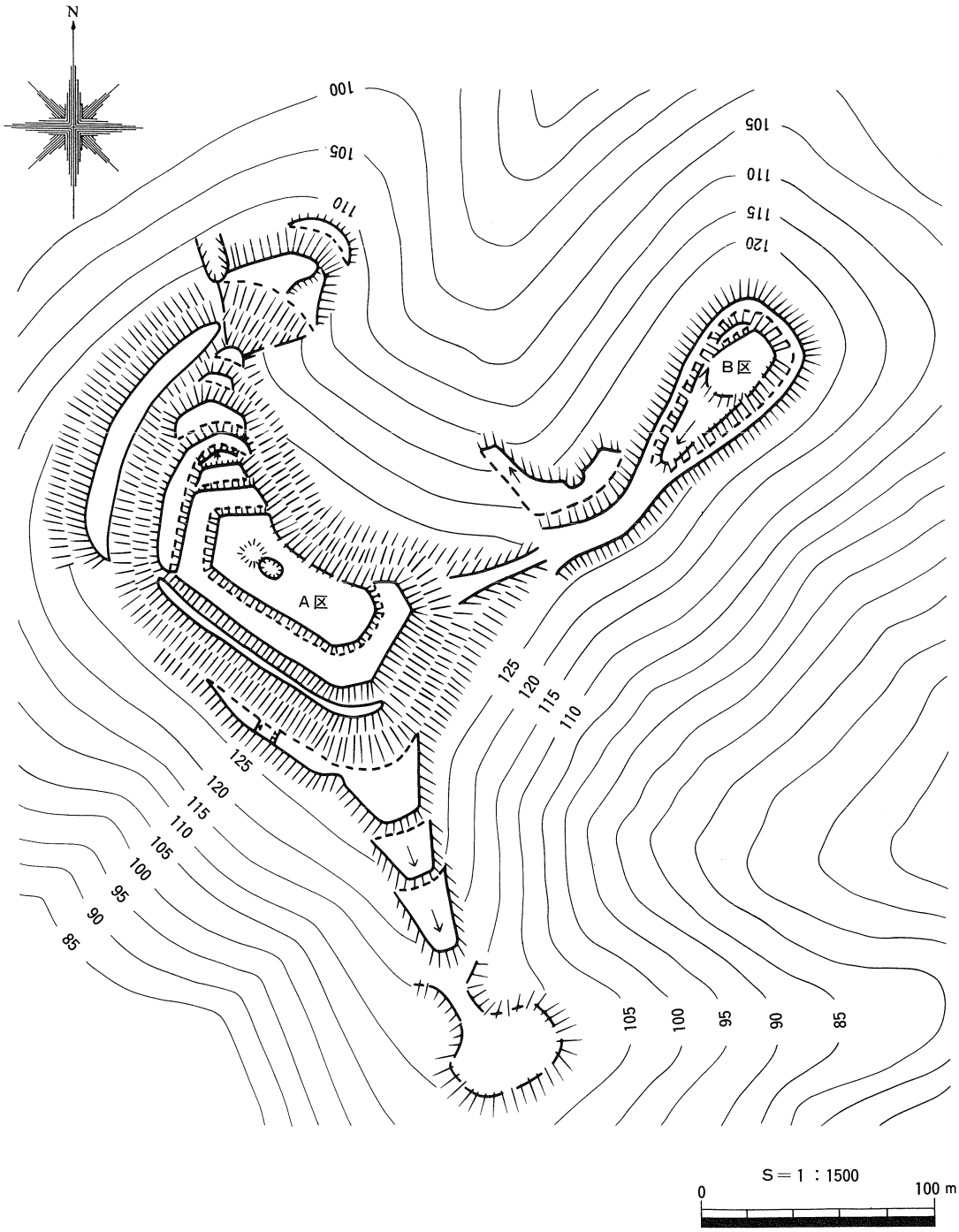
第5節　鉢伏城遺跡

鉢伏城遺跡は、最高所で標高143.9mを測る急峻な丘陵尾根上に立地し、その名が示す通り鉢を伏せたような地貌を呈している。なお、水田との比高差は約120mである。現況でも尾根上は平坦に削平された様子が窺われ、北側に降る枝尾根上や北東側の枝尾根上、さらに南側に降る枝尾根上にも、その痕跡を留めている。本遺跡の地質を概観すると、山上の平坦面には赤褐色ロームが被覆し、直下には凝灰岩がみられるが、急斜面部は侵食作用を受けた様子が窺われる。試掘トレンチは、現況では掘り下げが困難である北側に降る枝尾根上や、南西側に降る枝尾根上を除いて、計21本を主尾根上や北東側の枝尾根上平坦面に設定した。主尾根上では、主郭と思われる最高所の平坦面に13本、副郭と思われる階段状のテラス部に4本、北東側の枝尾根上平坦部に4本である。検出した遺構は郭の法面や削平された平坦面、溝状遺構、土壙墓1基、土壙1基等である。なお、土壙墓は古墳時代中期、土壙はそれ以前のものと思われる。遺物は土師器・土師質土器・鉄器が少量出土している。以下は遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

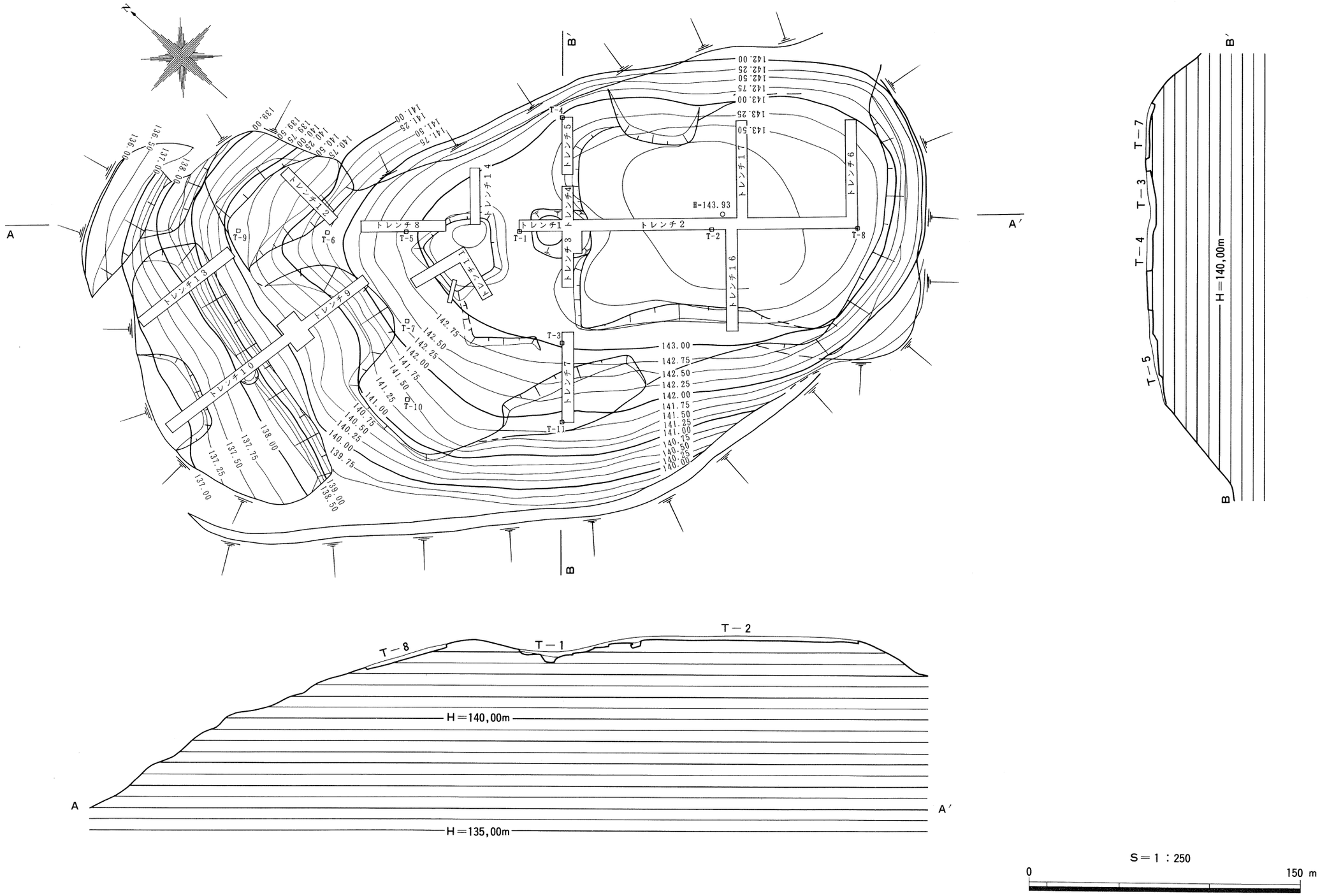
A区第1・2・3・4・5・6・16・17トレンチ（挿図34・35・36・37・41）　ほぼ主尾根平坦面に設定した。城跡に関連する施設としては、削平された平坦面と、6－T、17－Tでピット数基を検出したが、トレンチ範囲の制約の為、建物の復元はできなかった。なお、遺物は鉄釘1個を検出している。1～4－Tの直交する所は、現況でも凹地を呈していたが、1－Tでは土壙墓（SK－02）を検出した。3、4－Tで検出した黄灰白色粘土の遺構面直上から土師器73、74が出土しており、土層観察からこの土壙墓は、同時期のものと推察され、古墳時代中期の構築と思われる。なお、土壙墓埋土直上からは、白磁の細片1個が出土している。2－Tでは、盛土下から土師質土器75が出土している。南北朝時代のものと思われる。また、この盛土層の南東側に接して、土壙1基（SK－01）を検出した。平面は楕円形と推定される。断面形でみると、南西側ではオーバーハングした壁面が観察できる。これから推察して袋状の貯蔵穴として捉える事にした。この貯蔵穴の埋土をみると、北西側断面で後世に削り込まれた様子が窺われる。埋土10、14～16は、土壙内に堆積したもので、22層は土師器細片を包含しており、古墳時代中期のもの。直上の2層は、土師器土器75を包含し、南北朝時代。18層の盛土は、戦国時代のものと思われる。10、14～16層は本土壙が溝状遺構で切り込まれた様子が窺える。なお、9、11～13層はSK－01より新しく、22層堆積後のものである。

A区第8・11・15トレンチ（挿図39）　主尾根平坦面で、現況不整な方形状の高まりに設定した。11、15－Tで幅0.3mほどの浅い溝状遺構を検出したが、8、14－Tでは確認できなかった。遺物も全く出土せず、これ以外の施設は、小規模なピット1基のみであった。性格は明瞭ではないが、見張台等が立地する条件は具備しているものと思われる。

A区第7トレンチ（挿図37）　数基のピットを検出した。柱穴と思われる。遺物は全く出土していない。



挿図32　鉢伏城跡郭配置図（寺井 毅氏原図作製）



挿図33　鉢伏城遺跡地形測量図並びにトレンチ位置図

A区第9・10・12・13トレンチ（挿図38・40）　現況は、階段状に連接する郭とみなした所に設定した。9－Tで、径0.2mの小規模なピット5基を検出した。トレンチを拡張して、ピット相互の関係を追求したが、明確ではなかった。その他に焼土坑2基を検出した。楕円形で浅く多量の炭化材がみられ、壁体も赤く焼けていた。

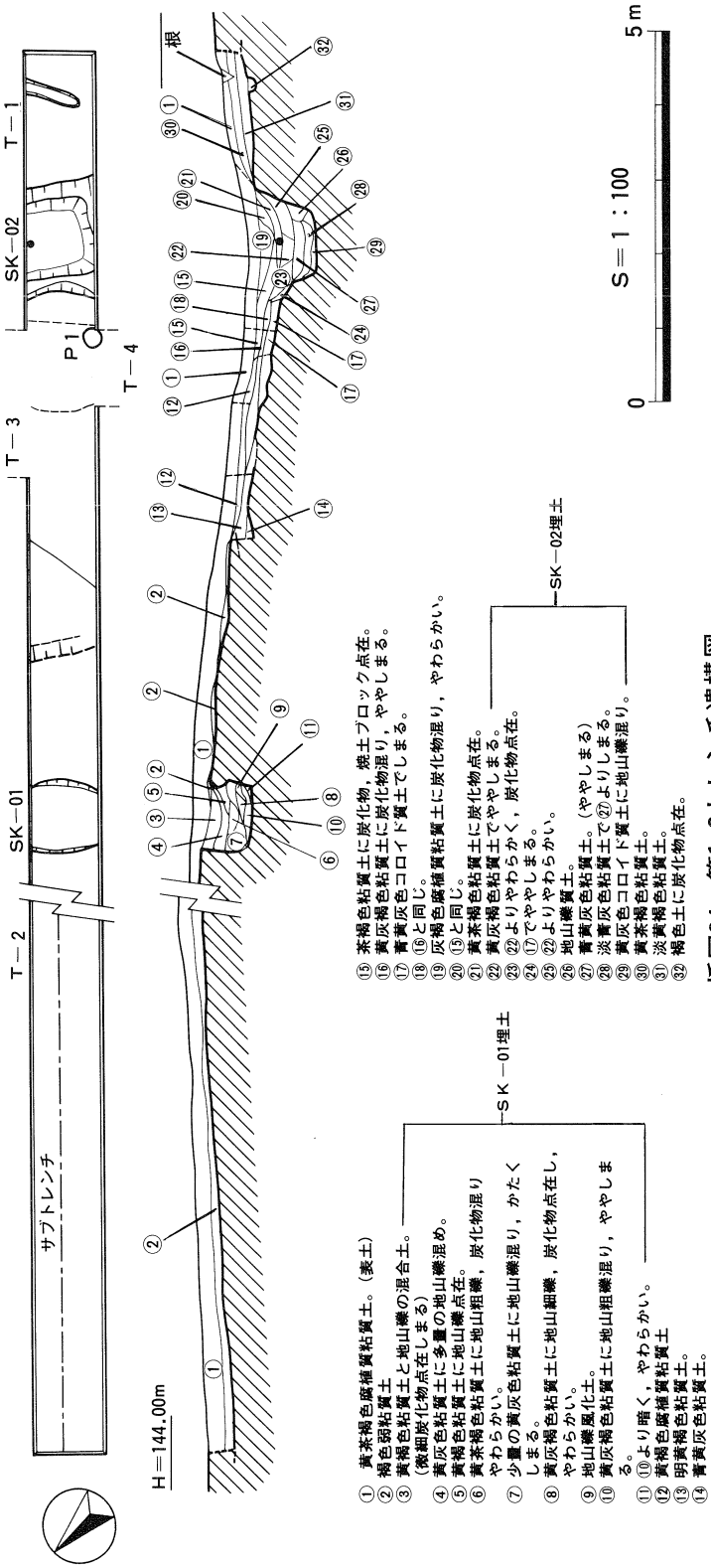
遺物は燈明皿底部76が焼土直上で出土している。10、13－Tは同じ郭に山側から谷側に向かって、ほぼ平行して設定した。法面下に掘り込まれた溝状遺構と谷側に接して平坦面を検出した。別の郭に設定した12－Tでもこれらと同様の構造をもつものを確認した。なお、10－Tの谷側には現況でも浅い落ち込みがみられた。検出面は、小さな段がついた平坦面である。この平坦面の谷側は基盤層が急激に落ち込んでおり、この部分には互層状に盛土を施し、郭を造成していた。10、12、13－Tでは、遺物は全く出土しなかった。

B区第18・19・20・21トレンチ（挿図42・43）　現況は、主尾根平坦面から幅狭な北東に主軸をもつ尾根線が緩やかな傾斜で降っており、その距離は約120mに及ぶ。さらに、北東に向かっては尾根幅を広げながら高度を上げてゆく。18～21－Tは、この枝尾根が最も幅広で最高所の突端部に設定した。

それでも主尾根最高所から比べると、11m程低い比高となる。検出した遺構は、尾根主軸線上に長辺約10m、短辺約5mの長方形状平坦面や建物跡と推定されるピット3基。この郭の北西側に接した法面下に溝状遺構をもつ平坦面である。遺物は須恵質土器2片・鉄釘1片が出土している。

まとめ

鉢伏城遺跡では、数え方によっても異なるが、大小併せて18の郭が所在することが明らかとなった。基本的には、尾根主軸線に沿って長辺約10mの長方形状の郭を最高所に配し、その北西側に見張台状の高まりをもつ郭と主郭を構成しているように見受けられ、郭群の中では最大規模を測る。この主郭の西側から北側には、大小10の腰郭が主尾根主軸線上や枝尾根線に沿って階段状に連接する形態をとっている。また、主郭と副郭の一部を含む主尾根の西側から南側には、現況で延長35m、幅1.5mほどの犬走状の帯郭が巡っているが、主郭や副郭から4m程降った所にあり、直接には主郭や副郭に入ることはできない事が窺える。さらに、南東側枝尾根線にも3つの腰郭が階段状に連接しているが、主郭からは10m程降った所に当たる。今回の調査では、上記の郭群をA区とし、B区（北東に延びる郭群）と分割した。B区は、主郭の北東側に延長120mに及ぶ犬走状の帯郭と、その突端部の郭からなるが、突端部の郭には幅1m程の帯郭が巡っており、見張り場的要素をもつものと推定される。なお、A区、B区とも郭の平坦面からピット、溝を検出したが、建物の復元をするに至っていないし、土塁、柵列等も確認していない。また、郭の造成は、尾根上を削平して、先端部に盛土を施した所も見受けられたが、一部の検出であり明確とはいいがたい。ところで、本城砦跡の構築時期を証明する出土遺物は、数個の土器片であり明確にはできないが、城砦の構造上の特徴や、この数個の土器片

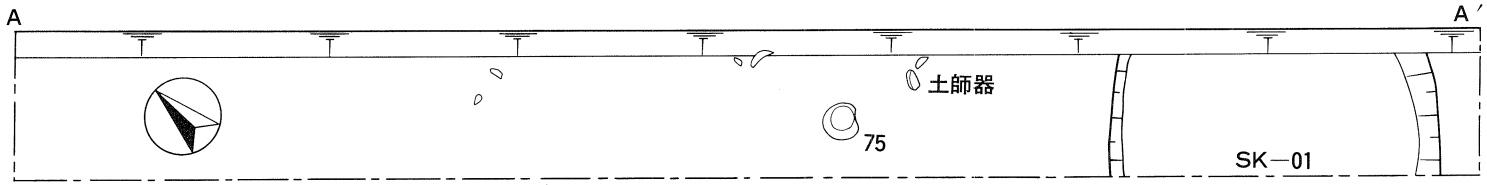


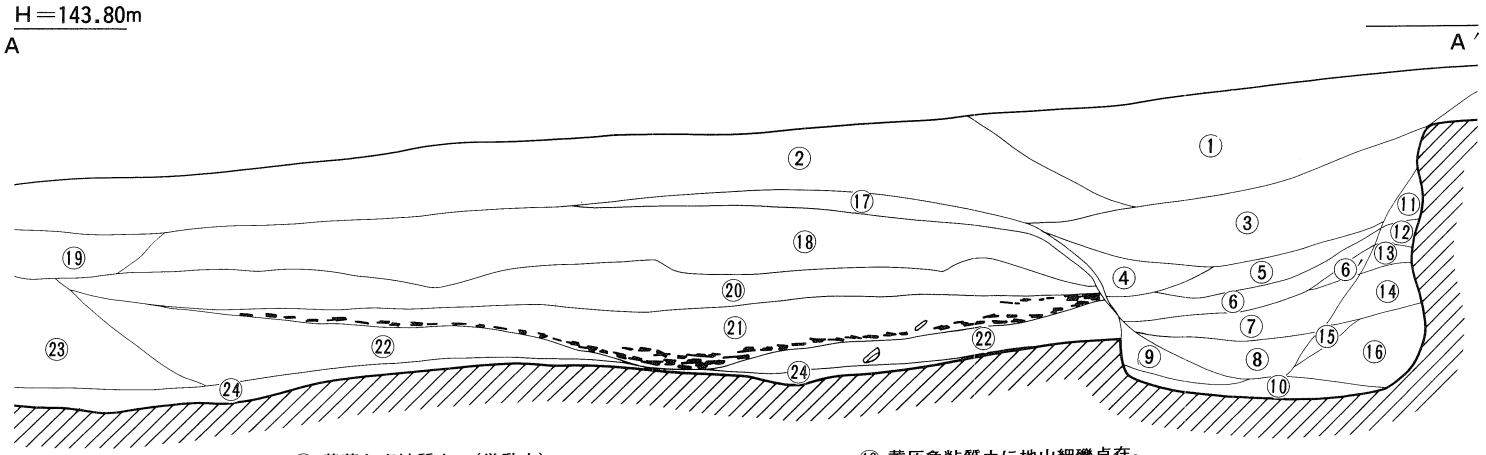
挿図34　第1・2トレンチ遺構図

の手がかりから、南北朝時代には単郭規模で既に機能し、戦国時代前期に再び整備し、郭を連ね現況の地貌をのぞかせているように見受けられる。いずれにしても、城造りの基本的な要素と言われる地選（自然条件を満たす地形の選定）や縄張り（構築の計画と設定）をみると、峻険な山上を利用して、連郭式に郭を配した姿は、中世の城砦跡として、古い様相を示すものと言えよう。また、その立地からして戦時の「詰の城」であるのは明白である。さらに、水田との比高差120m以上を測る峻険な山上にも、古墳時代中期や、それ以前の遺構がみられた。

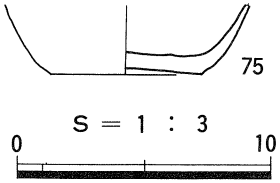
土壙墓や貯蔵穴等であるが、これらの時代にも当地が、小規模ながら、墓地や生活の場として利用された事は、土地条件の制約や自然環境の変化等に起因するものと思われる。

（松本　哲）



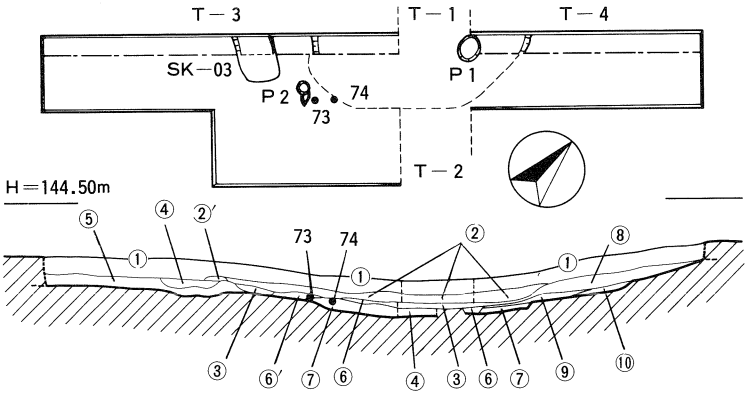


① 黄茶色腐植質土。（攪乱土）
② 黄褐色～黄茶褐色腐植質粘質土。
③ 黄褐色粘質土。（やわらかく，微細炭化物点在）
④ 茶褐色粘質土。（やわらかく，地山小礫点在）
⑤ ③より淡くややしまる。
⑥ 黄茶褐色粘質土。（やわらかい）
⑦ 黄灰色粘質土。（ややしまる）
⑧ 褐色腐植質土。（炭化物，地山小礫混り）
溝埋土
⑨ 黄灰色粘質土と地山粗礫の混合土。（かたくしまる）
⑩ 黄灰色粘質土に微細炭化物点在。―SK ―01埋土
⑪ 黄褐色粘質土。
⑫ 黄灰色粘質土と地山中礫の混合土。（しまる）
⑬ 黄灰色粘質土に地山細礫点在。
⑭ 黄灰色粘質土少量と地山礫の混合土。（しまる）
⑮ 黄灰色粘質土に地山細礫。（しまる）
⑯ 黄灰色粘質土と地山粗礫半々ぐらい混合し，しまる。
SK ―01埋土
⑰ 橙茶色盛土の風化。
⑱ 橙色盛土。（地山礫と粘質土の混合土でかたくしまる）
⑲ 褐色腐植土。（炭化物，焼土ブロック多量に混る）
⑳ 黄灰色粘質土。
㉑ 黄褐色粘質土。（下位に多量の炭化物）
㉒ 淡黄灰色粘質土。（微細炭化物点在）
㉓ 明黄褐色粘質土に地山小礫点在。（しまる）
㉔ 青黄灰色コロイド質土。



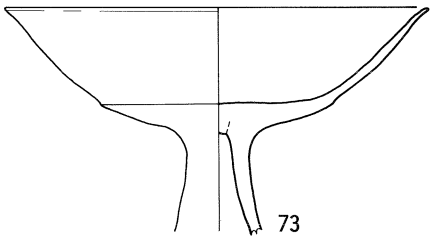
S ＝ 1 ： 20
0 1 m

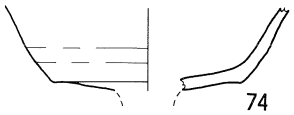
挿図35　第２トレンチ北西側遺構図・出土遺物実測図



① 黄茶褐色～茶褐色腐植質粘質土（表土）
② 茶褐色粘質土に炭化物，焼土ブロック多量に混る。
②′ ②よりやや淡い。
③ 黄灰褐色粘質土に炭化物混り。
④ 根の攪乱
⑤ 黄褐色粘質土，地山細礫混り，風化土。（遺構面）
⑥ 黄褐色粘質土に微細炭化物点在。
⑥′ ③とほぼ同じ。
⑦ 青灰色コロイド質土。
⑧ 黄褐色粘質土に地山礫点在。
⑨ 黄青灰色ややコロイド質土。
⑩ 地山風化土。（淡黄灰色土）

S＝1：100　0　5 m



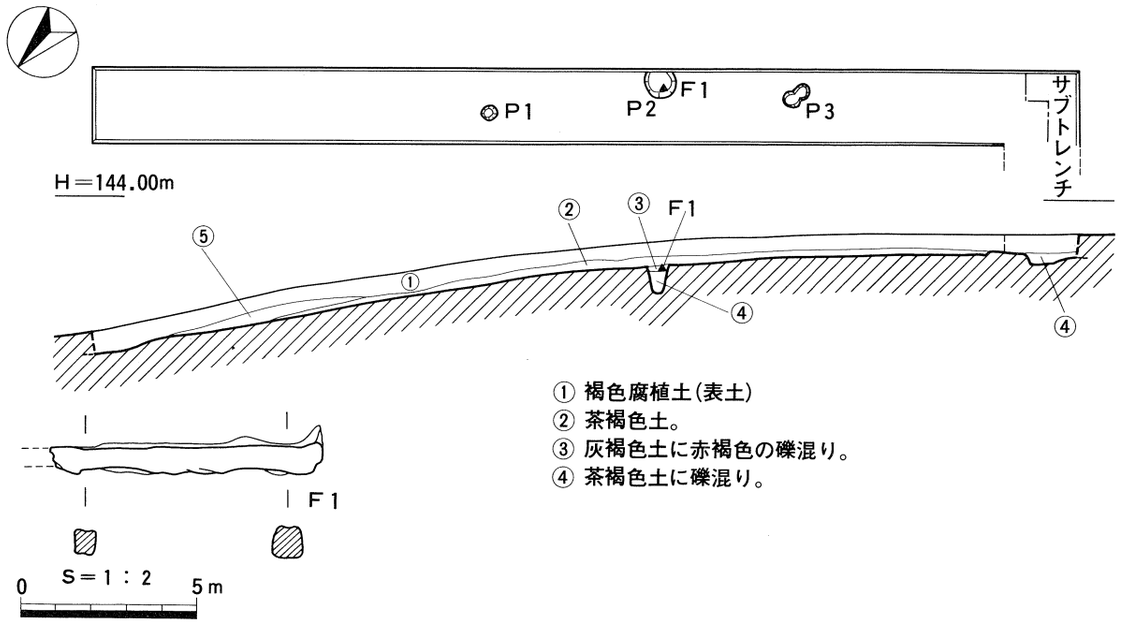


S＝1：3　0　10 cm

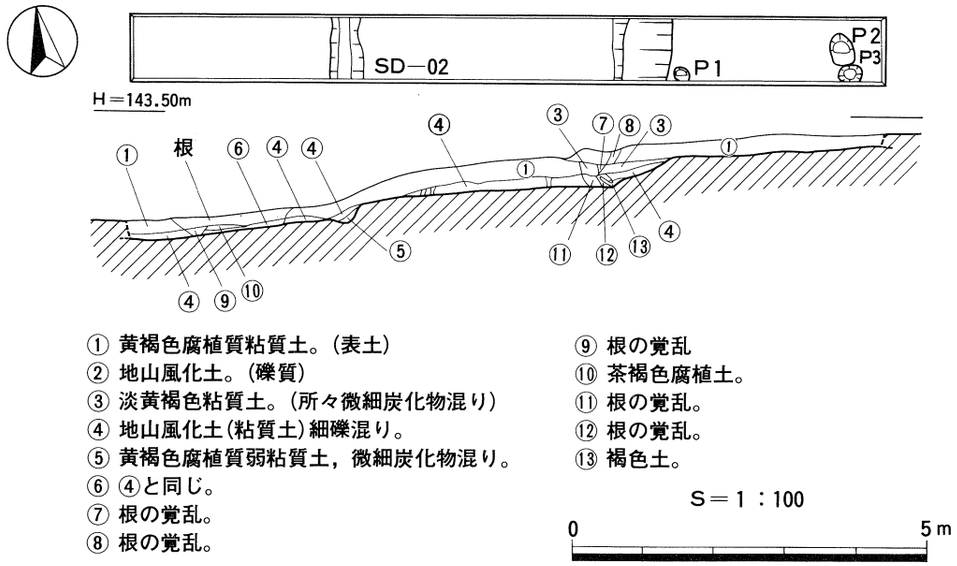
挿図36　第3·4トレンチ遺構図・出土遺物実測図

挿表15　鉢伏城遺跡出土遺物観察表（2－T・3－T・9－T・19－T・21－T）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
土師器 高坏	73	36	13	7・10	復口径 17.0cm	坏部～脚柱状部。坏部内面は平坦で，口縁部との境に段をもつ。	口縁部内外面 ヨコナデ。口縁部外面に黒斑有り。その他は風化の為調整不明。	1㎜径の砂粒を含み密。	良 好	明黄茶褐色	3－T
土師器 高坏	74	36	13	9		坏部～口縁部。坏部内面は平坦で，口縁部は外傾して立ち上がる。端部は欠損。	内外面 ナデ。口縁部外面 わずかに朱が残る。	1～2㎜径の白色砂粒を含み密。	良 好	淡黄茶褐色	3－T
土師質 坏	75	35	13	3	底径 6.0cm	やや中高の底部。口縁部は椀状。	内外面とも風化の為調整不明。	1～2㎜径の白色砂粒を含み，やや密。	良 好	淡黄茶色	2－T
土師質土器 橙明皿	76	38	13	12	底径 4.3cm	底部。	内外面とも風化の為調整不明。	微細砂粒を含み密。	良 好	明茶色	9－T
須恵質土器 甕	77	42	13	14		外面に格子状タタキメ。	内面 ヨコナデ後，所々浅い平行叩き。	1㎜径の砂粒を含み密。	良 好	淡青灰色	19－T
鉄 釘	F1	37				角 釘。					21－T

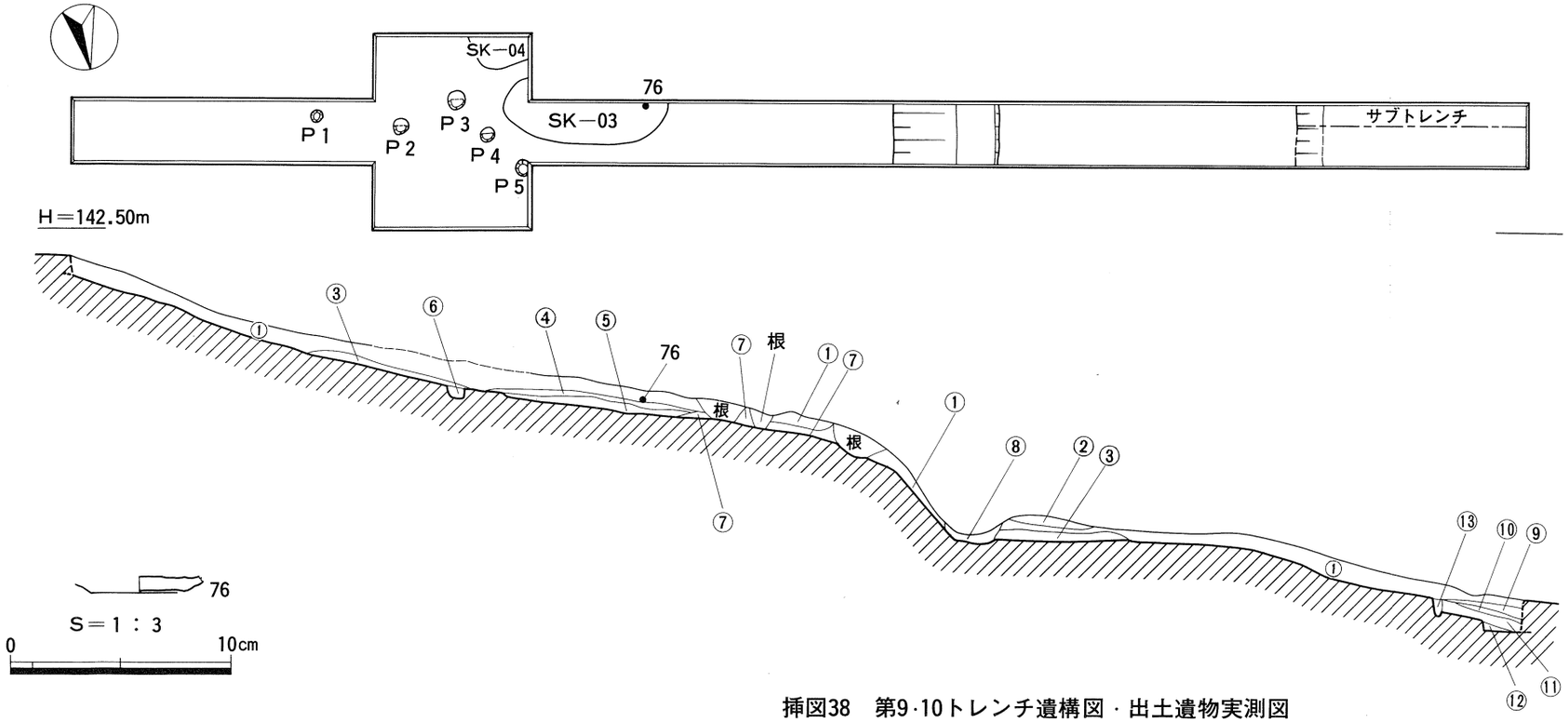


① 褐色腐植土(表土)
② 茶褐色土。
③ 灰褐色土に赤褐色の礫混り。
④ 茶褐色土に礫混り。



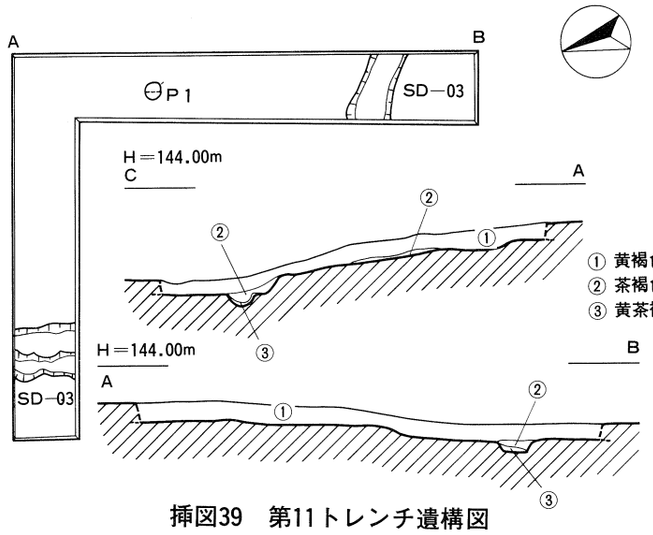
① 黄褐色腐植質粘質土。(表土)
② 地山風化土。(礫質)
③ 淡黄褐色粘質土。(所々微細炭化物混り)
④ 地山風化土(粘質土)細礫混り。
⑤ 黄褐色腐植質弱粘質土，微細炭化物混り。
⑥ ④と同じ。
⑦ 根の覚乱。
⑧ 根の覚乱。
⑨ 根の覚乱
⑩ 茶褐色腐植土。
⑪ 根の覚乱。
⑫ 根の覚乱。
⑬ 褐色土。

挿図37　第6トレンチ(左)、第7トレンチ(右)遺構図・出土遺物実測図



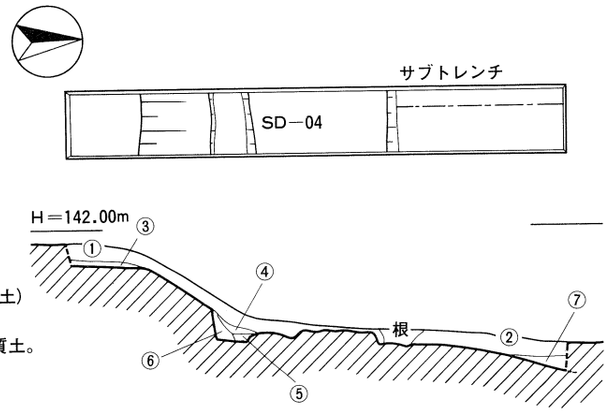
① 黄褐色腐植質粘質土。(表土)
② 地山礫多量に混る黄褐色粘質土。(排土)
③ 黄褐色粘質土。(地山礫混り)
④ 暗黄褐色粘質土。(炭化物，焼土ブロック混り)
⑤ 暗褐色粘質土。(炭化物，焼土抗埋土)
⑥ ピット埋土。(微細礫混り黄褐色粘質土)
⑦ 褐色粘質土。(微細炭化物と焼土ブロック点在)
⑧ 炭火物多量の焼土層でもろい。
⑨ 地山紅色大～粗礫多量と黄褐色粘質土少量の混合土で硬くしまる。(盛土)
⑩ 明黄灰色地山粗礫と黄褐色粘質土半々ぐらいの混合土でややしまる。(盛土)
⑪ 黄褐色粘質土に微細炭化物と微細礫混り。(盛土)
⑫ 明黄灰色粘質土大～粗礫点在。
⑬ 微細炭化物と小礫混り黄褐色粘質土。

挿図38　第9·10トレンチ遺構図・出土遺物実測図



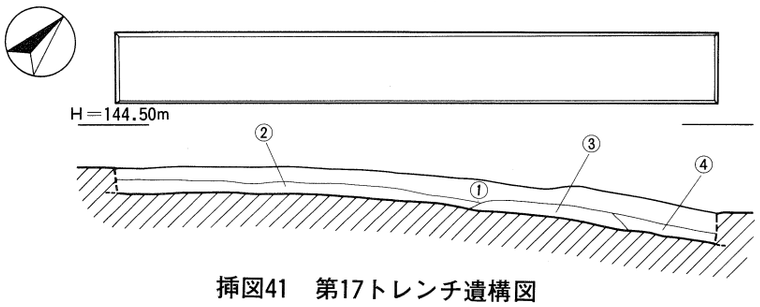
① 黄褐色腐植質粘質土(表土)
② 茶褐色粘質土。
③ 黄茶褐色地山礫混り粘質土。

挿図39　第11トレンチ遺構図



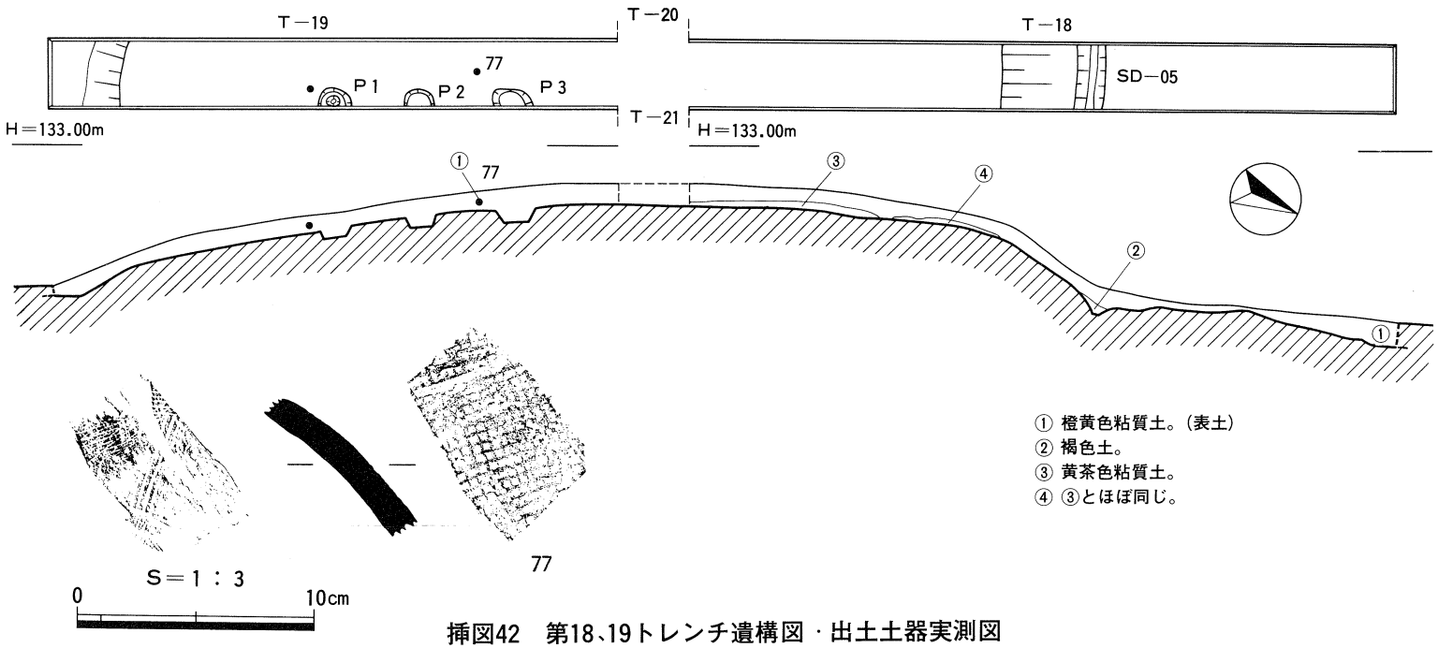
① 黄褐色腐植質粘質土。(表土)
② 黄褐色～黄茶褐色腐植質粘質土。
③ 地山風化土。
④ 黄茶褐色粘質土。
⑤ ④に礫，炭化物(微細)混り。
⑥ 地山粗礫混り黄褐色粘質土。
⑦ 黄茶褐色粘質土に微細礫炭化物混り。

挿図40　第12トレンチ遺構図



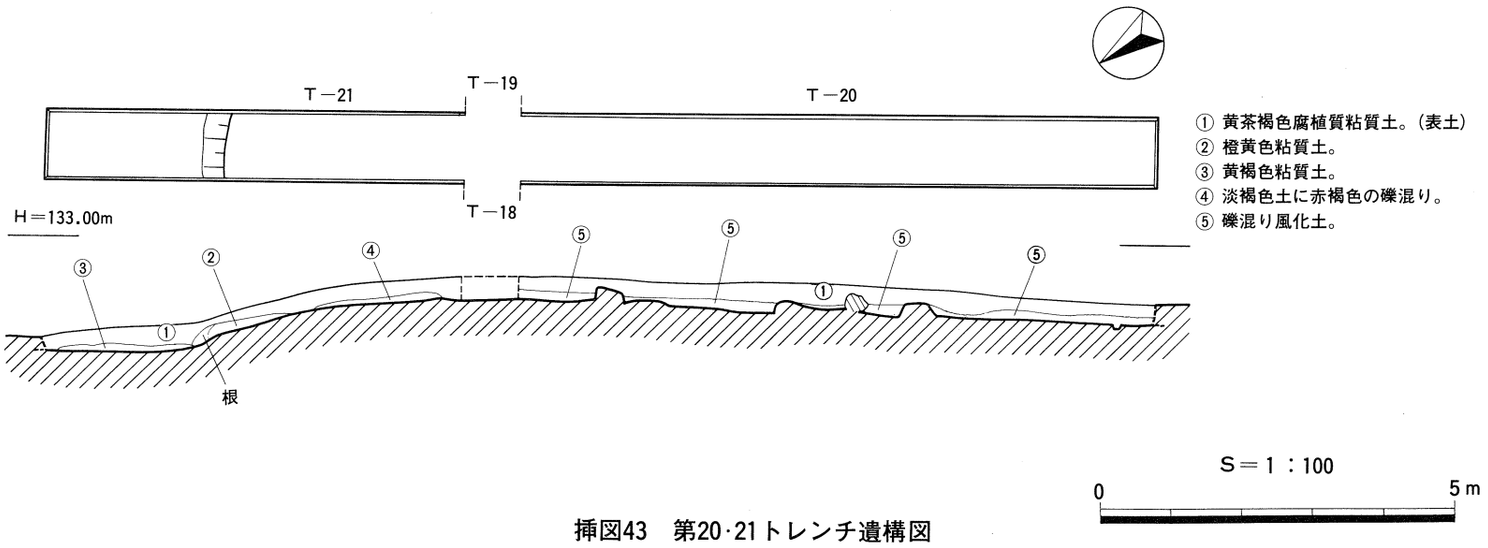
① 褐色腐植土。(表土)
② 褐色土。
③ 赤褐色粘質土。
④ 茶褐色土。

挿図41　第17トレンチ遺構図



① 橙黄色粘質土。(表土)
② 褐色土。
③ 黄茶色粘質土。
④ ③とほぼ同じ。

挿図42　第18、19トレンチ遺構図・出土土器実測図



① 黄茶褐色腐植質粘質土。(表土)
② 橙黄色粘質土。
③ 黄褐色粘質土。
④ 淡褐色土に赤褐色の礫混り。
⑤ 礫混り風化土。

挿図43　第20·21トレンチ遺構図

挿表16　鉢伏城遺跡トレンチ一覧表

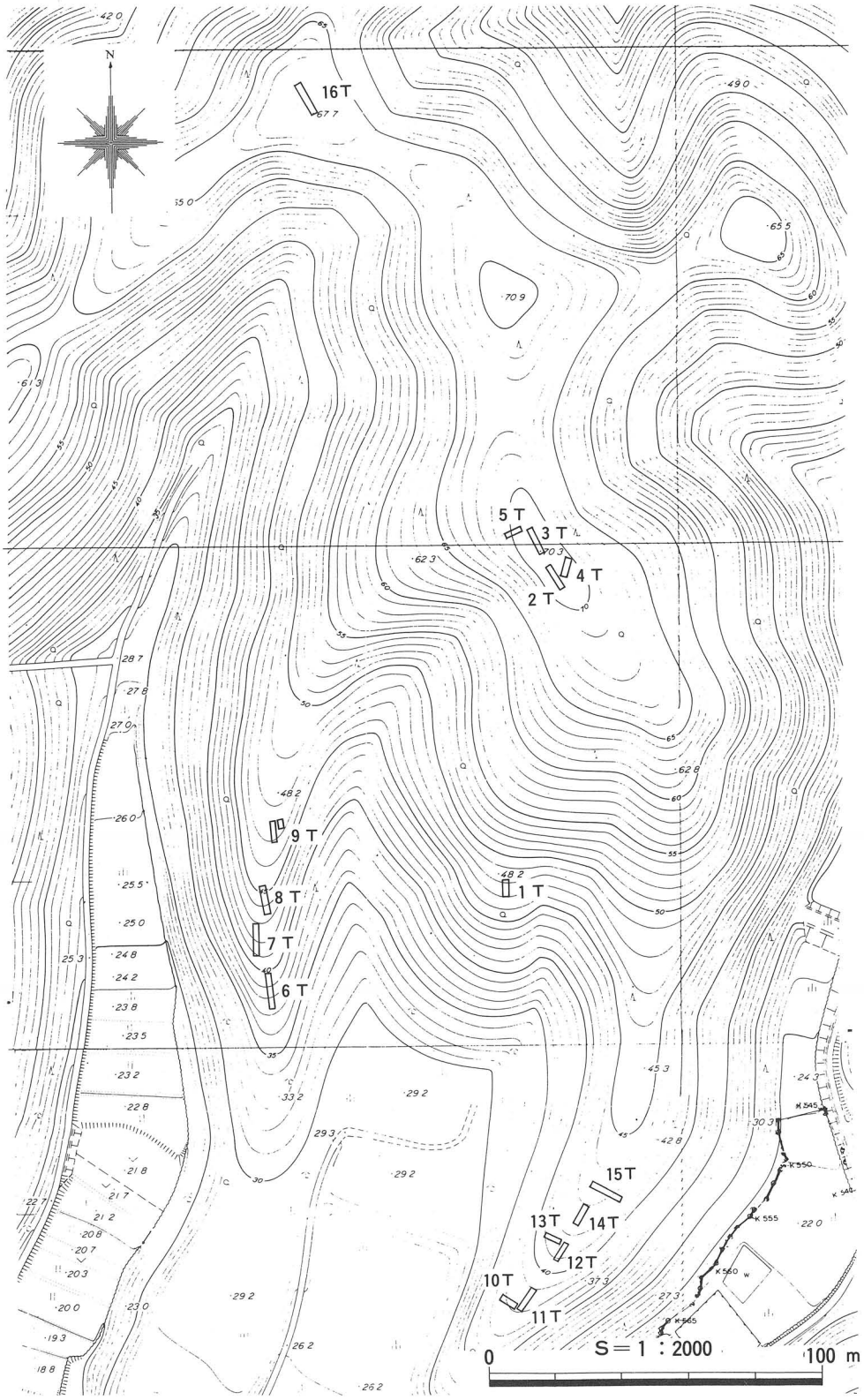
区名	トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出　土　遺　物	備　　考
A	T－1	4.0 × 1.0	土師器・青磁	土　壙
A	T－2	26.2 × 1.0	土師器	土壙・盛土層
A	T－3	5.0 × 1.0	土師器	ピット
A	T－4	4.0 × 1.0		
A	T－5	5.0 × 1.0		
A	T－6	8.6 × 1.0	鉄　釘	ピット
A	T－7	8.0 × 1.0		ピット
A	T－8	7.5 × 1.0		溝
A	T－9	10.0 × 1.0	燈明皿	ピット
A	T－10	12.0 × 1.0		盛土層
A	T－11	9.5 × 1.0		溝
A	T－12	6.3 × 1.0		
A	T－13	10.2 × 1.0		盛土層
A	T－14	5.0 × 1.0		
A	T－15	2.5 × 0.6		溝
A	T－16	9.0 × 1.0		
A	T－17	8.6 × 1.0	鉄　釘	ピット
B	T－18	8.0 × 1.0		
B	T－19	6.0 × 1.0		
B	T－20	6.0 × 1.0		
B	T－21	6.0 × 1.0	須恵質土器	ピット
	計　21			

鉢伏南区トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出　土　遺　構	出 土 遺 物
T－1	9.0 × 1.0		
T－2	9.0 × 1.0		
T－3	10.0 × 1.0		
T－4	14.0 × 1.0		
T－5	10.0 × 1.0		

挿表13　小赤はだ遺跡出土遺物観察表（2－T・3－T）

器　種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法　量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎　土	焼成保存	色　調	出土位置
須恵器 甕	69	30	13	1		甕頸部～肩部破片。	外面頸部 回転ヨコナデ。 肩部平行叩きの後，浅いカキメを施す。 内面 青海波文叩き。	微細砂粒を含み緻密。	良　好	淡灰色	3－T
須恵器	70	30	13	1		甕破片。	外面 カキメ。 内面 青海波文叩き。	微細砂粒を含み緻密。	良　好	淡青灰色	3－T
陶器 擂鉢	71	29	13	1	復口径 39.0cm	口縁部破片。	鉄釉を施す。	緻密。	普　通	濃茶褐色	2－T
燭　台	72	29	13	1	復底径 6.0cm		内外面 鉄釉を施す。 外面底部に回転糸切痕有。	緻密。	良　好	濃茶褐色	2－T



挿図44　丹部遺跡トレンチ配置図

第6節　丹　部　遺　跡

丹部遺跡は、幅狭な丘陵枝尾根が「冂の字型」に、谷側（南側）に向かって降る両端の丘陵腹部から裾部に立地する。この丘陵は数段の階段状の地貌を呈し、遺構は各段の南北に、細長い長方形の平坦面に所在する。水田との比高差は、27～20mを測る。検出した遺構は竪穴住居跡２棟、土壙２基、ピット等である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土している。以下は、遺構を確認したトレンチのみ、その結果を概述する。

第６トレンチ（挿図45）

竪穴住居跡（SI－01）１棟と土壙１基を検出した。竪穴住居跡は、平面不整円形か多角形を呈し、径6.2m規模と推察される。壁高は、山側で最高0.7m、側溝は壁際を巡り、床面は検出面で5.7mを測る。Ｐ１は、中央ピットで２段掘りである。Ｐ２、３は主柱穴と思われる。なお、検出面からは建替えは認められない。遺物は全く出土しておらず、時期は明確ではないが、本遺構の北側に近接して造られた土壙からは、弥生土器の細片が出土している。この土壙はSI－01に関連する施設と推定されることとSI－01の形態から弥生時代終末期頃のものと思われる。

第８トレンチ（挿図46）

竪穴住居跡１棟を一部検出した。上面が後世削られたようで、壁高は最高0.1mと浅い。遺物は弥生土器・土師器が出土している。構築は出土遺物より弥生時代後期後半と考えられる。

第10・11トレンチ（挿図47・48）

ピット２基と浅い落ち込みを検出した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

第12・13トレンチ（挿図49・50）

12－Ｔでピット２基、13－Ｔでピット１基と土壙１基を検出した。土壙は、上面楕円形状を呈すと思われる。埋土中に古墳時代前期の土師器甕87を検出したことにより、古墳時代前期のものと考えられる。なお、12－Ｔからは古墳時代中期の土師器が出土している。

第14トレンチ（挿図51）

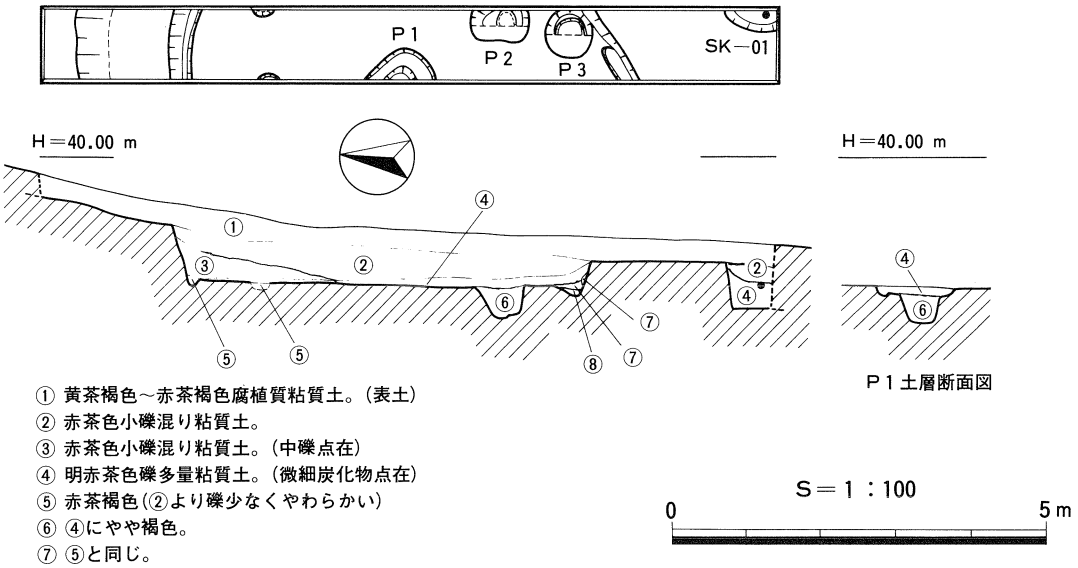
浅い落ち込みを検出したが、遺物は全く出土せず、時期、性格とも不明である。

第９トレンチ

溝状の浅い落ち込みを検出した。埋土はもろい褐色腐植土である。遺物は全く出土せず、時期、性格とも不明。

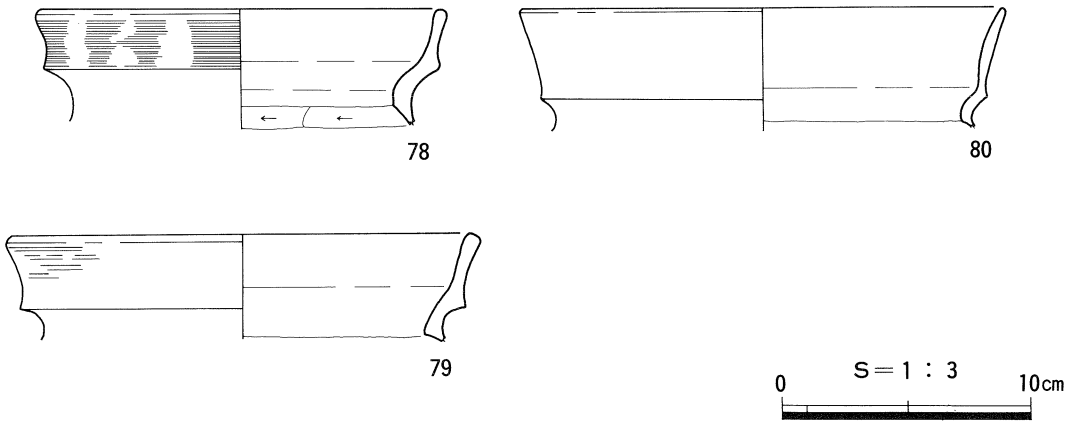
第15トレンチ

ピット３基を検出したが、トレンチ範囲の制約のため建物の復元はできなかった。遺物は全く出土しなかった。



① 黄茶褐色～赤茶褐色腐植質粘質土。(表土)
② 赤茶色小礫混り粘質土。
③ 赤茶色小礫混り粘質土。(中礫点在)
④ 明赤茶色礫多量粘質土。(微細炭化物点在)
⑤ 赤茶褐色(②より礫少なくやわらかい)
⑥ ④にやや褐色。
⑦ ⑤と同じ。
⑧ 赤茶色粘質土。(小礫少量)

挿図45　第6トレンチ遺構図

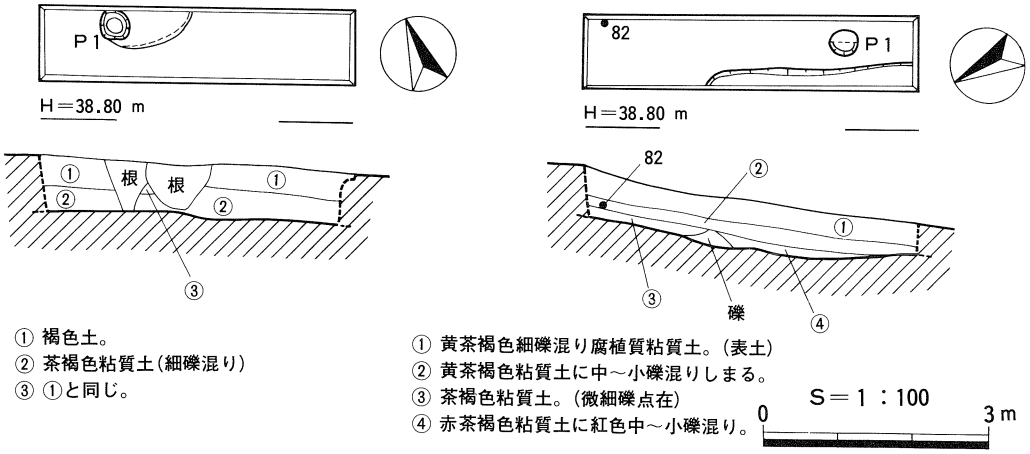


挿図46　第8トレンチ出土遺物実測図

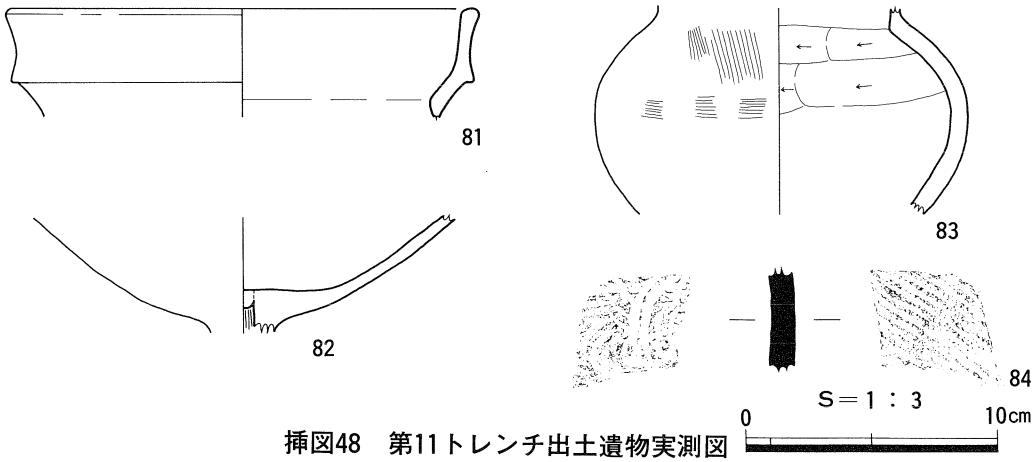
まとめ

丹部遺跡では、幅狭ではあるが数段の階段状のテラス地形を利用して、弥生時代後期の集落跡や古墳時代前期の土壙がみられた。また、古墳時代中期や後期の遺物が出土しており、この時期の遺構が所在するのは、間違いあるまい。本遺跡は、低丘陵上で、南側に平野部を臨む良好な立地条件を具備しており、弥生時代以降の遺跡が複合する様子が窺われる。

（松本　哲）



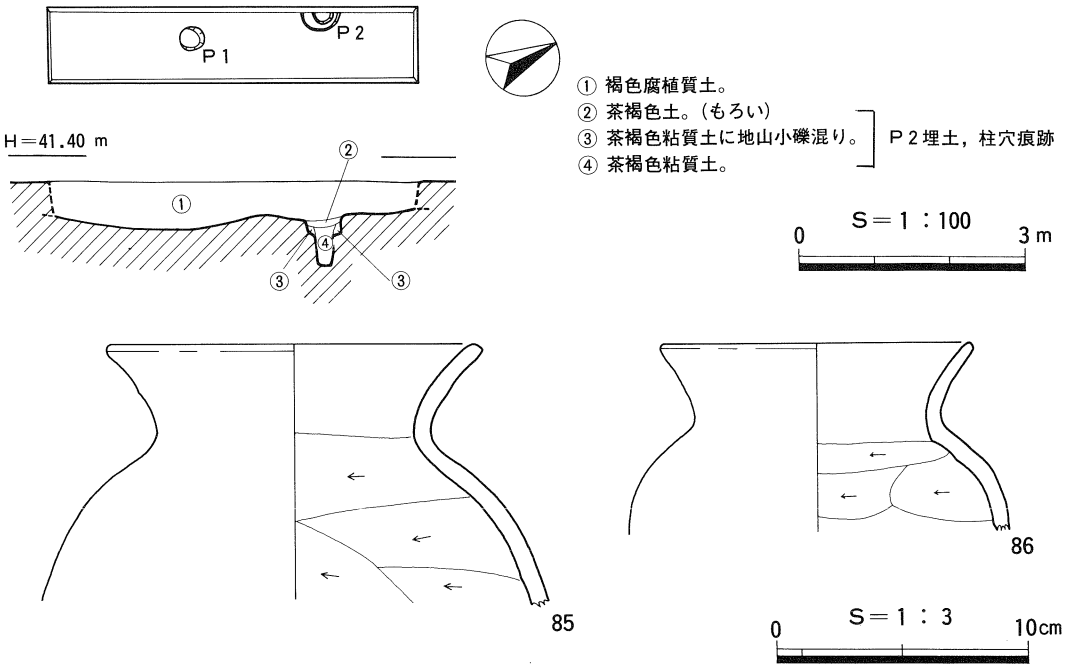
挿図47　第10トレンチ(左)・第11トレンチ(右)遺構図



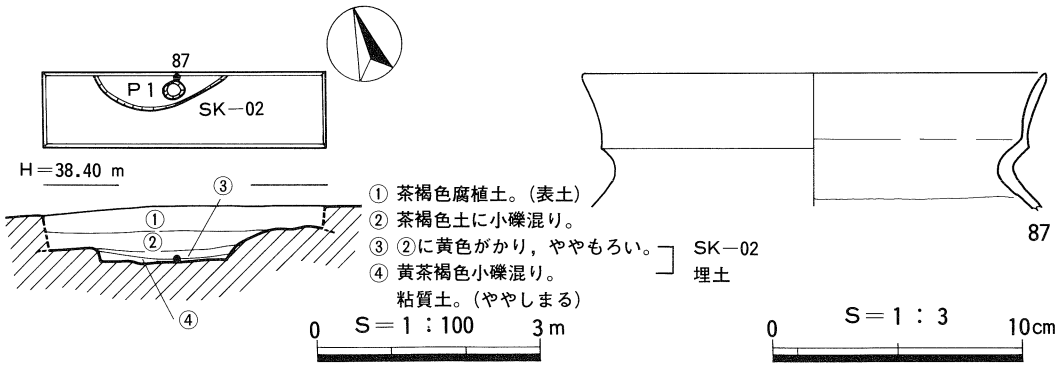
挿図48　第11トレンチ出土遺物実測図

挿表18　丹部遺跡トレンチ一覧表

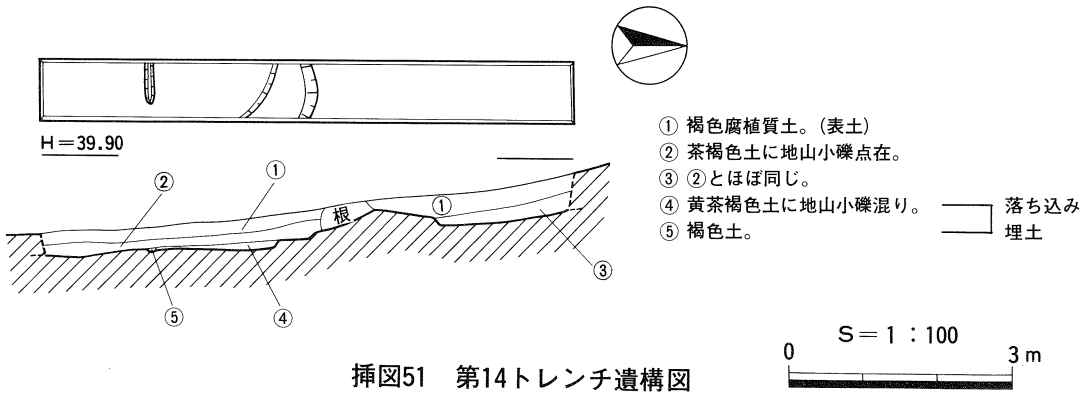
トレンチ番号	規模　長さ×幅(m)	出　土　遺　構	出　土　遺　物
T－1	4.5 × 1.0		
T－2	8.0 × 1.0		
T－3	10.0 × 1.0		
T－4	5.0 × 1.0		
T－5	4.0 × 1.0		
T－6	9.8 × 1.0	竪穴住居跡	弥生土器・土師器
T－7	9.0 × 1.0		
T－8	6.0 × 1.0	竪穴住居跡	須恵器・土師器・弥生土器
T－9	5.0 × 1.0		
T－10	4.2 × 1.0	2段掘りピット	土師器・弥生土器
T－11	4.5 × 1.0	ピット・溝状遺構	須恵器・土師器・弥生土器
T－12	4.9 × 1.0	2段掘りピット・土壙	土師器・弥生土器
T－13	3.7 × 1.0	ピット・溝状遺構	須恵器・土師器・弥生土器
T－14	7.0 × 0.8	溝状遺構	土師器
T－15	9.65× 0.85	ピット	須恵器・土師器
T－16	10.0 × 1.0		



挿図49　第12トレンチ遺構図・出土遺物実測図



挿図50　第13トレンチ遺構図・出土土器実測図



挿図51　第14トレンチ遺構図

挿表17　丹部遺跡出土遺物観察表（8－T・11－T・12－T・13－T）

器種	土器番号	挿図	図版	取上番号	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	出土位置
弥生土器甕	78	46	14	2	復口径16.6cm	口縁部～頸部の破片。複合口縁でやや外傾して立ち上がり，端部は丸くおさめる。外面に細く浅い9条の平行沈線を施す。	口縁部内外面 ナデ。頸部内面 削り。	1㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	茶褐色（頸部にススト付着）	8－T
弥生土器甕	79	46	14	4	復口径19.0cm	口縁部破片。複合口縁で外傾して立ち上がり，端部はやや肥厚する。外面に平行沈線が残存するが，風化の為条数は不明。	口縁部内外面 ナデ。頸部内面 削り。	1㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	黄褐色	8－T
土師器甕	80	46	14	2	復口径19.6cm	口縁部破片。複合口縁で外反気味に外傾して立ち上がり，端部はやや角張る。内面の段は明瞭。頸部は「くの字」状にゆるく屈曲する。口縁部は長めで器壁の薄い甕である。	口縁部内外面 ナデ。頸部以下内面 削り。	1～2㎜径の白色砂粒を含みやや密。	良好	明橙黄色	8－T
弥生土器甕	81	48	14	4	復口径19.0cm	口縁部破片。複合口縁でやや外傾して立ち上がり，端部は丸味を持つ。	口縁部内外面 ナデ。頸部内面 削り。	1㎜径の砂粒を含み密。	やや良	淡黄褐色	11－T
土師器小型甕	83	48	14	6	胴部最大径15.0cm	胴部の最大径は，中位にある。	胴部外面 タテハケメ，ヨコハケ。頸部以下内面 削り。他は，風化の為調整不明。	1～2㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	茶褐色（ススト付着）	11－T
須恵器	84	48	14	1	－	破片。外面叩き目文。内面青海波文。		微細粒を含み密。	良好	外面 濃灰色 内面 灰色	11－T
土師器甕	85	49	14	3	口径15.0cm	口縁部～体部。「くの字」状に屈曲する単純口縁で端部はやや角張る。	口縁部内外面 ナデ。内面 削り。外面 肩部以下風化の為調整不明。	1㎜径の白色砂粒を多量に含み，2～3㎜径の白色砂粒点在。	良好	濃桃色	12－T
土師器小型甕	86	49	14	5	復口径12.6cm	口縁部～体部。「くの字」状に屈曲する単純口縁で端部は丸くおさめる。胴部はあまり張り出さない。	口縁部内外面 ナデ。内面頸部以下 削り。外面他は風化の為調整不明。	1㎜径の白色砂粒を含み密。	良好	淡黄褐色	12－T
土師器甕	87	50	14	2	復口径18.4cm	口縁部破片。複合口縁で直立して立ち上がり，中位からやや外傾し，端部はすぼまる。内面の段は，明瞭。頸部は「くの字」状に屈曲する。器壁の薄い甕である。	口縁部内外面 ナデ。内面頸部 削り。	微細砂粒を含み密。	良好	淡黄色	13－T

第6章　小　　括

今回の調査は、分布調査で得た結果をもとに明らかに古墳であることがわかるものを除いて、鉢伏城跡と高広谷遺跡を中心に試掘調査を行った。分布調査ではゴルフ場予定地をA～Hに分けて尾根筋を中心として行ったが全体で52基の古墳と城跡1箇所、遺物散布地4箇所を確認した。そこでこの成果をもとに全体で106箇所のトレンチを設定して遺構の状況をみたわけである。トレンチのかなりの部分が鉢伏城跡に集中しているのは城跡の全容をある程度明らかにしたかったからである。その結果城跡は南北朝期に初現を持つもので（寺井氏の所見）主郭と17箇所の郭があり、逃げ城としての性格を強く持っていることが判明した。なお海抜143mのこの高所に古墳時代の遺構があることも同時に明らかになった。これもトレンチ調査の成果であるから、全面完掘すれば更に新しい所見を得ることが期待される。

ところで、この城跡の調査中に思わぬ発見があった。カウカツE－1の1号墓の検出である。もともと高い盛土も持たず周溝も確認されていなかったから既述のような弥生墳丘墓があること等予想だにしなかった。しかし十文字に設けたトレンチから多量の土器片を検出し、更に拡張したトレンチで石列のあることもわかった。これこそ想像だにしなかった成果であり、のちに周辺にトレンチを入れたが、類例を検出していない。

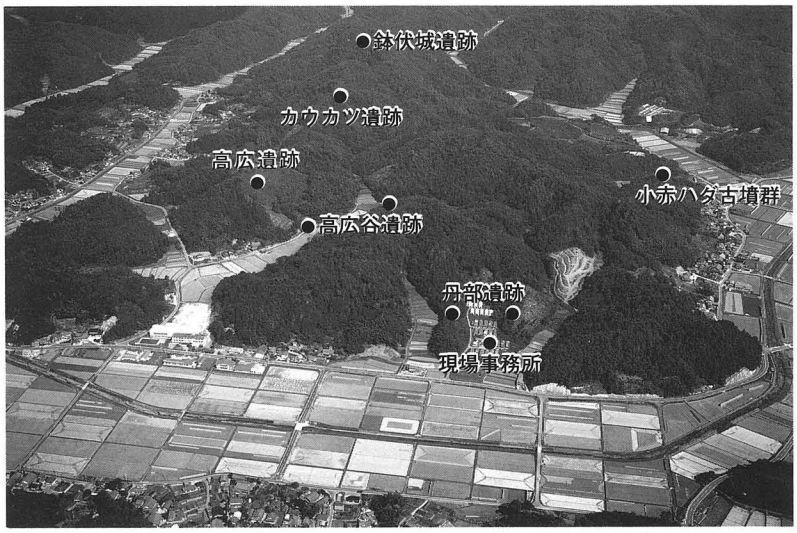
次に重点を置いたのが高広谷遺跡であった。すでに土器片が採集されており、テラス状の地形がみられたからである。トレンチを斜面と平行又は直交に入れて状況をみたが古墳時代初頭から8世紀（奈良時代）に及ぶ遺構の存在が明らかとなった。中には蓋坏の中に樹脂状のものが入った例もある。

このように当地のみならず、地域毎に精査をすれば明らかでなかった遺跡が判明し、同時に人の生活を知る手がかりを得ることは十分考えられる所である。地下に埋蔵されている文化財は発掘によってはじめて明らかになることが多いだけに十分の配慮を要する。トレンチによる試掘調査であったが多大の成果を得たことは特筆されて良かろう。

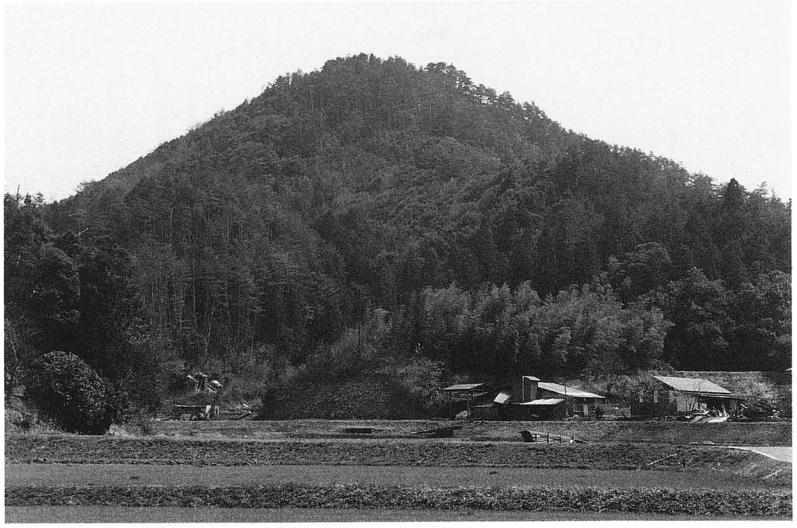
なお古墳群に関しては尾根上に位置するので今後設計変更が一部でも可能なら尾根より下に5mでも下げて設計されることが望まれる。カウカツE－1の1号墓も例外ではない。

（東森市良）

図　　版

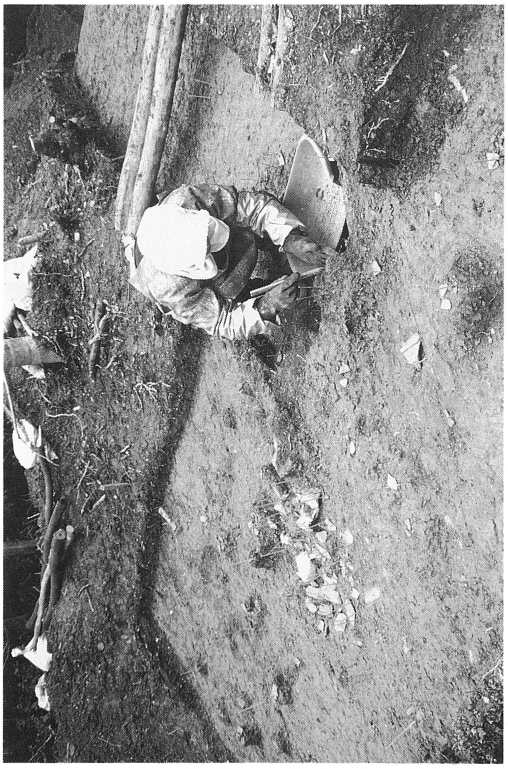


安田地区ゴルフ場建設予定地空中写真（南から）



鉢伏城遺跡遠景（西から）

墳丘上土器出土状況(北東から)



墳丘上土器検出作業(北から)

墳丘上土器・石材(東から)

墳丘上土器検出後(東から)

2-T・墳丘(右)(南東から)

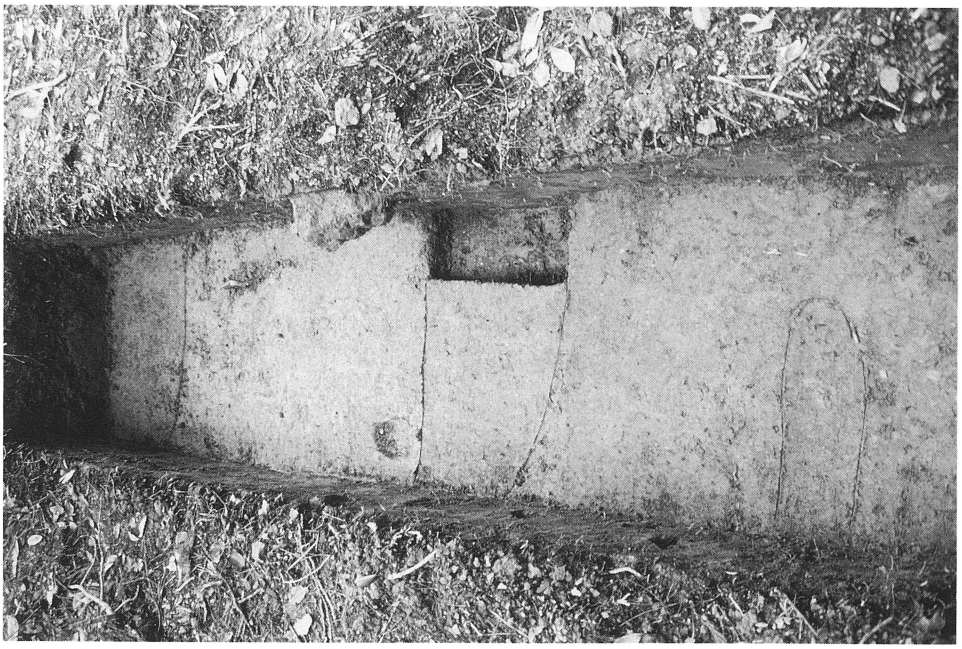
3-T・墳丘貼石検出状況(北から)

5-T・墳丘突出部基盤層検出状況(南西から)

3-T、6-T・墳丘貼石検出状況(西から)

2-T・堀切(左)・溝(右)検出状況(北東から)

15-T・古墳周溝検出状況(北西から)



15-T・墳丘上・土壙(上)・溝(中)(北東から)